

東方反則天

五十嵐 零

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

WARNING! WARNING!

この小説には以下の成分が含まれております。

二次設定、キャラ改変、設定崩壊、パワーインフレ、様々な作品(年代に偏りあり)のネタ、

オリジナルの仮面ライダー、オリジナルの形態、原作キャラヤンデレ化、

キャラ紹介やつたりやらなかったり、会話パートが長くそれでいて戦闘シーンが相当短いうえに雑。(ココ本当に重要)

これらがよろしいホモサピエンスの方々だけ

「ゆっくりしていつてね!!!」

「ミティツティヨー!」

本作の補足説明

- ①、時代が2020の夏です。
- ②、東方Lost Worldの要素が多くあります。
- ③、主人公以外のオリキャラは登場させる予定はありません。
(今のところは) その分、オリライダーやオリジナルフォームの
登場マシマシです。(要するにプラマイゼロ)
- ④、「」がキャラの台詞&名前、○が心の声、『』が機械の音声、
□がスペルカードや能力名・その他
- ⑤、ちよくちよくネタを出すのでうざく感じるかも・・・
- ⑥、作者は初心者です。
- ⑦、できればパソコンで読むことを推奨します。
- ⑧、投稿頻度は不定期です。
- ⑨、アリスはかわいい。

目次

人・物・紹・介	1
序章	
第0話 東方project1966	10
第1話 博麗霊夢2002	14
第2話 八雲紫2003	24
第3話 霧雨魔理沙2002	29
第4話 カミングアウト2020	34
紅霧の章	
第5話 異変	43
第6話 宵闇	52
第7話 融合	59
第8話 狩人	75
第⑨話 序曲・ブリザードクロ	
83	
第10話 前奏・ビッグキング	91
第11話 遭遇	101
第12話 間奏・ジャッジメントス	
ネーク	111
第13話 後奏・398さんは315	115
です!	131
第14話 交響・ライジングになりま	

す。

第15話 組曲・スカーレットヴァン

149

パイア

168

第16話 旋律・ダークデーモン

181

第17話 狂気・デストロイヴァンパ

イア

195

第18話 終曲・エンペラーバット

211

第19話 フィナーレ！異変解決

227

休息の章

第20話 宴会と推しキャラとウオズ

第21話 ルーミアの食料問題

277

260

人・物・紹・介

主人公組

夢解 封太（むかい ふうた）初登場・第0話

・本作の主人公でオリジナルキャラクター。

・（二元）高校2年生で絶賛彼女募集中。

・二つ名は「問答無用の反則ヤロー」能力は「仮面ライダーを司る程度の能力」

・例え敵でも助けたいという博愛主義者。

・故に誰かが怪我をするのは嫌いで

出来る事なら戦わずに穏便にすましたいと考えている。

しかし、幻想郷の住民達は大概が好戦的なためどうしても戦う羽目になってしまう。

↓そのくせいざ戦うと誰よりもノリノリな件

・性格は純粋で天然。基本的に人を疑うことをせず、騙されることもしよつちゆうある。

・但し、ガチキレした時はそれはもう怖い怖い。

・東方の知識はモブキャラや名無しのキャラ以外なら

キャラ知識を網羅しているといっても過言ではない。

- ・その代わり、原曲とかスペルカードは全体の9割は知らない。
 - ・旧作の知識もそこまで知らない。(そこそこの人気キャラなら覚えている。)
 - ・ライダーへの知識量は平成はもちろん昭和も基本的なことは知ってる。
 - ・具体的にいうと、
 - ・仮面ライダーのみならず他の特撮やアニメ、ゲーム、小説にもハマっており
- それでいて夢のために鍛錬していたおかげで運動も出来る
- え? 頭? ... 君のような勘のいいガキは嫌いだよ
- ・散歩中に幻想入りしたせいで碌な所持品もなく、あるのは精々家の鍵とハンカチ
 - ・一応ツツコミ役のはずだがしよっちゆうギャグやパロディをカマシスギイテ
- 別のキャラがツツコむこともしばしば。
- ・幻想郷住民がすぐに弾幕勝負を始めることや的外れな言動に対しては
- 逆に封太がツツコんだり呆れている模様。
- ・なお、好きな人のタイプは????一筋である。
 - ・どうやら死ぬほど苦手なものがあるらしいが...?
 - ・東方キャラ(一部例外を除いて)を頑なに苗字呼びするのは理由があるらしく...?
 - ・名前の元ネタは某東方アプリから「封印」と「解放」。夢と太はなんとなく。

封太「最後雑ツ！（。D。）ノ」

博麗 霊夢（はくれい れいむ）初登場・第0話

・初登場こそ第0話だが本格的な登場は第1話

・皆さんご存知東方の主人公。

・本作は原作に可能な限り近づけて何かとドライな性格（のつもり）。

・食料や水は紫が補給しているため問題はないとのこと。

・ただ、金にはそれなりにがめつい。

・本人曰く生まれてこの方努力したと呼べるような努力をしたことがないとのこと。

・そもそもそういうのを嫌がる性分。努力せよとも強いせいで

努力しないことに拍車をかけている。

・取り敢えず「妖怪だから」という理由で妖怪退治をしている。

封太「理由無茶苦茶すぎるやろ・・・。」

・人を守りたい想いは本物。

・ボケ役のつもりが封太の瞬瞬必生な発想のせいでツツコンでしまうことがある。

・封太に対する現在の印象は「得体の知れない重要注意人物。」

・彼女の経歴に関しては不明なことが多い。

霧雨 魔理沙（きりさめ まりさ）初登場・第3話

- ・原作のもう一人の主人公。
 - ・活発で明るく、優しい。
 - ・でもやたらと傍若無人な面もある。
 - ・霊夢と比べたら融通は利く。
 - ・努力することを惜しまない。
 - ・霊夢とは昔からの親友で霊夢の1番の理解者。
 - ・封太の現在の印象は「めっちゃくちゃ強くて、良いやつ。だけど時々変な奴。」
 - ・霊夢には友情以外の感情を向けているようだが…？
- ←

・結論からいうといくら自分が努力しても霊夢が常にその先を行っており努力していないはずの霊夢が「才能」のおかげで強くなっていることから「才能」を持っていないと思えば入っていた魔理沙は嫉妬のような感情を無自覚で抱いていた。

・しかし、第12話で封太が「努力は決して無駄ではない」ことを証明（物理）したことで自信がついていつも通りの魔理沙に戻った。ヤツタネ！

八雲家

八雲 紫（やくも ゆかり）初登場・第2話

・幻想郷を創った一人。

・大体の二次創作で幻想入りするのはこの人が原因で本作もその通り。

・しかし、経緯が「寝ぼけていた際に誤ってスキマを弄ってそこで偶然、封太が入った」というもの。

・どこかお茶目なところがあると思ったら、色々な予測をしたりつかみようがない。
・何気に霊夢より遅く、魔理沙より早く登場するという変わった順番になっている。
・なお、封太と対面した時のテロップみたいなのは魔理沙の次であったが。

???

coming soon

???

coming soon

霧の湖周辺

ルーミア 初登場・第6話

・金髪ロリショージョの人食い妖怪。

・恐らく「幻想入りしてから妖怪という種族で最初に遭遇しやすい人物」で
1、2位に入っているといっても過言ではない人物。

・普段は「…なのかい。」といった口調で性格はのほほんとしている。
 ↓・・・のはずが封太の力によって様々な変更をされた。

大妖精（だいようせい）初登場・第7話

- ・通称と愛称を兼ねて「大ちゃん」と呼ばれている。
- ・第8話だと思いがちかもしれないが第7話の序盤で一台詞のみ登場したため、厳密には第7話が初登場である。

（何ならこのワンシーンで次がチルノではないとこっさりネタバレしていた。）

- ・性格は他の2次創作らしく、オロオロしてて大人しそうだけど

その本質は他の妖精と比べて極端に変わっていない。

- ・頻度こそ少ないが何だかんだで妖精らしくイタズラをする。
- ・それでも他のモブ妖精や彼女の親友に比べたらマシな程度。

チルノ 初登場・第8話

- ・我らがアイスベキ馬鹿。
- ・やっぱここでもおバカキャラを貫き通している。
- ・大ちゃんとは親友（あくまでも二次設定）。
- ・封太の励ましで「友情の深さ」においては最強と自負する。

紅魔館

紅 美鈴（ほん めいりん） 初登場・第10話

・ 紅魔館の門番。

・ 格闘戦が強く、能力なしでも充分強いという数少ない人物。

・ 初登場時にはまさかの熟睡で主人公組を呆れさせたが

実際は寝たふりをして油断したところを攻めるといふ頭脳派っぷりを見せた。

・ 性格は優しく、紅魔館1の良心と言える。

小悪魔（こあくま） 初登場・第11話

・ 通称兼愛称「こあ」。

・ 性格は分かりやすく言うと言に免疫耐性がない女。

・ 意外なことにナイスバディな娘。

・ ラッキースケベという名の事故のせいで封太を変態扱いしている。

（悪魔だけにあくまでそう扱っているだけで心の中では

そこまで疎ましく思っているわけではない。）

封太「あれは不可！抗！力！です！！しょうがないんです!!」

パチュリー・ノーレッジ 初登場・第11話

・ 種族としての魔法使いであり、生まれつきの魔法使いでもある。

・紅魔館の地下にある大図書館の持ち主。

・自身に関係ないことは一切関わらない引きこもりのような性格。

・本物の魔法使いが読んだ本なら強くなれると確信した魔理沙が盗もうとしたので阻止するために弾幕勝負したがなんやかんやあつて封太と戦闘に。(詳しくは第12話を参照。)

・持病の喘息持ちであつたが何やら夢解が治したようで…？

十六夜 咲夜(いざよい さくや) 初登場・第5話(本格的には第13話)

・紅魔館のメイド長で完璧且つ瀟洒にこなすことを心掛けている。

・主の性格が上から目線なせいで本人も「自分は他の人間よりも強い」という絶対的な自信を持っている。

・しかし、自身の能力を逆手に取られ実質的に能力を無効化されてしまい

最後はライジンググイクサの「ファイナルライジングブラスト」で倒された。

咲夜「ところで結局なごさんって誰なんですか？」

封太「名護さん？名護さんは名護さんだ。最高な人だ。」

咲夜「答えになってない…。」

レミリア・スカーレット 初登場・第5話(本格的には第15話)

・紅魔館の主であり、みんなのまとめ役を担っている。

・初登場とその次までは偉そうで自分こそ最強…という感じだったが

3回目からボロが出始め、本格的な登場ではカリスマこそあれど

根はただの我儘な見た目相応の性格にまであっていた。

・吸血鬼の持ち前のスピードと怪力、超再生能力、エグい魔法力がある。

・そこに加えて能力のせいでチートキャラになってなり弾幕を悉く回避しまくった。

・封太も今回は特に最初から何か作戦を立てていたわけではないため

苦戦を強いられたが、「二周回ってゴリ押し作戦」で辛くも勝利した。

序章

第0話 東方project 1966

突然だけどき、みんなは好きなヒーローとかいる？

海外だとスーパーマンやバットマン

他にもアイアンマンやスパイダーマンとかかな。

勿論、日本にもちやんとそういうのは存在する。

漫画ならONE PIECE、ゲームならマリオシリーズ。

でももつとすごいのがいる。

それが特撮シリーズの作品なんだよ。

ウルトラマンとかスーパー戦隊シリーズとか

色々あるけど俺が1番好きなのはやっぱり仮面ライダーだ。

それが俺の好きなヒーローであり、作品である。

1971年から放送された特撮の代表作の1つ。

そして今もなお、続いている人気作品だ。

因みに2021年で生誕50周年を迎えるんだって。

ハッピーバースデー!!

大体の人は仮面ライダー自体は知っているだろう。

でも所詮は子供向けと思われがちで小学生時代の途中で卒業
というか見なくなる人が多い。

でも断言しておきたい。

あまり仮面ライダーという作品を侮らないでほしい。

胸熱なバトルシーン、複雑な人間関係、時折り出てくるコメディ、
愛されるネタキャラ、先の読めない展開。

上げればきりが無い。

元々昭和時代からトラブルがあって放送期間が開いた時期もあった。
テレビ放送はBLACK RXで終わり、仮面ライダーJを最後に

仮面ライダーシリーズは一旦の終わりを迎えた。

だが終わりは新たな始まりを呼ぶ。

平成に入ってから仮面ライダーが再び作られたのだ!

そうしてできたのが平成一作目「仮面ライダークウガ」。

沢山の子ども達がこの作品を見た。

今でこそ大人になったが当時は仮面ライダーを見ていたことからまた見始めた人。

そして平成に入ってからはいケメン俳優が主演になったおかげで

女性人気もとるようになってきたし、最早大人でも充分に楽しめるアニメだ。

おっとさつきから好きなようにベラベラ喋って

全然自己紹介とかしてなかったな。

正真正銘のはじめまして。

俺の名前は夢解封太（むかい ふうた）

っていうんだ。宜しくな。

もう殆どの人は察してらるだろうけど

ライダーヲタ+ゲームと小説とアニメと漫画が

好きなのを除けば至ってフツートの高校2年生だ。

まあ、ライダーヲタって言っても平成最後のジオウを皮切りに

卒業したんだけだな。

いい加減勉強に集中しないとヤベーし、いかんせん親の目が痛いんだよなあ…。

それにそろそろ見るのをやめようって俺自身が考えてたし、丁度良かったんだよな。

んで、俺が今何してるかっていうとだな…

?? 「霊符 「夢想封印」」

ババババツ！ドツガン！

封太「ひいああ!!」

空を飛んでる少女から必死に逃げてます。はい。

つてえ!なーんでこんなことになつとんのじゃい!

思い返せば今から10分ほど前、

あの時は、まさか、こんなことになるなんて、

思ってもいなツシングー!!

おい、いま案外余裕そうだなとか

白々しいなとかそう思つたら。

続く

第1話 博麗霊夢2002

10分前

封太「まだまだ暑いなあ。」

季節は夏、今は夏休みの真っ只中だ。

朝飯を食った後、散歩に出かけいる。

封太「そろそろ戻るか。」

帰ったらなーにシヨツカー（しよつか）なく。

ゲームに漫画にアニメや小説、色々あるけどやっぱあれだけは外せない。

その名は…

突如足が地面についている感覚がなくなる。

何故なら落とし穴のように開いていたのだ。

俺の真下に。

「何故に下!?!」というツツコミする時間すら

もらえずそのまま落ちてった。

あーれ。

：

……

……

封太「……………」ん。」

目が覚める。

見えたのは知らない天井……ではなく空だ。

封太「どこだここ!？」

起き上がって辺りを見回す。

道路はないわ、建物も見当たらんわ、どーなつてんの？

近くには階段があつた。……めちゃんこ長いけど。

でも他に行くあてもないしとりまその階段を上つた。

封太「づ、づがれだ。どちやくそづがれだ。」

何とか上り切つたがシンプルに長い……!

封太（どうやらここは神社っぽいな。鳥居もある。）

少し先には赤い服の人が掃除をしている。

巫女っぽいけど何か脇が露出しとる。

ナニコレエ。

あんなん一度見たら絶対忘れない服装だろ。

そもそも脇を露出して、巫女としてあるまじき服装でしょ。

・・・話しかけるか。

封太「あのー、すみません。」

??「ん？誰？」

女が反応して振り返る。

封太「あ、始めまして。自分は夢解封太っていうんです。」

??「そう。私はここに住んでいる…。」

封太（こいつが次何言うか予想つくんだよなあ。）

??「博麗霊夢。見ての通り巫女よ。」

楽園の素敵な巫女・博麗霊夢 能力「空を飛ぶ程度の能力」

一般人にはお前が一瞬で巫女とは絶妙に認識しづらいよ。

霊夢「見慣れない服装ね。あんた外来人っていうのでしょ。」

封太「見慣れない服装ってのはそっちもですけどね。」

霊夢「素敵な賽銭箱はあそこにあるわ。」

聞いてねーし。

にしても賽銭か、参ったなあ。

お兄さん散歩だけのつもりだったから必要ないと

思ってお金持っていないんだよあ。

封太「すみません。お金を持ってないから無理です。」

霊夢「チツ。」

聞こえとるぞー。まあいい。

封太「それじゃ博麗さん。」

霊夢「霊夢って呼びなさい。」

封太「博れ 霊夢「霊夢よ。」

封太「…は 霊夢「霊夢。」

封太「……」

カタクナニナマエヨビヲヨウキユウシテ

クルンデスケド。

どーすんねんこれ。

だがしかーし！俺にも拘りがある！

それを曲げる気は微塵子たりともない！

封太 「自分は人の苗字、つまり上の方の名前で呼びたいんです。

だから博麗って呼ばせてください。」

博麗 「博麗って何か堅苦しくていやなのよねえ。

だから霊夢って呼んでもらいたのよ。別にいいでしょそれぐらい。」

封太 「いや博麗って呼びます。」

霊夢 「霊夢って呼びなさいよ。」

封太 「博麗。」

霊夢 「霊夢。」

封太 「博麗！」

霊夢 「霊夢！」

中々お互いに譲らない。

つーか今日で何回霊夢って文字がでたのやら。

霊夢 「んー！もう頭にきたわ！」

そもそもあんた賽銭しなくて気に食わなかったのよ！」

賽銭してないぐらいで気に食わないとか、大分現金な奴だな。金だけにね。

霊夢 「こうなったら…。」

こうなったら？

靈夢「靈符 「夢想封印」！」

ババババツ！ドーン！

弾幕勝負かよおおお!?

封太「ひいあああ！」

とまあこんなわけで第0話の場面に至るつちゆうわけだ。
つて見返してみたら、俺が賽銭できないこと

逆恨みと名前呼びしないから無理矢理呼ばせるために

スペカ放つてんじやねえかああ!!

確かに後者は悪いかもしれない。

でも前者はしょうがなくね!?

それにしても…だーれかたーすけてくれー!

ピカァー

右手が何か光る。

何々？何だ？ナンダ？NA・N・DA？

思わず霊夢も見つめている。

光がおさまるとジオウライドウオッチが

俺の右手にあつた。

ライドウオッチ!?

今度は左手も光ってジクウドライバーが出てくる。

何か…いける気がする！

封太「おい博麗！よく聞け！」

霊夢「何よ！あと私は霊夢よ！」

封太「断言する！俺が勝ったらお前を博麗で

俺のことも夢解って呼べよ！」

『ジクウドライバー！』カチツ『ジオウ！』

封太「スペルカード発動 変身「時の王者」！」

『ライダータイム！』『カメンライダージオウ！』

最後の平成仮面ライダーであり、

平成ライダー20作品目の

仮面ライダージオウに変身した。

霊夢「え、なにそれ？」

えー、祝福の鬼がいないので自己紹介がてら名乗るか。

ジオウ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ時空を越え

過去と未来を解き示す時の王者！

その名も仮面ライダージオウ！

まさに生誕の瞬間である！」

2人「・・・」

ヒュー…

ちよ…何か言つてよ。

霊夢「…よく分かんないけど、

それがあんたの能力なのかしら？」

ジオウ「…多分そうだと思う。」

とりま気を取り直して

ジオウ「行くぞー！」

俺と霊夢の戦いはここからだ！
続く

そして月日が流れ、人間たちは文明を発展させその数を増やしていく。

500年前、人間の勢力が増して幻想郷の社会のバランスが崩れることを憂いた妖怪の賢者・八雲紫は「幻と実体の境界」を張り、妖怪の勢力を

他から取り込むことでバランスを保った。

やがて明治時代になると、近代文明の発展で非科学的な事象は「迷信」として

世の中から排除されていき、幻想郷に住み着いた妖怪達は

人間の末裔達と共に、強力な結界（博麗大結界）の中で生きる道を歩むことになる。

そして幻想郷の存在は人々から忘れ去られた。

先ほど名前が出た八雲紫という人物・・・否、妖怪。

さつきからまずっといままういままういままうこの妖怪こそ八雲紫なのだ。

他の二次創作で、幻想入りする原因は、6割ぐらいがこの妖怪の仕業である、

残り3割が転生によるもの。1割がその他といったところか。

※完全に作者の思い込みです。

今回も例外なく八雲紫によって封太は幻想入りを果たした訳だが、

如何せん本人は焦っている。

どうしたのだろう？

紫side

私は今、霊夢の一方的な攻撃に謎の人物が

必死に逃げている様子を見ているのよ。

私は「スキマ」と呼ばれるものを利用して色々なことができるの。

一例としてその場から動かないままスキマ越しに遠くの状況を見ることができま
すわ。

今まさにそれをしていっているのだけれど、あの人間は私が連れて来たわけじゃない。

かといって自力で来れるわけでもない。幻想郷には二つの結界が存在しているため、突破するのは不可能に近い。

でも彼が何故この幻想郷に来ることができたのには心当たりがある。

それはもう凄い心当たりが。

今朝は私にしては早起きしたのだけれどその際寝ぼけてスキマを弄った気がするの。
でも何を弄ったか分かんなかったしすぐ二度寝したのよね。

・・・いやホントに何やってんのよ私は。

寝ぼけて外の人間を連れ込んだって万が一霊夢に知られようものなら何されるか
分かったもんじゃないわ。

ああ背筋に寒気がするわ。

それにしてもあの二人は何で戦っているのかしら？

靈夢「いい加減に降参しなさいよ!私のことを靈夢って呼ぶのなら今回は

特別に許してあげてもいいわよ?」

封太「やかま神話(しいわ)!俺は意地でも博麗って呼ぶからな!下の名前で呼ばんで!

あとお金は働いてちゃんと賽銭するから(早口)今回は見逃して下さい

お願いします博麗さん!」

・・・ナニコレ。

戦っている理由が靈夢の下の名前で呼ぶのと呼ばないとのいざこざだし、

何か賽銭がどうこう言っていたし、拳句の果てには媚びを売る始末。

とはいえこのまま見逃すわけにもいかないし、何か都合のいい方法は・・・。

そうだわ!あの人間が能力を使えるようにして、頃合いを見て私が上手い具合に

話を進めればいいのよ!

それなら彼の境界を弄って・・・。

「スペルカード発動!変身[時の王者]!」

『ライダータイム!』『カメンライダージオウ!』

ん?何かしらあれは?仮面らいだー?

よく分からないけど一応成功したってことでいいのよね?

後は彼が霊夢に勝つとまではいかなくても何とか奮闘してもらうのを祈るだけね。

(困ったときの神頼み。神社だけに。)

…ん？そういうえばあの人スペルカードの宣言していたけど外の人間だから知らないはず…。

霊夢がしていたから真似た？

…この男、何か裏がありそうね。

続く

第3話 霧雨魔理沙2002

霊夢「この！この！」

霊夢が弾幕を放ってくるけど、

ジオウ「そりやそりやあ！」

ジオウ専用武器「ジカンギレード」でぶった切るなり弾くなりしている。

霊夢「もう、全然当たらないじゃないの！」

アキラメロン。今のお前では俺には勝てん（俺TUEEEE状態）。

でもこのままの状態が続くと泥仕合になりかねんし、とつとケツチャコをつけるか。

ジオウ「スペルカード発動」

『タイムチャージ！ 5・4・3・2・1…』

ジオウ「必殺「ギリギリ斬り」」

『ゼロタイム！ギリギリ斬り！』

横一線で薙ぎ払い周囲の弾幕をまとめて相殺する。

そのせいで辺り一面煙に包まれる。

霊夢「ちよ、何よこれ…何にも見えないじゃない！」

そのすきに俺はジカンギレードをジユウモードにして背後に回る。

そして今度は当てようと狙いを定めて…。

いや、ちよつと待てよ…？

チャージする寸前で踏みとどまった。

もしこのまま諸に食らったらアイツ〇ぬんじやないか…？

それはマズイ。

何とかかすり傷程度にしたいが今の俺にそこまでの高等テクニクはない。

でも正直なところこのまま耐久勝負にするのもどうかと思う。

何かないか？気絶か倒すぐらいの威力しかない武器つて。

…！！あつたわ。

上手くいくか分かんねえけどあの武器を頭の中でイメージする。

ジオウ「装備「ファイズフォンX」」

そうすると手が光って「ファイズフォンX」が出てくる。これこれ。

ブラスターモードにして霊夢にむかってダイレクトアタックだ。

ドゥーン！ドゥーン！

霊夢「え？きやあ！」

何発か命中して霊夢が落ちてくる。

このままでと地面にぶつかると思ったがスキマが出てきて霊夢はそのまま入っていった。

あれ？何かデジャヴを感じる…？

取り敢えず変身解除する。

周りには人っ子一人いな^{???}。「おーい霊夢ー。」おや？誰か来たようだ。

声のした方を見ると空から人がこっちに向かって降りてくる。

うん、常識的に考えると我ながらナニイテンダ。

金髪に金色の目で頭にはとんがり帽子、黒の服に白いエプロン。

極めつけはその帚という、これで魔法使いじゃないならハイクオリティの

コスプレかよ、と思わせるぐらいどこからどう見ても魔法使いの出で立ちをした

少女が降りてきた。

??。「よっ…と。んお？お前は誰だ？」

封太「夢解封太っていうんだ。君の名は？」

??。「私は普通の魔法使いの魔理沙！霧雨魔理沙っていうんだ。宜しくな！」

普通の魔法使い・霧雨魔理沙 「魔法を操る程度の能力」

封太「魔法使い…そうでしょうな。その姿はもう完全に魔法使いだし。」

魔理沙「おおっ？お前見る目があるなあ封太！」

封太「俺のことは夢解って呼んでくれ。あとお前のことも霧雨って呼ぶ。」

魔理沙「えー？何かやだなー。」

オマエモカイ。

魔理沙「そういえば霊夢は？どこにいるんだぜ？」

封太「俺と戦ってスキマに入った。」

魔理沙「…は？」

封太「だから、俺と戦って負けたら何かスキマに入ってたんだよ。」

カラン。

魔理沙が体を震わせながら箒を落とす。

魔理沙「…霊夢が…負けた…？」

そう呟く魔理沙。

多分魔理沙は霊夢に勝ったことが少ない、いや下手すりや一回も

ないのかもしれない。

そんな霊夢が目の前の（一見無能力者っぽい貧弱そうなただの）人間に負けたのだから魔理沙からすれば到底信じられないことなんだろう。

魔理沙「とても霊夢がお前に負けたようには見えないぜ。」

お前の実力が本当かどうか…」

その時！封太に電流走る！

魔理沙「弾幕勝負で試させてもらうぜ！」

ほら。こうなるんやないかとウチは思っとんたんやで。 (何故か関西弁)。
続く

第4話 カミングアウト2020

魔理沙と戦うことになったけど、どのライダーでいこうか。

：やっぱり霊夢にジオウで戦ったしあのライダーでいくか。

封太「霧雨、弾幕勝負を始める前に俺の能力を使わせてもらっていいか？

このまま始めたら何もできずに負けるからさ。」

魔理沙「分かったのぜ。」

封太「サンキュー。それじゃ…。」

もう一度ベルトとウオツチを出現させる。但し今度は赤いウオツチだ。

魔理沙「何だそりゃ？」

封太「ちよつと変わった時計…といったところか。」

『ゲイツ』

封太「スペルカード発動 変身「仮面ライダーゲイツ」」

『ライダータイムー』『仮面ライダーゲイツ！』

ジオウを抹殺するため、未来から来たライダー。それが仮面ライダーゲイツ。

魔理沙「うおお！何だこれは!?姿が変わったぜ!!」

めっちゃや驚いてるやんけ。いや、初見の人にはこれが普通の反応かもしれない。むしろ俺や霊夢が冷静すぎるのかも。

ゲイツ「待たせたな。これでまともな弾幕勝負ができるぜ。」

魔理沙「そうか。それじゃあ早速行くぜ！」

そう言つて魔理沙は箒に乗つて、宙に浮く。…ホントは箒無しでも飛べるんだけどね。

魔理沙「まずは小手調べだ！」

星形の弾幕が降り注いでくる。

ゲイツ「装備 「ジカンザックス」」「Oh!No!」

ゲイツの専用武器、ジカンザックス（おのモード）で弾幕を切り裂いて相殺する。

魔理沙「むう、中々やりやがるな。ならこれでも喰らえ！」

魔符 「スターダストレヴァリエ！」

ゲツ、デカめの星が降り注いできやガール（ガールだけに）。

慌ててゆみモードに切り替える。「You!Me!」

そして必殺技を発動する。

『タイムチャージ! 5・4・3・2・1…ゼロタイム!!』

ゲイツ「必殺 「キワキワ撃ち」」「キワキワ撃ち!」

それでいくつかの弾幕を相殺し、残りはかわした。

魔理沙が降りて来たけどどうしたんだ？

魔理沙「お前ホントに強いな。まさか火力が自慢の私の弾幕を打ち消すとはな。」

ゲイツ「いや〜それほども〜。ってそうじゃない。もう戦わなくていいの？」

魔理沙「ああ、あくまでお前の力が本当に霊夢に匹敵するのか知りたかっただけだからな。」

変身解除↓封太「なんじゃそりや。最初から勝つ気がなかったのかよ。」

魔理沙「あれ？私そう言っただけか？」

じゃあ俺が一人で勝手に勘違いしてただけ…？やだ恥ずかしい！

霊夢「話はそれで終わりかしら？」

刹那、霊夢の声が聞こえた。

次の瞬間何もなかったところからスキマが出てきて霊夢と高rゲブンゲブンじゃなかった。

年p…でもない。妙齢の女性が共に現れた。

魔理沙「霊夢！それに紫も！二人とも今まで何してたんだぜ？」

霊夢「あんたらの様子をずっと見ていたのよ。」

封太「ところでその綺麗なお姉さんはどちら様ですか？」

封太「ちよつと何言ってるか分からないですねぇ。」

そう答えると紫さんはスキマを出してくる。

紫「私のこれをスキマと呼んでいたこと。」

霊夢達が飛んでいることに無反応で何も言わないこと。

そして流暢にスペルカード発言をしていること。

これらを聞いてまだ黙るつもり？」

あちやう。そういう色々ボロだしとったわう。

魔理沙「言われてみればそうだ。外来人のはずなのになんで……？」

霊夢「どういうことか説明してもらおうよ。」

封太「……条件として後で俺の能力が何なのか教えてくれるならいいよ。」

霊夢「それぐらいならやってあげる。だから早く教えなさい。」

封太「夢を壊しても俺は責任取らんからな。」

魔理沙「は？それってどういうことなんだ？」

(ピロロロロロ……アイガッタビリィー)

封太「博麗霊夢ウ！ 何故君達が空を飛んでいるのに何も言わなかったのか

何故俺が簡単にスペルカードを生み出したのか（アロワナノー）

何故スキマという呼称を知っているのくわア！

(ワイワイワイ) その答えはただ一つ… アハア…

博麗霊夢ウ！この幻想郷は！ある一人の人間によって創られた

東方Projectという作品の舞台で！

…俺はその作品の設定や登場人物を知っているからだああああ！！

(ターニツオン) アーハハハハハハハハハハアアハハハハ(ソウトウエキサーイエキ

サーイ) ハハハハハハ!!」

三人「……………」

…ヤベーイ。やりすぎたかも…。

封太「あ、あのー博麗さん？大丈夫ですか？」

霊夢「私達が…作品の登場人物…？」

結構シヨックがデカいっ。ぼい。そりやそうか。

急に自分達が物語の登場人物で自分の人生が

本当の意味で定められたルールを走っているに過ぎないと言われても

すぐには納得できないよな。

霊夢「?よ…そんなの?に決まってるわ。私達を騙そうとしてるのよ。」

ええい！引いてダメなら押すまでたい！

封太「ところがどっこい?じゃあり 霊夢「?だッ!」

おお。食い気味になっていやガール。

霊夢「大体何の証拠のないくせに信じられるわけじゃない!!」

封太「でもさっきの発言以外で納得のいく答えがあるとでも?」

霊夢「っ、そ、それは。」

封太「まっ、信じるか信じないかは自分次第だし。それより約束は約束だ。

俺の能力を調べてくれないか?」

霊夢「…分かったわ。こっちに来て。」

魔理沙「なあ紫、あいつが言ったこと全部ホントか?」

紫「本当のことと見なしていいと思うわ。彼が?をつくような人間には

見えづらいし、辻褄は合っているんですもの。

けど…まさか私達が物語の存在とはねえ。妖怪の賢者が聞いて呆れるわあ。」

なんか札みたいなのを頭に近づけられたら札が一瞬光って治まったけど

これで分かったんか?

霊夢「あんたのが分かったけど…えーつとなんて言うのかしらこれ?」

封太「俺が読むから貸して。」

霊夢からもらって札に書いてある文字を読み上げる。

封太「断言する。俺の能力の名前は「仮面ライダーを司る程度の能力」だ!」

問答無用の反則ヤロー 夢解封太 「仮面ライダーを司る程度の能力」

霊夢 「かめんらいだー？ 何よそれは？」

封太 「んー。分かりやすく言うと、正義の味方が悪の組織と戦うっていう作り話だ。」

魔理沙 「その仮面なんとも私達と同じ物語での存在か？」

封太 「そうだけど少し違う。仮面ライダーは実在している人が演じているところとか。

因みに仮面ライダーという作品自体が始まってから来年で50周年。

東方は今年で25周年を迎えるぜ。」

魔理沙 「50!? そんなに昔から続いているのか!？」

紫 「昭和時代から始まっているのね。」

霊夢 「というか私達もその半分はあるんだ。」

封太 「つてか司るつてどゆこと？ 操るとは何か違うの？」

霊夢 「本来操るは何らかを操作するで、司るだと支配することになるわ。」

紫 「貴方の場合、操るだと仮面ライダーを召喚することになって

司るは仮面ライダーそのものを扱えるというわけでありましょう。」

封太 「なーる。それなら確かに司るの方がええわな。」

そんでもって色々情報交換しようとしたけど、俺が殆ど知っているせいで

会話の9割近くが返答になってしまった封太さんなのでした。
続く

紅霧の章

第5話 異変

side

??? (場所不明)

?? 「お嬢様、手筈は整いました。いつでも計画を始めることが出来ます。」
どこからどう見てもメイドの格好をした女性が言う。

お嬢様 「そうか。」

お嬢様と呼ばれた人物はそう答える。

バサアツツ!

突如、お嬢様の背中から翼のようなものが広がる。

お嬢様 「ならば始めようではないか! 我々による幻想郷の支配を!」

メイド 「畏まりました。」

直後、メイドは姿を消した。あたかも瞬間移動の如く。

???
???
の部屋

カーゴメ カーゴメ

カーゴノナーカノトリーハ

イーツイーツイデーヤール

ヨーアーケーノーバーンニ

ツールトカーメトスーベツタ

ウシロノシヨウメンダーアール

少女の歌声が聞こえる…。

主人公 side

よう。夢解封太だ。

前回から一時間しか経ってねえからまだ博麗神社にいるぜ。

んで、今何してるつかつていうとだな…。

封太「燃え尽きたぜ…真っ白にな。」

縁側にぐでぐとなつてゐる封太がいた。

ふうた はもえつきた。

理由を完結に述べると質問責めにあつてとうとう疲れ切つたのであります。

休んで少し回復したからとりま色々説明すつぜ。

まず俺がここに来た原因らしいが紫さん曰く

「貴方には能力を使えるようになる素質があつた。」らしい。

もし外の世界で覚醒して使えるようになったら問題が発生するだろうから、

そうならないように一回ここに連れ込んだつて。

※封太は騙されてます。

結果は言わずもがな成功し、俺は「仮面ライダーを司る程度の能力」を手に入れた。

それで「能力を永久封印する代わり、元の場所に戻るか。

外の世界から完全に忘れられるけど幻想郷に住むことになる。」

という取引をされたけど即答で「幻想郷に住む。」って断言したぜ☆。
そりやそう答えるわ。

こんなヤベー能力がありながら永久封印&元の世界に戻る？

冗談じゃない!!ぶつちやけ、戻っても勉強とテストの毎日だ。

毎日騒音にも悩まされる。

大学受験もあるし、就職してからも外回りやデスクワークが8時間。

しかも（ほぼ高確率で）残業とかもあるかもだし。

それに引き換え幻想郷はどうだ？

試験も何にもない。そんなに騒音もない。

一応定職とかは持つておくべきだろうけど、ライダーの力がありやあ臨機応変に対応できる。

…何だよ。思いのほか優良物件じゃねえか幻想郷。

もし転生するならこれくらいの争いと平和がある世界がいいかもしんねえ。

他にも俺が勝ったから第1話の約束通りに「夢解」と呼んでもらうことにして

俺も基本的には「博麗」や「霧雨」と呼ぶことにした。

因みに紫さんは俺が幻想郷に住むと断言するやいなや色々やるんが

おありのよう帰ってった。

多分外の世界で俺に関することを代わりに行っているんだろなあ。
ゆかりんガチ感謝。

それはそうと一番の問題は住む場所だ。

他の二次創作では幻想入りして初めて住むところがそのまま自分の活動拠点になる
確率が99.9%もある(封太調べ)。

いやね?別に二人のことが嫌いじゃないんよ俺は。

でも霊夢とは前回の封太劇場でなければなしの信頼がさらになくなったし、

残ってるのは「霧雨魔法店」一択だけど上述したように迂闊には承諾できない。

何なら魔法の研究のためにこき使われる未来が想像できる。

はあく。幻想郷にきても人生楽じゃねえなあ。

その時、不思議なことが起こった。

空が紅い霧に覆われたのだ。

封太「急急急!?!」

慌てて起き上がる。

こ、こ、こ、これって異変ってやつじゃないですかヤダー!

何故!?!なにゆえに今このタイミングで!?!

一ヶ月後なんかだとこい。一週間でも全然オツケー。明日でもギリギリ良い。

でも！幻想入りと同日で異変はないだろうお！

何なん!? スピード感あるのかないのかハッキリしとけや作者ア!

魔理沙「何だ? 空が紅い霧に覆われてるじゃないか!」

居間にいた魔理沙がこつちに来る。続けて霊夢も。

霊夢「これは異変ってやつね。」

知ってる。

魔理沙「よっしゃ! 私と霊夢の出番だぜ!」

約一名お忘れでは?

封太「断言する。俺も異変解決に行くぜ!」

霊夢「え? あんたも来るの?」

封太「味方は多い方がいいだろう? それに内容を知っている人がいた方が

何かと有利なはずだ。」

霊夢「別にいいけど余計なことはしないでよね?」

そんなことする気など滅相もない。

魔理沙「封太も来てくれるなら頼もしい限りだぜ!」

相変わらず魔理沙は優しいな。

封太「よしっ! 場所と大まかな方角は分かるし、さっさと…あ!

やべえ、どうしようか。いや／＼ちよつと待て…いけるかなあ…?」

霊夢「何してんのよ。早くしないとおいてくわよ。」

封太「あー!待って待って!やるから!召喚「ゴウラム」!」

そういうとオーロラカーテン(これからは略してオーテンと呼ぶか)から黒くてデカイクワガタのような生き物が出てくる。

魔理沙「なんだこの黒いの?」

こいつは平成ライダー作目の仮面ライダークウガに出てきた

主人公クウガをサポートした…

?「ワタクシはゴウラム。クウガと共に戦った馬の鎧です。」

…

ゴウラム↓ゴ「あ、失礼しました。ワタクシ、普通に喋れま キエエエエエ

アアアアアアシャアベツタアアアアアアア!!

封太「え!!エ!!ゑ!!喋れるのは知ってたけど、日本語でか!」

ゴ「はい。そうです。それはそうと封太さんの能力に補足があります。

能力名が仮面ライダーとなっているため時代に縛られずあらゆるライダーへの

変身が可能です。TVや劇場版は勿論、小説版、HERO SAGA、

ラストステージ、ゲームでのオリライダー、遊園地でのショー限定の

仮面ライダーにすら変身できません。」

無駄に範囲ドチャクソ広いな。ホントに何でもありやんけ。

ゴ「また、変身やフォームチェンジも、条件や過程を飛ばして使用可能です。

しかし、暴走の危険性があるものや、原典でも問題が解消されなかった

ライダーや形態は封太さんも影響を受けます。

さらに封太さんだけが考えたオリジナルの仮面ライダーも

生み出すことが出来ず。」

フムフム。ライダーオタに分かりやすく言うと、カイザやWがセーフで

ハザードやプトテイラがアウトって認識か。

それでもって俗に言うオリライダーを創れると…。

封太「ごめん。急用が出来た。先に異変の出処に向かっというて。」

魔理沙「え？何でだ？」

封太「やらなきゃいけないことが増えた。それに…博麗はもう行ったぞ？」

魔理沙「え？あ、ホントだ！おい待ってくれよう霊夢——！」

大慌てで魔理沙が後を追いつける。

封太「さあ、改造を始めようか。」

続く

第6話 宵闇

レイマリside

????? 「目の前がとって食べられる人類？」

持ち前の巫女の勘で異変の発生場所を直指していたら妖怪が何か湧いてきた。

魔理沙 「なんだこいつ。食べられる人類って、人食い妖怪か？」

人食い妖怪 「食べたいのだー。月符 「ムーンライトレイ」

弾幕を放ってくるが、霊夢は難なくよけながら近づいて…。

霊夢 「夢符 「封魔陣」

人食い妖怪 「わー!？」

妖怪はあっさりと倒された。

魔理沙 「何だったんだ。アイツ。」

霊夢 「知るわけないでしょ。さっさと行くわよ。」

そして2人はその場を後にした。

封太side

今、俺はゴウラムに乗って移動している。

ゴ「まさかあのようにして使うとは。予想外でした。」

封太? 「まあな。そんな予想外を現実にするのが俺さ。」

博麗神社で色々したあと、あるライダーの能力を使って霊夢達の場所を特定し追いかけてるところだ。

封太? 「神社では少ししかできんかったけど、この異変が終わったら

もつと改竄すつか。」

ゴ「それは死亡フラグでは?」

封太? 「コラコラ。そんなことを言うんじやありません。」

ゴ「封太さん封太さん。あそこに誰かが倒れています。」

ゴウラムの言う通り、金髪に黒い服で頭に赤いリボンを付けてるのが特徴のロリシヨージョがいた。

ゴ「あの子、気絶してますけど何があつたんでしょうか?」

封太? 「大方、あいつらにやられたんだろ。ゴウ君、着陸して。」

ゴ「(ゴウ君? ワタクシのこと…?) 分かりました。」

やることが終わったので変身解除する。

封太「ふい。これでいいだろ。」

ゴ「勝手にしちやって大丈夫ですかね?」

封太「まつ、何とかなるっしょ。」

ゴ「軽いですね…。」

人食い妖怪「っん。んー。」

あ、起きた。

人食い妖怪「あれ、私は？」

封太「おはよう、お嬢ちゃん。俺のことは夢解って呼んでくれ。」

人食い妖怪「ムカイ。そーなのかー。」

はい。ーそーなのかー頂きました。↑いや、どんな単位だよ。

封太「お嬢ちゃんの名前はなんて言うの？」

ル「ルーミアなのだー。宜しくなのだー。」

宵闇の妖怪 ルーミア 「闇を操る程度の能力」

因みに「宵闇」は「よいやみ」ってふりがなだけ。

ル「ねえねえ夢解。」

封太「ん、何？」

ル「貴方は食べてもいい人類？」

Oh…。一見、肉食系女子と思っちゃうけどこの子の場合、

本当の意味で食べられちゃうんだよなあ。

封太「断言する、ルーミア。お前はもう人を食べる必要はない。」
ル「え？何でなのだ？」

封太「俺の能力で人間が食べるものでもちやんと腹を満たせるように

しといたんだよ。一応人間を食べること自体は出来るけど。

ついでに頭のお札がルーミアの意思で好きなように

外せるようにもしといたぜ。」

ル「本当なのか!？」

封太「安心してください。夢解さんは隠し事はしても？は言わない主義だから。」

そう答えるとルーミアが恐る恐る札に手を近づける。

すると手に触れて、ほどかれていく。

知らない人に説明すると、ルーミアについている頭のリボンみたいなのは

実はお札なんだ。

霊夢より前の時代の巫女がルーミアの強大な力を抑えるために使用したもの。

この札、厄介なのがルーミア本人では触ることすら出来ないという点だ。

だから封印を解くには他人の力が必要不可欠なんだけど

そんな悩みとも今日でおさらば。

札がルーミアの頭から完全に外れたその瞬間…。

ズオオオツ！

黒い霧のようなものがルーミアを包んだ。

封太「HEY！HEY！HEY！HEY！HEY！」

来たよ。来ちゃうよ。来ちゃったよ。

霧が晴れるとそこには大人のお姉さんなルーミアがいた。

俗に言う「EXルーミア」といったところか。

封太「よしっ！完全復活EXルーミア様だ！」

なお、作画崩壊は起こりません。

EXル「貴女が言っていたとおりね。力が戻っていくのを感じるわあ。」

おお、声も妖艶の美女って感じだな。

封太「喜んでもらえて何よりです。それでは自分はこの EXル「待ちなさい」

辺？」

EXル「まだ人間を食べることはできるのよね？」

封太「え、ええ。それは可能ですけど人間が食べている食べ物のほうが

集めるには楽だと思いますけど？」

EXル「でも貴女、強いでしょ？なんせ私の封印を解くぐらいだし。」

何故だろう。冷や汗を感じる。

E X L 「今一度聞くわ。

貴女は食べてもいい人類？」

封太 「良くないです！」

大急ぎで（蚊帳の外になっていた）ゴウラムに乗って逃走を図る。

E X L 「夜符 「ナイトバード」」

：がそう上手くいくわけもなく。

ゴ 「このまま逃げきるのは難しいですよ封太さん！」

封太 「わーってる！降りるぞ！」

ゴウラムから降りて「アークル」というベルトを出現させる。

E X L 「あら、それは何かしら？」

封太 「見とってください！俺の、変身！ 「新たなる伝説の英雄」

1番最初の平成ライダー「仮面ライダーークウガ」に変身する。

E X L 「姿が変わった？面白そうね。」

クウガ 「派生 「ドラゴンフォーム」

基本の「マイティフォーム」から

機動力重視の「ドラゴンフォーム」に変わる。

ヒュンヒュン！

そのおかげで弾幕を難なくかわしている。
EXル「へえ。青くなると素早くなるんだ。

でも、これなら無理でしょ？」

そう言うと辺り一面暗闇に覆われる。

クウガ「派生」「ペガサスフォーム」

今度は緑色のクウガ「ペガサスフォーム」に変わる。

それと序盤で 封太？ という表記になっていた正体はこいつだ。

視力や聴力が大幅に強化され、遙か遠くも見渡すことが出来るこの能力で
霊夢達の位置を特定できたんだ。

おい誰だ、今この能力あれば遠距離から風呂覗き放題とか言つたやつ。

暗闇になつてもこのフォームならEXルーミアの大体の位置は特定できる。

…そこだ。

クウガ「必殺」「ブラストペガサス」

渾身の一撃を放つがEXルーミアが出した闇に吸い込まれてしまった。

くっそ。そう一筋縄ではないから。

さーて、どうしたもんか。

続く

第7話 融合

レイマリside

霊夢「ッ！この凄まじい妖気は何!?」

魔理沙「何か、私達を通った後ろから感じるぜ。どうする霊夢?」

霊夢「戻るに決まってるでしょ!こんなの放っておいたら人里が危険だわ!」

霊夢達がいなくなった直後

???「あれ?ここにもいない…。もう、見つからないから腹が立ってきちゃった。

人間が通りかかったら、イタズラしてこの鬱憤を晴らそう。」

何だこのはた迷惑な考えを持つものは。

封太side

望み薄だけどゴリ押し戦法で突破できるか?

クウガ「派生 「タイタンフォーム」」

機動力が低めになる分、驚異の強度を誇るタイタンフォームになる。

EXL「ホントにコロコロ変わるわねえ。」

ガンツ!ゴンツ! クウガ「のわあ!」

通常弾幕で吹き飛ばされる。タイタンがただの弾幕だけでここまでとは…。予想外だ。

クウガ「ルーミア。お前に断言する。」

EXル「藪から棒にどうしたのよ。」

クウガ「俺はあと、全部で5回の強化を持っている。

取り敢えず、1回目の強化からいくぞ。」

クウガ「強化 「ライジングマイティ」

EXル「少しだけ金色になった…?」

クウガ「スペルカード発動! 「ライジングマイティキック」

目の前にリントの文字を模した弾幕出現させ、それを蹴る。

EXル「フン。闇符 「ディマーケイション」

EXルーミアと俺の弾幕が拮抗する。

が、ダメ…ッ!こつちが押し負けて被弾する。

クウガ「ぐはあ!」

ガチかよ…こちとら半径3kmの爆発を出すほどの威力秘めてんやぞ。

クウガ「ならばこれだ!強化 「アメイジングマイティ」

「金のクウガ」と呼ばれる強化フォームのアメイジングマイティにフォームチェンジす

る。

EXル「あらあら？私と同じ色じゃないの。」

クウガ「色は気にすんな！早速だがスペルカード発動！必殺「アメイジングマイ

テイキツク」

ガシツ！ブンツ！ゴシヤアアツ！

フウタハアシヲツカマレナゲトバサレジメントアツイキツスヲシマシタトサ。

いや強すぎだろお!!!こんなことある!?!

EXル「何か思ったより弱くない？私と同じ色なのに。」

黒い!!強いという傾向はあるけどそう言う問題じゃないんです。

あーたが強すぎなだけです。

クウガ「…こうなりや奥の手の一つだ。最強「アルティメットフォーム」

禍々しい姿のクウガの最強形態。「アルティメットフォーム」になる。

EXルーミアも何か感じ取ったのか黒い剣を取り出す。

いい判断だ。感動的だな。

クウガ「だが無意味だ。異能「超自然発火能力」

瞬間、EXルーミアの体が炎に包まれる。

クウガ「必殺「アルティメットキツク」

作戦は至ってシンプル。炎で気を取られているうちに一撃KOする。炎に包まれたぐらいで死にはしないだろうしこれならいけるはず。

しかし……。

ズオオオツ！クウガ「!?」

EXルーミアが自身の体に闇を作り、そこから炎を吸収しやがった……!?

俺の弾幕も剣で即座に斬る。

EXル「はあ…はあ…。今のは少し焦ったけど、闇で吸い込めばどうにでもなるのよ。」

闇の力少々チート過ぎませんかね？

EXル「それで？もういい加減諦めたらどうかしら？人間が姿かたちを変えたぐらいで

妖怪にかなうわけがないのよ。」

確かにこれでは究極フォームでも勝てるかどうか怪しくなってくる。でも…。クウガ「まだだ。まだ終わりじゃない。」

俺は諦めたくない。

EXル「はあ。そんなに食べられるが嫌なの？

言っとくけど久しぶりにこんなに楽しめたから、

今回は特別に見逃してあげてもいいのよ？」

クウガ「違う、そうじゃない。もしこのまま逃げたらお前は人間や他の妖怪を襲うはずだ。

そうなったのは封印を解いた俺だし、何より悲しんでいる顔なんか見たくないんだ。

人も、妖怪も、妖精も、幽霊も、神も、天人も、聖人も皆に笑顔でいてほしいだ！

だから俺は戦う!!」

EXル「そう…。だけど、もう終わりよ。「トワイライトゾーン」」

突如、何も無いところからドアが出現し、その中にEXルーミアが入り込む。

クウガ「???」

すると、真つ暗な奥からギョロ目がでて、そこから極太レーザーが放たれる。

マズイツ！タイタンとアメイジングマイティの時のダメージが蓄積してすぐには動けねえ…。

流石に万事休すと思いい目をつむると、走馬灯のようなものが見える。

自分の家族、友達、先生、ご近所さん、霊夢に魔理沙。紫さんとルーミア。

そしてまだ現実で会っていない俺の推しキャラ。

あくあ、極めて短い未練たらたらの幻想入りライフだったな。

霊夢達には申し訳ないけどこいつのことは頼むぜ。

ビュン！ガンツ！クウガ「のぐあつ！」

瞬間、誰かに突き飛ばされる。いや、どつかれるって表現が正しいか。

兎にも角にもそのせいで変身解除される。

封太「一体全体何だってんだい…。」

俺がもといた場所を見るとそこにはレーザーで体の大半が消滅したゴウラムがいた。

封太「ゴウ君!?お前何やって…！」

ゴ「フウタ、サン。いった、じゃない、デスカ…。」

かなしんでイルかお…みたくないって…。」

今にも鉄くずになりそうなものにも関わらず喋ってくる。

ゴ「ワタク…とって、かなしむ…を、見たくな、たヒトは…」

フウタ、サン。アナタなんで、ス…。」

と、とにかく急いで回復を…。」

霊夢「なにあいつ！とんでもない妖気を感じるのだけど!?!」

魔理沙「あれ？何か見覚えが…。」

上からの霊夢達の声が聞こえる。恐らくEXルーミアのもつ膨大な妖気に気づいて

戻ったんだろう。

だとしたら申し訳ないことをした。

E X L 「!あいつら……!」

気づいたE X Lルーミアが霊夢達のもとに突撃する。

E X L 「さっきの仕返しよ!覚悟しなさい博麗の巫女!」

霊夢 「さっきのつて、まさかアイツ!」

魔理沙 「全然違うじゃん!どうなってんだ!」

霊夢 「そんなことより行くわよ魔理沙!」

魔理沙 「お、おう!」

マッドドクターを呼び出し尚且つコピーウィザードリングで複製させて

計8機で治療して、ひとまずゴウラムの崩壊を防いだ。

封太 「だ、大丈夫か?」

ゴ 「はい。何ともありません。」

ほお、良かった。

封太 「とはいえこのままだとマズいな。

もしここで2人が負傷しようものなら本来の物語からズレが起こってしまう。」

ゴ 「もうすでにズレまくりな気がしますけど。」

封太「それは否定できません。でもどうやって倒すかだよなあ。

ぶっちゃけこのままライジングアルティメットやスーパーライジングアルティメット

に変身して、3対1でもチームワークの問題で上手くいくかどうか…。

そもそも二人には必要以上の負担をかけたくねえし。

かといって一人じゃ正直心もとないしなあ。あー、でもでも…。」

上空では生きるか死ぬかの戦いが繰り広げられてるのに悠長に考える男である。

ゴ「封太さん封太さん。ルーミアさんを倒せるかもしれない方法があります。」

封太「ガチでか？教えてくれ！」

ゴ「オリフォームですよ！今までとは違う別視点からの力ならワンチャンあると思いますす！」

封太「そうか！その手があったわ。」

ゴ「ただ、実現化するためにある程度のイメージが必要なのでその場で作ることは

あまり向いてないですよ。」

ジー…。

ゴ「あ、あの？ワタクシを見てどうしたんですか？」

決めた。クウガのオリフォーム。

霊夢「ちよ、こいつ強すぎでしょ！さつきはあんなに弱かったのに…！」

EXル「さつきやられた分キツチリと返すわ。」

魔理沙「こんなのホントに勝てんのかよ…。」

そんな三人の前に割り込んでくる者が。

「断言する。勝てるさ。俺達がいれば。」

魔理沙「夢解…?」

クウガ「違う。今の俺はみんなの笑顔を守る英雄。仮面ライダーダーククウガだ。

これは俺が独自に考えたその名もゴウラムフォーム。」

「ゴウラムフォーム」

・ゴウラムと融合した特殊な形態。

・見た目は基本のマイティに鎧の如く、ゴウラムがドッキングしている感じ。

・背中にゴウラムの甲羅と前足、両足の横にはゴウラムの足が付いている。

両腕にはゴウラムの頭と角が装着されている。

・最大の特徴として自立飛行が可能になる。時速200kmくらい。

・因みに目の色は黄色

EXル「ちよつともう…。あんたしつこいわよ！いい加減飽きてきたんだけど!?!」

クウガ「飽きないさ。こいつは一味も二味も違うんだし。」

一度、霊夢達のほうへ顔を合わせろ。

クウガ「博麗、霧雨。迷惑かけてごめん。

ここからは俺一人で行くから2人は離れて休んどって。」

そう言われて2人は少し距離をとる。

クウガ「待たせたなルーミア。これで最後だ。」

E X L 「やれるもんならやってみなさいよ!!」

E X L ルーミアが剣を振りかざす。

すぐさま回り込み背後にキック!

E X L 「ぐっ。」

そこからゴウラムの角をクローの要領でラッシュをかける。

クウガ「そりやそりやそりや!」

E X L 「ううう……!」

ガードはしているがこつちが押している。

E X L 「このっ!」

E X L ルーミアが腕を振るうが空を切る。

E X L 「あれ?どこに クウガ「こつちだ。」!?!」

E X L ルーミアが後ろを向くと目の前にはゴウラムを模した弾幕を蹴る直前のクウガ

がいた。

クウガ「必殺 「ゴウラムキック」」

闇を作らせる時間もなく、E Xルーミアは弾幕に直撃！

E Xル「きゃあああああああ！」

E Xルーミアが急降下していく。

ガシッ。クウガ「おつとあぶねえ。」

何とか抱えて地面との衝突を避ける。因みにだが腕をつかんで抱っこみたいな感じだぞ。

お姫様抱っこを期待したやつ残念だったな！↑誰に言うтонねんコイツは。

そのままゆっくりと落ちていく。

霊夢達も地面についてこっちに近づく。

魔理沙「終わったの…か？」

クウガ「一応な。」

霊夢「それよりあなたに聞きたいことがあるんだけど。」

クウガ「何？」

霊夢「あなた、こいつに一体何したのよ。」

クウガ「それは…」

新たなる英雄説明中…。

霊夢「バツカじゃないの!？」

霊夢に怒鳴られた。

そりやそうだ。封印されるほどの妖怪の封印を解いたんだから

怒られて当然のことだ。

霊夢「今回は何とかなったけど全滅したらどうするつもりなのよ!？」

人里に危険が及ぶかもしれないし、異変も解決できなかったのかも

しれなかったのよ!？」

うわー。霊夢さんからのありがたいマシンガンお説教。

魔理沙「そもそも私らにとって都合の悪い封印を解くのに理由が分かんないんだぜ

？」

うぐつ。何故か魔理沙からの方がダメージ大きい。

クウガ「で、でも、未来で封印が解かれてその勝手に負えない状況になるよりかは、

今のうちに解決した方がいいと思つて…!」

霊夢「あのねえ。この封印は先代の巫女が施した封印なんでしょ？」

自慢じゃないけどそんな簡単に解かれるわけがないのよ。」

クウガ「封印ってのはいつかは解ける前振りみてえなもんなんだよ。

だから本当にどうにかするなら封印なんかじゃだめなんだ。」

「靈夢「何それ!? まるで封印が無駄みたいに聞こえるじゃない!」

因みにライダーだと封印ものは必ず解かれる運命にある。」

魔理沙「まあまあ落ち着けよ靈夢。それより封太。」

さつき今のうちに解決すべきとか

言つてたけどどうするつもりなんだ?」

クウガ「それはルーミアを説得する。それで丸くおさめたい。」

レイマリ「今更無理じゃない(ね)?」

ぐうの音も出ません。

E X ルーミア「私を説得つて心臓に毛が何本生えてんのよ。」

そう言つてE X ルーミアが起き上がる。

E X ル「それにしても私は今日で何回眠ればいいのよ?」

たし蟹(笑)。

クウガ「ルーミア。普通の食べ物でもいいのに何故人間を食べるのを

拘るのか。理由を知りたい。」

E X ル「フンツ。単純な理由よ。そっちのほうが楽でいいじゃない。

人里にいない人間なら食べられるし、力を取り戻しているから

うまくいきやすいのよ。」

今、霊夢に睨まれた希ガス。

クウガ「でもそんな頻？に食べられるわけではないはず。」

EXル「ええ、そうね。でも人間の食べ物をたべるにしても問題があるわ。

まず、手に入れるための金はどうするのよ。

それに殆どの食べ物は調理する必要があるから面倒なのよ。

それなら人間食った方が楽って話。」

クウガ「成程。……ルーミアの言い分は大体分かった。

その問題に関して俺が対策をたてるからしばらくは大人しくしといてくれ。」

魔理沙「そうなのか？」

おいそれルーミアの名ゼリフ。

EXル「本当に解決する気？」

クウガ「俺は約束を絶対に守る。」

EXル「アハハッ。じゃあ約束だからね。」

取り敢えずは納得してくれたようだ。

霊夢「ところであんた達、いつまでその姿でいる気？」

「ずつと浮きまくってるんだけど。」

ありや。言われてみればそうだな。すっかり忘れとったわ。

EXL「というか私、また子供の姿に戻れるの？」

クウガ「まずはあの札を想像して。そうすれば手に出てくるから

あとは頭に結びなおすだけでいい。」

言われた通りにしたら、みんなが知ってるロリのルーミアになった。

ル「おお、ホントに元に戻ったわね。すごいわ。」

ふむ。口調や性格は引き継がれるのか。

俺も変身解除する。

ゴ「よりもよってワタクシがオリフォームの一部になるなんて…。」

封太「ごめんゴウ君。今日はもうゴ「今日は人生で最高の日ですよ!!」え?」

ゴ「ライダーのサポートメカ扱いのワタクシがこうなるとは…ツ!

感激です!!」

封太「お、おう。急なことだったけど喜んでくれて何より…。」

ゴ「これはもうワタクシも仮面ライダーになる日も近いのでは…!?!」

封太「おい…。」

ゴ「新番組!」仮面ライダーゴウラム!」なんちやつてく♪H A H A H A!

封太「・・・疲れてんだな。今日はもうゆっくり休め。」
ゴ「?でs」

出現したオーテンを動かして中に入れ込む。

封太「とにかくこれの前に進めるな。」

魔理沙「やつと異変解決を再開できるのか。」

霊夢「もうこれからはこんなことしないでよね。勝手にしたら……」

封太「分かっています分かってます！もう2度としません！神社の賽銭箱に誓います
！」

霊夢「いつか賽銭しなさいよね……」

あ、それまだ引つ張ってたんだ。意外と根に持つタイプかこいつ？

封太「それじゃあ自分たちはこの辺で。また会おうねルーミア。」

ル「うん。また。」

俺たちはルーミアに別れを告げ、異変解決へと再開した。
続く

第8話 狩人

現在、俺たちは異変発生場所と思わしき所に向かっている。

ちよつと方角がよく分かってないので先導は霊夢任せだ。

時々妖精が襲い掛かってくるが霊夢と魔理沙の2人が即撃破している。

ところでゴウラムをしまった今、どうやって移動しているかというとなな…。

霊夢「それにしても…あんたも空飛べたのね。」

封太「まあね。」

そう。生身の状態で飛んでいるのだ。

魔理沙「なあ、夢解。やたら霧が濃いんだけどこれは何なんだ？」

封太「多分「霧の湖」って場所に来たんだと思う。」

異変の黒幕にとっては隠れるにはもってこいの場所だからそろそろ着くはずだ。」

霊夢「やつぱりね。さつきから妖精の数が多いし、私の勘は間違ってたわ。」

魔理沙「そんなんで分かるもんなのか？どんな勘だよ…。」

霊夢「巫女の勘よ。」

まあ、主人公補正つてのがあるからね。仕方ないね。↑お前が言うな。霊夢「ん？あそこに何かいるわ。」

おろ？

霧でよく見えないが確かに人の影が。

もしかして、もしかしたら、もしかするとアイツか!?

さあ皆さんお待ちせしました！お待ちせしすぎたのかもしれない！

アイスベキあのパカのご登場だー!!!

??? 「あ、あのーすいません。」

んんん？なーんか言葉遣いが違うね？

霊夢「誰あんた？」

??? 「え？えーと私、名前という名前がなくて…」

一人称が私、大人しそうな口調、そして名前がない…？

霧が晴れてその人物の姿が判明する。

そこにいたのは黄色のリボンでサイドテールに纏められた緑色の髪。

水色のワンピースに蝶のような羽。

??? 「とっ取り敢えず私のことは大妖精と呼んでください。」

名もなき大きな妖精・大妖精 「能力不詳」

そうだったこの子もいたんだった。

いかせんE Xルーミアのせいで細けえところを忘れとったわ。にしても大妖精（通称・大ちゃん）は原作で不遇な扱いなんだよなあ。

名前もねえ、立ち絵もねえ、能力も明確に明かされてねえ。

スペカもねえ、二つ名もねえ、正式なセリフも用意されてねえ。

……何かガチでカワイソス。何とかしてください神主様。

魔理沙「で、何の用だ？」

大「友達とかくれんぼしていたんですけど見つかからないんです。

髪とりボンが青い子なんですけど知りませんか？」

その特徴はアイツかあの不幸姉しかおらんな。

霊夢「さあ？ここに来る前に倒したかもね。」

オイコラ？つけ。見ろよ、目を開いた大ちゃんの顔を。

封太「大妖精さん!?!です！友達を倒したなんて全て嘘です！

本当はきつと、多分、おそらく、どこかで隠れているかもしれないと思うんだけ

ど

俺の考えだから実際は分かんない……。」

魔理沙「だんだんと自信失うなよ……。」

大「はあく。全然見つからなくて腹が立ってきましたよ。こうなったら…。」
こうなったら？

大「貴方たちにいたずらして気分を晴らします！」

うそーん…。(。口)。。まさかの大ちゃんとバトルって。しかも八つ当たりじゃん。
いや、冷静になれ封太。

大ちゃんの性格は原作で説明されていないが故にいたずらなんかしない大人しそうな
お姉さんキャラになってるけど、所詮は二次創作の作者が考えたイメージに過ぎな
い。

元々妖精はいたずら好きだし、大ちゃんもいたずらすることはあるんだろうな。

封太「じゃあ俺が戦う2人は休んどって。」

魔理沙「丁度良かったぜ。さっきからずっと妖精どもを蹴散らしてばっかで

少し疲れてたしな。」

霊夢「ていうか何であんたは何もしなかったのよ。」

封太「いや、2人が速すぎて俺の順番なかったしなあ。」

霊夢「そうなのね。とにかくさっさとやっておしまい。」

封太「アラホラサツサー！って言わせんな。」

霊夢「あんたが勝手に言ってるでしょ!？」

さて、軽いコントも済ませて戦闘開始DA!

封太「ちよつと待ってね。」

スperlカード発動 変身「仮面ライダーハンター」

服がぴっちりとしたスーツに変化し、空中に金属のパーツが俺を囲むように出てくる。

それが体に装着されて変身が完了する。

????? 「断言する。仮面ライダーハンター。それが今の俺の名だ。」

仮面ライダーハンター

・クウガのオリライダー。

・見た目は警察官の特殊部隊がかーなりメカメカしくなった感じ。

・色は限りなく黒に近い紺色（暗いところとかで視認されづらいようにするため）

・武装は原作で警察達が使っていたものを一通り使える。

・原作キャラが変身するなら一条さん一筋。

大「仮面：なんです？」

ハンター「二度は言わん。今から狩られる者に。」（ジャキツ）

背中から銃をとりだし構える。

大「と、とにかく行きます！」

大ちゃんが弾幕を放ち、俺はかわしたり撃って相殺して距離を詰める。

これこれ。俺が求めてた弾幕勝負ってこういうのなんだよ。

大量の弾幕を一人でわちやわちやしながら避けていく。

距離が近くなったのでそろそろスペカ発動すつか。

大「ひいひい！スペルカード発動！ 交換「チェンジリング」」

大ちゃんがスペカを発動すると、赤青緑の色をした鳥がフヨフヨとこっちに近づく。

俺の頭上に来ると、錘（16t）に変わってあぶねえ！

咄嗟に横にずれる。

ハンター「スペルカード発動。必殺「筋肉弛緩弾」」

命に別条はないが、筋肉が弛緩（しかん）し、しばらくの間動きを封じる特殊な効果

を持つ弾幕を

ハツシヤア☆する。

大「きやああああ！…な、何ですかこ…れ…。からだか…？」

ハンター「あ、大丈夫!?ごめんね！少しの間体が動かなくなるけど

死にはしないから。」

大「え!?!私、体が動かないんですか!?!」

変身解除↓封太「ホントにごめん！でも5分ぐらいで元に戻るから！

あー…これはもう戦わざるをえないかも。

大「チルノちゃん気をつけて！その人凄く強いの！」

チルノ「大丈夫、あたい最強だから！」

あれ何だろう？そのセリフで脳裏に目隠しした男性の姿が…。

まあいいや。どうせやることは決まってるし。

封太「断言する。今の俺は負ける気はしねえぜ。」

続く

第⑨話 序曲・ブリザードクロー

チルノ「最強のあたいが放つ弾幕をくらえー！」

そうチルノが高らかに宣言する。

チルノ「氷符 あいしくr」

ビュンビュン！

チルノ「うわあ！なんだなんだ!?!」

謎の飛行物体がチルノの周りを飛んで妨害する。

それは俺の近くに来る。白い蝙蝠のようなやつだ。

霊夢「なにこの小つちやいの。」

ドン！ 蝙蝠が白いエネルギー弾を一発かます。

霊夢「ちよっ!?!危ないじゃない！」

蝙蝠「小つちやいのと呼ぶな。」

我が名はレイキバット。小娘よ、その矮小な頭に覚えておくがいい……！」

魔理沙「こいつやけに偉そうだな……。」

封太「今日からお前、通称と略称と愛称を兼ねてレイキバナ。」

レキバ「承知した。マスター。」

霊夢「…。」

大「兼すぎですよ…。」

俺には従順だもんねー。

封太「変身するぜレキバ。」

レキバ「行こうか。華麗に激しく……！」

レキバが俺の左手を噛む。

封太「変身『仮面ライダーレイ』」

平成ライダー9作目「仮面ライダーキバ」の映画に登場した「仮面ライダーレイ」に変身する。

魔理沙「今度は白いな。ホントに色々な姿に変わるんだな。」

チルノ「何だそれは？」

レイ「仮面ライダーっていうんだ。俺の能力だよ。」

チルノ「かれないなあ？」

レイ「全然違う!!とにかく行くぞ！」

チルノ「あ、そうだった。じゃあ今度こそ！氷符『アイシクルフォール』！」

そうやってチルノが弾幕を放つ。

俺は攻撃するために距離を詰める。詰めるんだけど…。

レキバ「まさかこうなるとはな…。予想外だぞ!!」

レイ「うん。俺も？ だろって言いたい。」

そう。距離詰めたせいでチルノの真正面にいるのに全然当たらないのだ。

原作でもイージーモードに限り、チルノの真正面が安置だったけど、

ここでもそうなのかよ…。

チルノ「…何で当たらないんだ!?!」

そりゃ真正面にいるのにそこにだけ放っていないんだから当たんねえだろ。

レイ「断言する。目の前に攻撃しないと当たらないぜ。」

チルノ「…!」

気づいたようだがもう遅い。

フェツスルを持ち、レキバに吹かせる。

レキバ「ウエイクアツプ!」

両腕の拘束鎖（カテナ）を外して巨大な爪を出現させる。

レイ「必殺『ブリザードクロー・エクスキュージョン』」

爪から斬撃する形で弾幕をだし、攻撃する。

チルノ「うわっ!」

チルノが氷の盾を作るがそんなことお構いなしに削りまくる。

レイ「フツ！ハツ！ホツ！セイツ！」

チルノ「うううっ…！」

レイ「おりやあああああ！」チルノ「うわあああああ！！！」

大「チルノちやあああん！」

チルノが地面に倒れる。

レイ「勝負あつたな。」↓からの変身解除。

チルノ「ま、まだだ。」

は？いやいやいやいや、もう俺の勝ちでしょ。

チルノ「まだその2人は戦ってない！」

そっちかい。でもどうせ…。

チルノ「凍符」「パーフェクトフリーズ」

霊夢「夢符」「封魔陣」

ピチューン！

チルノ「雪符」「ダイヤモンドブリザード」

魔理沙「魔符」「スターダストレヴアリエ」

ピチューン！

ほらな、案の定瞬殺。

霊夢「弱いわね。」

魔理沙「楽勝だぜ。」

流石に3連敗したならもう諦めただろう。

封太「チルノ。もう終わりでいいか？」

チルノ「……うっ。」

ん？

チルノ「ひっぐ…えっぐ…。」

!?泣いてる!?

封太「ちよっ!?どうしたんだ急に!」

チルノ「だってえ、仕返しできないし…。あたい最強じゃないよお…。」

マズツた。こういうガチ泣きは反応に困る。

霊夢「(ボソボソ) ちよつと夢解、あんたが何とかしなさいよね。」

封太「(ボソボソ) え、俺!？」

霊夢「(ボソボソ) 元はといえはあんたのせいですよ。責任取りなさいよね!」

うくんお前らも倒したし微妙に違うような気がするけど…。

封太「あく、チルノ。その、何だ…。」

チルノ「何だよ。もうあたいのことはほっといてよ……。」
大分いじめてんな。

封太「……チルノ。お前に断言したいことがある。」

お前はこの幻想郷ではかなり弱い方に入る。」

チルノ「お前……ッ！ 封太「但し！」？」

封太「お前は最強と誇っていいのが2つある。」

1つは妖精という種族では最強ということ。

2つ目は友情の深さが最強ってことだ。」

チルノ「ゆう、じょう……？」

封太「友達を大切にする気持ち。その最強がチルノって言うてるんだ。」

お前は元々大ちゃんという大事な友達がいじめられていたから

俺たち3人に立ち向かっただろ？」

そんなことが出来るのはそれだけ友達思いつてわけだよ。

まあ、色々言ったけどとにかくお前は友情においては

誰よりも最強って誇っていいよ。俺が言うんだから自信を持って。」

しばらくチルノは黙っていたが、俺の言葉を理解したのか笑顔になった。

チルノ「わかった！あたいは友情においては最強！」

あたいったら最強ね！」

よっ！名言！

封太「それはそうと大ちゃん。そろそろ体が動かせる筈だよ。」

大「あ、ほんとだ。」

チルノ「元に戻って良かったよー！大ちゃん！」

大「う、うん。そうだねっ！」

もう大丈夫だから心配しないでチルノちゃん。」

妖精同士のハグ。うーん絶景かな、絶景かな。

封太「ほんじやま自分達はそろそろ行くぜ。」

チルノ「どこに行くんだ？」

霊夢「私達は今、異変を解決してる最中なのよ。」

魔理沙「空が紅い霧で覆われてるだろ？」

こんなことをした犯人を探して止めてもらうんだぜ。

私の力でな。」

封レイ「オイ。」

大「そうだったんですか。頑張って下さいね。」

封太「それじゃ！バイバイ！」

チルノ「またなー！」

大「お気をつけてー！」

こうして、俺達は別れを告げ異変の場所に向かった。

第10話 前奏・ビッグキング

??? (場所不明)

お嬢様「??。ちよつといいかしら。」

お嬢の呼び出しに瞬間移動の如くメイドが現れる。

メイド「はい。何でございましょうか。」

お嬢様「今しがた運命を見たのだけれど招かれざる客が3つ来るわ。」

その中に変わり種が1つ。」

メイド「変わり種? どういうことでしょうか?」

お嬢様「奴の運命が珍妙なの。」

そいつは特殊な力の持ち主で、私の悩みとこの異変の両方を解決するつもりみ

たい。」

メイド「そんなことが…!」

お嬢様「できるのよ。その人間にはね。」

メイド「それで、どういたしますか?」

お嬢様「そうねえ…。悩みを解決させられると私の今回の計画が否定されたようで癪

だし、

残りの2人は普通に厄介者だから3人まとめて歓迎しなさい。」

メイド「承知いたしました。メイド長の名に懸けて！」

そしてメイドはまた即座に消えてしまった。

封太 side

オツス、オラ封太。

いよいよ異変の現場に到着したんだ。

ここにはつえーやつがわんさかいるからオラわくわくすつぞ。

霊夢「それで、あんたがさつき言っていた今回の異変の発生場所、紅魔館。

ここであっているのよね？」

封太「うん。目に悪いくらい紅いし間違いないと断言できる。」

道中、二人にはネタバレを回避しつつ、色々と説明していた。

魔理沙「この館の主は厄介な能力を持っていて、そいつに仕えるやつらも強敵なんだ

よな？」

封太「そだよ。門番とか。」

魔理沙「私たちの前にいるこいつがその門番だろうけど……。」

俺たちは紅魔館の門に立っている人物を今一度見る。

門番「すう…すう…。」

霊夢「寝てるね。」魔理沙「寝てるな。」封太「寝てますね。」

立ったまま寝ていた。完膚なきまでに…ッ!

というか少し幻滅した。せめて異変の時くらいは起きてほしかった。

封太「これ、上から飛んで入りませんか?」

霊夢「そうね。そうしましょ。」

まあ、戦う回数が減ったと思えばいいか。

そうポジティブに切り替えて上がろうとすると…。

門番「破ッ!」

封太「なんで俺!?!」

拳が振られて寸でのところかわした。

魔理沙「コイツ…!寝ていなかったのかよ!?!」

門番「一体いつから私が寝ていると錯覚したんですか?」

封太「何…だと…?」

って言わせんな。

門番「貴方たちがここに来ることは目で見えない距離から既に分かっています。」

ですから寝たふりをして奇襲の機会を伺っていたのです。」

霊夢「随分姑息な真似してくれるたわね。この妖怪が。」

門番「確かに私は妖怪ですけど紅美鈴という名前があるのでそう呼んでください。」

華人小娘 紅美鈴（ほん めいりん）「氣を操る程度の能力」

さつき幻滅したというのは撤回するわ。思いのほか頭脳派だわ。

美鈴「この建物、紅魔館は今大事な計画の最中なんです。

何人たりとも通すわけには行きません！」

封太「すみませーん。ちよつと今から話し合いしまーす。」

美鈴「え？あ、はいどうぞ……？」

封太「どうする？今回は誰が行く？」

魔理沙「夢解が行けよ。」

封太「ええ？またあ？」

霊夢「さつき殴られそうだったし、仕返しがてら行ってきたら？」

封太「まあ言われてみたら確かにそうだな。よし、会議終了！」

封太「とにかく、俺が勝つたらここを通らせてもらいますね。」

美鈴「…実力行使ですか。いいでしょう。」

封太「では召喚 「アークキバット」」

小さめのオーテンから銀色の蝙蝠が現れる。

アークキバット「な〜んで〜すか〜?」

封太「変身だ。力をかしてくれ。」

アークキバット「ていうかあ〜、わ〜たしの略称はな〜んなんですか〜?」

封太「…略称?」

アークキバット「だつて〜。レイキバットにはつけたのに〜私にはないな〜んてふこ〜へいだと

「思いませんか〜?」

何だろう。コイツめつちやメンデーなやつだな。

封太「ん〜じゃあ…アクバで。お前の通称はアクバだ。」

アクバ「ア〇バじゃないんですか〜?」

それは地名の略称と被るから普通にアウト。

アクバ「まあい〜や。じゃあ行きますか〜、ドロン・ドロン〜。」

封太「おしやべりはおしまいだ。紅さん、断言する。こいつはスケールがデカいぜ。」

アクバが囁んで、ベルトに装着する。

アクバ「へ〜んし〜ん」

封太「変身 「仮面ライダーアーク」」

少し宙に浮きながら変身が完了する。

霊夢「いや、これ…。」

美鈴「で、でかい…！」

魔理沙「いやデカすぎだろ！スケールがでかいってそのままの意味かよ!？」

そう仮面ライダーアークはデカいのだ。その身長3.2m。

もつとデカイライダーもいるけどコイツはまなじ中途半端な分、恐怖感が増す。

美鈴「たとえば自分より巨大だろうと引く気はありません！」

封太「断言する。良い台詞だ。感動的だな。だが無意味だ。(´U´)」

美鈴「やってみないと分かりません！紅美鈴参ります！」

美鈴さんが俺に怒涛の連続攻撃を仕掛ける。

美鈴「タア！ソリヤア！ハアア！トワア！ホワタタタタタタタ！アチヨォー！

チヨレイー！」

虹色の煌びやかな弾幕がアークに命中するがびくともしない。

アーク「断言する。今、何かしたか？」

美鈴「ならば！虹符 「烈虹真拳」！」

スペルカードの弾幕が放たれるがやはり効かない。

アーク「イタクナイ♪（スクラツシユドライバーの「潰れなくい！」みたいな。）」

美鈴「次はこれです！気符 「地龍天龍脚」！」

美鈴さんがキックするがやはり駄目。

魔理沙「全然効いてないぜ…。」

霊夢「デカすぎて今の夢解にはダメーじが入らないのよ。」

美鈴「こうなったら、我が最終奥義！ 『真紅星脈地転弾』!!!」

アーク「え、何？ 長くてよく分からないんですけど」 ドツゴオオオオオオオッン！

モロにくらい、爆発する。

霊夢「ゲホッ、ゲホッ。煙が酷い…！」

魔理沙「む、夢解のやつは大丈夫なのか？」

美鈴「これなら少しは…。」

煙が晴れるとそこにいたのは…。

アーク「断言する。何なんだあ今のは…？」

平然としたアークがいた。

美鈴「なっ…!？」

アーク「奥義も使っちゃったし、トドメをさすよ。装備 『アークトライデント』」

三又の槍を地面に刺しこの場所限定で軽い天変地異を起こす。

美鈴「くっ！ 今度は地震か!？」

ちなこれは必殺技の妨害を妨害するためにやってる。↑ややこしいわ。

この間にフェツスルをアクバに吹かせる。

アクバ「ウエ〜イクア〜ツプ！」

アーク「うおおお！」

アークから翼が生えたり、変化していく。

アクバ「Go to hell!!」

強化形態である「レジエンドアーク」になる。

アーク「ラスぺ発動 必殺 「ウルティマデッドエンド」」

巨大な光弾を放つ。

美鈴「ぐっ、うぐっ……。うわああああああ!!」

一瞬だけせき止めたけど、すぐに吹っ飛ばされた。その勢いで門が壊される。

つーか、よくあのバカでかいのを受け止めようと考えたな。フツーに考えて無理や
ろ。

霊夢「終わったようね。」

変身解除↓封太「だな。」

魔理沙「じゃあ先に進むか。」

そうして、2人は先に進む。

俺もちよつとだけ後ろについて行って、止まる。

2人は俺が止まったことに気づかずそのまま進んでいく。

10分後

美鈴「……………つ、……………うん。」

封太「あ、目が覚めましたか？」

どうやら意識が戻ってきたっぽいな。

美鈴「あ、あなたは先ほどの…。」

「そういえばお名前は伺っていませんでしたね。」

ありや、確かに今回は自己紹介忘れとったわ。

封太「これは失敬。自分の名前は夢解封太。」

どうか夢解と呼んでください。

ついでに言うと、紅白で脇を出している巫女が博麗霊夢。

白黒で魔法使いな見た目の金髪が霧雨魔理沙って言います。」

美鈴「そうですか。…あの2人は？」

封太「先に行っちゃいました。」

美鈴「そういう貴方は何でまだここに？」

封太「紅さんの怪我と門をなおしただけです。」

美鈴「それはありますがどうございます。…え、怪我？門？」

そう言うと美鈴さんは自分の体と門が無傷なことに気がつく。

美鈴「何で？ あなたは侵入者で私はこの門番。敵同士のはずですよ？」

封太「言うてあなた、そんなに悪い人じゃないでしょ？」

それに俺は敵味方関係なしに困った人を助けたいんです。」

美鈴「…フフツ、変わった人ですね。」

褒め言葉として受け取っておこう。

封太「もう大丈夫そうなので中に入らせてもらいますよ。」

美鈴「そういう約束でしたね。」

封太「断言する。お邪魔します。」

俺は玄関を開けて紅魔館へ入っていった。

続く

第11話 遭遇

紅魔館・・・の地下

魔理沙 side

魔理沙 「くっそ……！こいつ強い……！」

??? 「いい加減降参したらどうかしら？」

魔理沙 「冗談じゃない！こんなところで負けてたまるか！」

あれから霊夢と別れ、私は地下を探索することにした。

何故か夢解がいなかったけどな。

その途中、この部屋を見つけて「こんなに大量の本があるからちよつとくらい取つても
バレないよな？」

と思つたら生まれながらの魔法使いと名乗るやつに見つかつて、

「そこまでよ！盗むのなら許さないわ！」とか言つて現在戦っている最中だぜ。

しかし、生まれながらにというのは本当のことだったみたいだ。

正直なところ、強い。こういう時にこそ夢解の出番だけど、あいつ今頃どこで油売つ

てるんだ？

封太 side

よおく…みんなあゝ…。この下り3回目だけど夢解封太だぜえゝ…。
紅魔館にお邪魔して地下の方に行こうとしてんのだけど…。

封太「はくれゝい…きりさめゝ…どこにいんのゝ？」

ゆけどもゆけども同じ風景。地下への入り口なんか見つかりません。
てか疲れた。もう足が棒のように納豆。

封太「どんだけ広いんだよここ。いくらなんでも拡張しすぎでしょさくyおおつとあぶいあぶい。」

ついネタバレするところだったぜ。」

いやもう大多数の読者は分かっているよ。by作者

封太「オイ！なんつー身も蓋もねえこと言ってるんだよ!!」

??「もうダメだあ…おしまいだあ…。」

逃げるんだあ…勝てるわけがないヨ！」

封太「てゆーかオメーがこつち側にくんじゃねーよ！何だ!?!いつつも次回予告のおまけトークに

10回連続で出演したから記念に本編に登場ってか!?!ありえねえんだよそんな

こと!!

番外編とかならまだしも ?? 「あ!ちよつとそこどいてくださーい!」 んあ?
なんd」

?? 「ひやあああ!」 封太 「ふおあつ!」

?? 「いったたたあ…。もうどいてく…。だ…。」

封太 「急に来たそつちがわ…る。」

そこでお互い瞼を開けて今の状況を見て絶句した。

唐突なんだけどさ、みんなってラッキースケベってしってるかな?

恋愛とかラブコメでありがちないイベントのことだよ。

分かりやすく言うと男女がぶつかって男が女のパンツを見ちやったり胸を触っちゃうんだ。

へへッ。正直我々男子からしたら自分もそうなりたいとか思っちゃうよね。

でも何事にもタイミングが重要だよ。

さて話を戻して簡潔に説明しよう。

俺の顔に上から頭に羽のある女の胸（弾力ムニムニ、サイズデカめ）が当たってた。

羽女&封太「…。」

俺の顔に上から頭に羽のある女の胸（弾力ムニムニ、サイズデカめ）が当たってた。

こっ、コイツ…!!

封太「ムツツリ男じゃねえ！俺には夢解封太っつー名前があるんだ！羽娘!!」

羽女「怒るところココ!?ていうかそれを言うなら私だつて羽娘じゃなくて小悪魔、

通称・こあつて名前があります!」

名もなき小さな悪魔 小悪魔 「能力不明」

封太「だから断言する。変態じゃねえ夢解だ!」

こあ「どうでもいいですよ！胸触ったんだから死んで償ってくださいよ!」

封太「はあ!?いくら何でも死ぬのはやりすぎじゃねーか!」

こあ「ああもう五月蠅い！変態は消毒ですー!!!」

直後、こあから弾幕が放たれる。

封太「でえーい！こっちもやけくそじゃーい！変身！「仮面ライダーゲブロ」!」

平成ライダーあるあるの変身中は半ば無敵状態を利用しつつ変身する。

仮面ライダーゲブロ

本作2体目のオリジナルライダー。モデル作品はクウガ。

ゲゲルをするためではなくあくまでクウガを殺すための存在（というオリジナル設

定）

見た目はグロンギがそれなりにライダーっぽくなった感じ（語彙力皆無ですみませ

ん。

グロンギが共通してできる超再生能力で（現代の世界の）ちよつとやさつとの攻撃は効かない。

またフォームチェンジも可能。

名前はグロンギの体内にある「魔石ゲブロン」をもじったもの。

ゲブロ「派生」「グリフォンフォーム」

基本形態の「マルチフォーム」から「グリフォンフォーム」に変わる。

飛行能力を得たことで優雅に回避していく。

こあ「こうなつたら！粉砕「パシフィス・ストライク」！」

こあが高く舞い上がったと思つたら突進してきやガール!!

ゲブロ「ヤベツ！派生」「ドワーフフォーム」

ドワーフフォームの能力で咄嗟に小さくなる。

こあ「あれ、どこいった？」

フツフツ。小さくなりすぎたことで見失つていやガール。

こあ「姿が見えないとあたるものも当たらないし…どこいったのー!？」

どここと言われて「こつこでーす！」って言う馬鹿はいねえよ。

但し、小さくなつたら攻撃力も相応に縮小化して使い物にならないので、解除する。

こあ「あ、いた。今度は外しませんよ！昇華「メガラニカ・インパクト」！」
今度は開いた本をデカくしてそのまま突っ込んでキター！ブツクにパツクンされ
ちやうじゃん！

ゲブロ「派生「サラマンダーフォーム」」

体が赤くなつたサラマンダーフォームに変わる。そしてそのままスペカ発動に移行
する。

ゲブロ「そしてスペカ発動。必殺「ファイヤーサラマンダー」」

拳に弾幕を纏わせ、ロケットパンチの如く飛ばす。

こあ「あつちやああああああああああああああああ!?!」

おお、燃えとります。いつもより多く燃えています。

本が。

こあ「あつつう〜い。あなたってホントに興味悪いですよね。」

心外なんですけど。

こあ「三度目の正直。決めます…!」

どうやら最強の技を使うようだな。ならこちらもそれに答えなければ。

マルチフォームに戻り、足に弾幕のパワーを込める。

一方、こあは本から黒い剣を出してくる。すごく…大きいです…。

ゲブロ「ラスペ発動。必殺「ゲブロキック」」

こあ「「夢見るネクロノミコン」」

俺のキックとこあが持つてる巨大な剣と激突する！

ゲブロ「ぐぬぬ…！うおおお！」

剣を弾き、辛くも勝利する。

こあ「そ、そんな…負けるなんて…。」

ゲブロ「はあ…やつと観念してくれたか。」

こあ「今度は何する気ですか…？まさかエロ同人みたい…!？」

…せめて今回のことだけでも許してもらうか。後で掘り起こされるのは勘弁だし。

変身解除↓封太「ええと、その…ぶつかってごめんなさい。」

こあ「ほえ…?」

封太「事故とはいえ人の体に触れて謝罪の一言もなかったこつちが悪いです。

すみませんでした。」

こあ「…。分かってくれればいいんですよ。私も言い過ぎたし。」

ホッ。これで大丈夫かな…？

封太「あ、それはそうと何であんな猛スピードで飛んでたんですか？」

こあ「それはパチュリー様が侵入者と戦っていて、巻き込まれないように逃げるため

で…」

そこまで言って急にこあさんの顔が青ざめる。てか侵入者つてもしや…。

こあ「そうだった…忘れてた。」

封太「あの！俺をそこまで案内してさい！」

こあ「はあ!?!何言ってるんですか!?!正気ですか!?!死ぬ気ですか!?!」

封太「そこを何とかお願いします！俺なら2人の戦いを最小限に抑えそうなんで！」

こあ「う、うんそれなら。」

とまあ、そんなわけで地下まで案内してもらえたんだけど…近づくとつれてこあさんの顔が

この世の終わりみたいな顔してた。

こあ「こ、ここです。(ガクブルガクブル)」

あんた震えすぎやろ。落ち着け。

封太「案内してくれてありがとうございます。もう逃げるなり好きなようにしてください。」

こあ「ではお構いなく…避難する準備だあ！」(ビューン!!)

取り敢えず中に入るか。

入るとさっきの俺たちのバトルとは次元が違うのがそこにあった。こりや逃げたく

なるわな。

??? 「いい加減に大人しくしてくれないかしら？この盗人。」

魔理沙 「お断りだぜ！あと私は盗むんじゃない！死ぬまで借りるつもりだ！」

うん。とりま魔理沙は助ける&説教しマッスルカ！。(笑顔ながら静かな怒り)

続く

第12話 間奏・ジャツジメントスネーク

封太がこあから道案内されているとき・・・

大図書館

??? 「火符 「アグニシャイン」

魔理沙 「うおっ。」

??? 「水符 「プリンセスウンディネ」

魔理沙 「あぶなっ！」

??? 「木符 「シルフィホルン」

魔理沙 「ただだけ魔力があるんだこいつ!? もはや魔女だろ…。

3連続でスペカだしてるし、私とは圧倒的格上。

それも全てここに有る本のおかげなんだろうなあ…。

結構ギリギリではあるが何とか当たらずにすんでいる。

魔女 「いい加減に大人しくしてくれないかしら? この盗人。」

魔理沙 「お断りだぜ! あと私は盗むんじゃない! 死ぬまで借りるつもりだ!

(勝ったらんこ)にある本読みまくるんだ。

そうすれば今よりもずっと強くなるはず……!」

魔女「しぶといわね。土符「レイジトリトン」」

魔理沙「(強くなつて私は霊夢に……) っ。うわあ!」

ヤバッ。考え事していたから被弾してしまった。

そのまま床に落下する。(ドサツ)

魔理沙「……ッ!」

魔女「これでトドメよ。金符「メタルっ!」」

刹那、白い物体が飛んできて魔女の視界を遮る。

一瞬驚いたものの、すぐ冷静になり追い払おうとして弾幕を放つ。

物体はクルクルと変則的に飛びながらどこかに行ってしまった。

魔女「何だったのかしら今のっ……ゲホッゲホッ……」

急に魔女が咳き込む。

魔女「ま、まずいわね……。調子がいいから少し無茶したみたい。」

下を見るといつの間にか魔理沙がいないことに気づく。

魔女「どこいったか知らないけど都合がいいわ。早く痛み止めを……ゲホッ。」

魔理沙 side 改めて封太 side

封太「霧雨、大丈夫か?」

魔理沙が落下してトドメをさされそうだったからあるものを飛ばしてその隙に本棚（というか）

それしかない）の影まで運んでまたまたご登場の「マッドドクター」で治療しつつ声を掛けた。

魔理沙「な、なんとか大丈夫だぜ。ありがとうな夢解。」

ホッ、良かった。どうやら意識を失ってはいないっぽい。

封太「それはそうと霧雨、お前動けるか？ ゆっくり歩くらいいには。」

魔理沙「できるけど、どうしてだ？」

封太「あの魔法使いの人は俺たちを見失っている。今のうちにこっそり逃げるぞ。」

魔理沙「え？ 逃げるのか？」

封太「あの人は黒幕じゃない。さかれる戦いがあるならなるべくそうしたほうがいいだろ。」

魔理沙「そっか。」

そう言いながら近くの本に手を伸ばそうとする魔理沙って待てやコラ。

封太「ちよいまち。お前、何する気だ？」

魔理沙「何って、ここにある本を盗ろうと…。」

封太「今、思いつきし盗るつったよね？ 完全に盗む気満々ですよね？」

魔理沙「なっ、そんなことはない！ただ死ぬまで借りるだけだ！」

封太「それ良くても借りパク、悪くて盗みなんだよ！大して変わらないんだよ！」

そもそも人から許可をもらおうと先に考えないその神経がダメだわ！」

魔理沙「じゃあお前はこの状況で頼み込めば許可がもらええると思ってるのか？」

封太「……無理だな。門前払いされる未来しか見えない。」

魔理沙「だろ？だから、なっ？これを読んで強くなりたんだ……！」

封太「い、いやでも盗むのは駄目だし……。つてか何でそんな強くなりたがるんだよ……？」

魔理沙「それは……霊夢に追いつきたいから……。」

封太「博麗に、か？」

魔理沙「あいつとは昔からの仲だった。よく一緒に遊んでは無茶したもんだよ。」

おい何か急に語り始めたぞ。

魔理沙「それで約束したんだ。異変がおこったら私達で解決しようって。」

その為にも私は死ぬほど努力した。霊夢は全然してなかったけどな。

おかげでそんじよそこらの妖怪に負けなくらい強くなった。

でも、前々から私は悩んでいた。いくら努力しても霊夢に追いつけないこと

に。」

封太「……。」

魔理沙「ただ頑張っても頑張っても霊夢には届かないんだよ。

おかしいだろ？ 努力している私としてないあいつ、どっちが強いのかすぐ分かるのに

私が勝つこともあるけど回数では霊夢の方が勝っている。

私をやつと追いついたらもつとその先にいつてしまう。

いつからか感じたんだよ。才能のあるやつの前には凡人は努力しても無理だつて……！」

喋っているうちに段々と口調が荒くなってくる魔理沙。

すると急にこつちに視線を向けてくる。それより目が怖いです。

魔理沙「そーいえば夢解も霊夢と同じだよなあ。」

封太「は？ 何でこつちに飛び火した……？」

魔理沙「うるせえ！ お前だつて能力使うの初めてのくせに私や霊夢に勝つただろうが

あの魔法使いといい、どいつもこいつも私の周りには天才ばかりしかいねえ

だから私はすぐにも強くならなくちゃいけないんだよ！

ここにある本を読めば新しい知識が得られて強くなれるはずなんだよ！
それでもしなきや：私は堂々とあいつのあいつの側にいられないんだよ……！」

……こいつは強さというもので重要なことを分かってねえ。

封太「お前さあ、新しい技を覚えたり単純に魔力が多ければ強くなれるとか

簡単に考えてんだろ。」

魔理沙「え？だって普通はそうだろう？むしろそれ以外に何か強くする必要があるのか？」

封太「断言する。真に強い人っていうのは力が強い人のことではなく心が強い人だ。」

魔理沙「心……？」

封太「ちよつとある昔話をしよう。ある男はひよんなことから怪人を倒せる力を手に入れました。」

しかし、彼は散々負けて味方に足を引っ張ってばかりでした。

理由は戦う覚悟を足りず、心が不安定だったから。

死ぬかもしれないという恐怖心に心が支配されていたから。

今のお前がまさにその状態だ。」

魔理沙「私が恐怖心に、か？」

封太「お前の場合、博麗が自分から離れていつて一人になることに恐怖しているんだ

ろうな。

それとこの話には続きがある。

男は苦戦ばかりしていたが自身の恋人が殺されたことをきっかけに、決意を固めて

本来では全員が力を合わせても勝てない相手に一人で挑みそして徹底的に打ちのめして

完全勝利して仇をとりましたとき。」

魔理沙「ちよつと待て。今明らかかな矛盾があつたじゃないか。だってそいつは全員がかかっても

勝てないほど強い敵だったんだろ？1人なら尚更無理なのに何でだ？」

封太「その強敵だけは自分の手だけで倒さないといけないって心の底から決めたからだ。

その時は死んでしまうこととか、悩みとかを一切考えずに行動したからこそだし自分の目標を成し遂げるときに現れる問題をぶち壊すほど強い心へと変わったからだ。」

魔理沙「つまり、私の心が強ければ霊夢にも勝てるっていうのか…？」

封太「まあ長々と話したけどぎっくりいうとそういうことだ。」

魔理沙「ふざけんな！そんな私の努力を全否定しているもんだぜ！！

そもそもそんなことで霊夢に追いつけるなら今頃私は苦労はしてないぜ！！

仮にお前の言うことが正しかったとして霊夢はいつ心を強くした!?

あの努力しない霊夢が！才能か!?!また才能で強くなったのか!?!」

封太「博麗の過去なんぞ俺は知らんが、もしあいつが本当に努力をしないやつだったら

それは才能じゃなくて生まれつきというか…。」

魔理沙「どっちも似たようなもんじゃないか!!あーあ！世の中みーんなそうだ！

才能がある奴らが勝つんだ。私みたいな才能がない人は負け犬つか!!アハ

ハー!」

ア、アカンこいつ狂いかけとる。ちよつと痛いのが正気に戻さんと。

魔理沙「なんかもうどーでもよくなってきたなあ。努力なんか 封太「霧雨、ごめんなさい!」

え?」

パアンツ!

魔理沙「・・・?」

魔理沙は理解するのに5秒かかった。自分がピンタされたことに。

魔理沙「え、何で。」

封太「ほんとにごめん。でもこうするしかなくて。痛かったよね?」

魔理沙「いや、別に…。」

心の底から心配されている顔をされて帽子を目深にかぶる魔理沙。

封太「ホントに?無理してない?」ズイ。

距離を詰める問答無用の天然ヤロー夢解封太。

魔理沙「いや、大丈夫だから。///」

封太「多分赤くなつてると思うからちよつと見せて?」ズズイ。

魔理沙「いや、いいから。///」

怪我に関係なしに赤くなるピュアな魔法使い霧雨魔理沙。

封太「放つておくと痕が残るから帽子、外してもらつていい?よく見えなくて。」ズズイ。

魔理沙「もういいから!ホントに大丈夫だから!!///」

封太「ホントに大丈夫?でも一応後で確認しとった方がいいよ。」

魔理沙「分かった!分かったから!お前はお母さんか!」

封太「いや、俺男だからお母さんにはなれないけど…。」

魔理沙「そういう意味じゃなくて！言葉の綾ってやつだよ！」

封太「ああそういう…。」

魔理沙「……。」

封太「……。」

な、何か急に脱線しちゃって一気に気まづくなっちゃったな。

「えっと、もう終わったかしら？」

封マリ「え？／＼え？」

横を見ると、あの魔女さんが俺たちを気まづそうに見ていた。

封太「え、あの、すいませんどちら様ですか？」

魔女「私はパチュリー・ノーレッジ。この図書館の管理人みたいなものよ。」

知識と日陰の少女　パチュリー・ノーレッジ　「火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る

程度の能力」

封太「自分は夢解封太です。夢解と呼んでください。それはそうと今までの見てたん

ですか？」

パチュリー「そうよ。」

封太「…因みにどこらへんから？」

パチュリー「あなたがごめんなさいと言いながら頬を叩いたところ。」

最悪のタイミング!!

パチユリー「冗談よ。心が強い人がどうこう言っていたあたりよ。

だからそんな顔を：クツ、フフフ。」

この人趣味悪いな。

封太「じゃあ結構前から聞いていたんですね。」

パチユリー「まあね。その泥棒、てつきり金目当てで盗もうと思っていたけど違うようね。

でも、それはそれ。盗む理由でしかない。許すわけにはいかないわよ。」

封太「霧雨下がってて。俺がやる。」

パチユリー「あなたが？魔力が一切ない人間が一人で挑むなんて随分舐められたものね。」

魔理沙「夢解、正直いってアイツは強い。1人じゃキツイぜ。」

封太「そうかなあ。やってみなきゃ分かんねえぞ。それが勝負ってやつだ。

来い！サガーク！」

そういつて白い円盤みたいなものがクルクル回り俺のところに来る。

パチユリー「あ、それ。さっきの。」

ベルトに巻き付いたのち武器の「ジャコーダー」を持つ。

封太「行くぜ、変身だ。」

サガーク「ボクのあだ名はないのか…。」（プライベート保護中みたいな高めの男性ボイス）

…こいつもめんどくせえな。まあなくはないけど。

封太「じゃあ、お前は「サガっち」で。」

サガーク「よっしゃーうれしいなー。」

何かテンション低くない？ひよつとして気に入らなかつたとか。

サガーク「そんなことはない。ただボクにはちやんとした心がないからだ。」

あー、そういえばこいつは日本語にただけだっけ。

じゃあこの異変が終わったらこいつも改竄するか。

サガーク「人はそれを死亡フラグという。」

封太「うおい！そんなこと直接言うなよ！」

パチュリー「？さつきから何してんの？」

俺たちのやり取りを見て怪訝な顔をするパチュリーさん。

封太「いえ！何でもありません！気を取り直して、変身 「仮面ライダーサガ」

サガーク「ヘンシン」

ジャコーダーを右側に指して体を変化させ「仮面ライダーサガ」に変身する。

サガ「それでは、始めましょうか。」

パチユリー「小手調べよ。金符「メタルファティーグ」」

パチユリーさんが弾幕を放ってくる。

サガ「それぞれ！」（ビシッ、バシッ!）

俺はジャコーダーを鞭のように操り、巧みに弾いていく。

弾かれた弾幕は関係ない方向へ、つてあー!

サガ「ヤバッ!ぶつかる!」

キイイイン!

…と思つたら本棚にぶつかる直前に消えた…?

パチユリー「周りには結界を張っているから本が危険な目にあうことはないのよ。

それと月符「サイレントセラナ」」

あ、ご説明ありがとうございます。

パチユリー「というか何であなたがそんなこと気にしているのよ。」

サガ「いやー自分も本が好きなんですよ。特に物語とか。」

パチユリー「意外ね。そんな風には見えないけど。」

サガ「フツ、断言します。人は見かけによりませんよ。」

実際あなただって努力したからこそ今の実力があるんじゃないですか?」

パチュリー「藪から棒になによ？」

サガ「その魔法使い、名前が霧雨魔理沙っていうんですけど、あなたにすごい才能があつて

努力なんかせずに簡単に強くなった思い込んでいて、凡人は天才に勝てるわけがないと

嘆いているんですよ。」

魔理沙「ちよっ!? 夢解、なに言つて…。」

パチュリー「何それ。そんなことあるわけないじゃない。

ちよつとその白黒、よく聞きなさい。

あなた、天才というのを何なのか履き違えているわ。

私だつてあなただつてみんな努力しているのよ。

生まれながらの魔法使いである私も

最初は何の魔法も使いこなせなかつたわ。

だから努力してここまで強くなつたのよ。

本当に努力せずにこなす人なんてほんの一握りしかいないわ。」

サガ「ノーレッジさんの言うとおりだ！ 才能なんてものはなあ！

最初しか通用しないんだよ！

みんなよりほんのちよつとスタートラインが短いだけでゴールまで

歩きつばなしだと後ろにいたはずの奴らが追い付いてきて

すーぐごぼう抜きにされてしまふんだよ！

パチユリー「あ、そろそろ次。日符 「ロイヤルフレア」

サガ「火イイイイ！ 休む暇がありやーせん！ こりや霧雨も苦勞するわ！」

魔理沙 side

みんな努力している？ じゃあ私がやってきたことは間違いではなかったのか？

夢解のみならずあの魔法使いにまで言われると考えが揺らいでくる。

じゃあ本当に心を強くすればいいのか…？

サガ「勿論なあ、いくら心が強くつたつて自分の力も強くないとダメなんだけどなあ

！

その強くなるには努力する必要があるけどお前は既に誰よりも努力してんじや

ねーか！

だからよ！ お前の努力は無駄じゃねえ！ それを俺が証明する！」

パチユリー「ツ!?! ゲホッゲホッ、まずいわね。早く終わらせないと

火水木金土符 「賢者の石」

サガ「こつちも唯一のスペルカード発動！ 必殺 「スネークキングデスブレイク」

サガーク「ウエイクアップ」

フエツスルを装填し、ジャコーダーの持ち手の方をベルトの右側に挿して、魔皇力を溜める。

パチュリーーの周りに5つの魔法陣が生成され、俺の頭上には赤い紋章が現れる。

魔法陣が俺の周りに来てそこから赤青黄緑紫色のデカイ水晶が飛び出す。

しかし！その瞬間サガはジャンプし、ジャコーダーを伸ばしてパチュリーーさんの首にまとわりつく。

パチュリーー「むきゅっ！」

サガ「霧雨魔理沙よ！断言する！俺がこんなに戦いなれているのは！」

紋章を潜り抜き着地して、仕上げてジャコーダーの鞭の根本より少し上に指をかざす。

サガ「俺が自分の夢を叶えるために日々鍛えていたからだああああああ!!」

ゆつくりと指を根元に下げてパチュリーーの体に鞭から直接弾幕（正しくはそのエネルギー）

を注ぎ込む。

パチュリーー「あああああああ！」

うーん、何だろう。絵面だけ見ると無力な少女を電気の通った鞭で

俺が拷問しているようにしか見えねえな。

本来パチュリーさんも異変を起こした黒幕の関係者だけどこれじゃどつちが悪役か分からんな。

封太 side

魔理沙「これでいいか？」

パチュリー「はあ、はあ：もういいわ。後は自力で何とかするから：。」

倒れたパチュリーさんを魔理沙に運んでもらって、丁度椅子に座らせたところだ。

え、俺？だってそりゃ女性の体に触るには、ねえ：。

魔理沙「それにしても、いくら何でもあれはやりすぎたんじゃないか？」

封太「いや、あれでも相当威力押さえたんだけど：。」

ただ足の小指をタンスにぶつけた程度の痛みが全身にまわっただけだけど。」

魔理沙「それ地味に痛いやつ！足だけでも痛いのにそれが全身とか地獄だぜ！」

封太「あ、言われてみればそっか。じゃあ今度は静電気があつた時の痛みを全身に

：。」

魔理沙「少しはマシンになったけどそれより全身から離れてくれ！」

パチュリー「ちよ、ちよつと待ちなさい。今度つてまた私で試すつもり：？」

封太「あ：とりあえずあのスペカは暫く封印しときます：。」

魔理沙「そういえばさ、さつき夢がどうか言っていたけど夢解の夢って何なんだぜ？」

封太「俺のか？あー、なんて言えば分かるかな？」

こつちでいうなら着ぐるみを使って演技する役者になりたかったのが俺の夢なんだよ。

そのためにはその夢を叶えるために日々鍛錬してあんな器用に動けたんだ。

まあ、それももう叶いつこないけどな。」

魔理沙「あ、そうか夢解は外人人だから。ごめん。気分が悪くなるようなこと言つて。」

封太「いやいや気にすんなって！」

(だってもう叶ったようなもんだから…現実には自分の予想の遥か斜め上だけど。)

魔理沙「そうなんか？でも、その夢のために努力していたんだよな？」

だからあんなに戦いなれていたわけか。」

封太「まあな。尤も、外の世界で能力なんか使えるわけねえから最初こそ色々戸惑ったけど

鍛錬していた内容と相性が良かったからすーぐ使いこなせたZ.E。

とにかくこれで分かったら？お前の努力は決して無駄じゃない。

まだきつかけがないだけで心を強くすればお前の今までの努力は必ず報われる。」

魔理沙「ああ！夢解の言いたいこと、よく分かったぜ！

これからは心を強くなるよう努力していくぜ！」

封太「勿論今までのことも蔑ろにするんじゃないやねえぞ。

それと博麗に追いつくんじゃなくて博麗を超えるっていう志でいけ。

Plus Ultra 〃さらに向こうへ〃の精神で、だ。」

魔理沙「さらに向こう、か。面白そうだな！やってやるぜ！」

良かった、いつもの魔理沙らしくなってきた。

魔理沙「早く行こうぜ、夢解！霊夢に追い越されて1人異変解決されるわけにはいかないぜ！」

封太「あくその前にちよつちトイレ行きたいから先行つてくんない？」

魔理沙「お、そうか。それじゃお先にー！」

パチュリー「で、貴方だけ残って何するつもり？ホントは？なんでしょ。」

封太「貴女のような勘のいい人は嫌いじゃないですよ。本当の目的をお教えしましよ

断言します。貴方の喘息を完治いたします。」

パチュリー「つ、何で私が喘息を患っているって分かったの？」

封太「時間が惜しいので説明はしません。それにどーせ言っても信じてくれはなさそうだし。」

パチュリー「そう。じゃあ聞かないわ。」

いやあつさり引くんかい。もうちよい食い下がるところでしよ今のは。

パチュリー「治すとは言ってるけどあまり期待はしないわ。」

この喘息は私のあらゆる知識と技術を用いても全く効果がなかったのよ。

いくらあなたでもこればかりはお手上げじゃないかしら？」

自嘲気味に言うパチュリーさん。

封太「いーえ、そんなことはございません。この力があれば、ね。」

そういつて白く小さなあるもの取り出す。

パチュリー「それは…？」

続く

第13話 後奏・398さんは315です!

霊夢 side

霊夢 「くつ、ほんとにどうなったんのよ……!」

改めて自己紹介するけど私は博麗霊夢。博麗神社で巫女を務めているわ。

博麗の巫女は妖怪退治や異変解決を生業としているの。

それで、今は後者の異変解決の最中。空を紅い霧に覆うという異変を

起こした黒幕がこの館にいるからその人物の所まで行こうとしていたんだけど……。

?? 「その程度、ですか。大したことありませんでしたね。」

この館のメイド長とかいうやつが通せんぼしてきたのよ。

邪魔をするのであればたとえ誰でも容赦なく退治するんだけどコイツ

何か厄介な能力があるみたいでさつきから全く状況が変わらないのよ。

メイド長 「それにしてもその姿……貴女、もしや博麗の巫女なのですか?」

霊夢 「ええそうよ! 私は博麗霊夢。この異変を解決しに来た博麗の巫女よ!」

メイド長 「異変を解決……ということは貴方は違うようですわね。」

霊夢 「違う? 何がよ。」

メイド長「貴女が知る必要はありません。ここでくたばるのですから。」
霊夢「冗談きついわよ！」

メイド長「奇術」「ミスディレクション」

そういうった瞬間私の頭上には大量のナイフが現れ降り注ぐ。

霊夢「ッ！」

まただ。さつきからこんな感じで一瞬にしてはありえないはずの量のナイフを放ってくる。

まあ、私はそれを持ち前の勘で全て捌いているから

ダメージは一切ないんだけどね。

でも、問題は…。

魔理沙「あ、いたいた！霊夢ー！」

何とか全てをよけた直後魔理沙がやってきた。

確か地下の方に行つたはずだけど何もなかったのかな？

霊夢「思つたより早かつたじゃない。」

魔理沙「途中で夢解が助けに来てくれてな！」

それと霊夢、お前に言いたいことがある。」

霊夢「な、何よ面と向かつて…。」

魔理沙「私は霊夢に追いつくんじゃなくて霊夢を超えるために強くなるぜ！」

：何かよくわかんないけどあの仮面男が原因で間違いなさそうね。

魔理沙「それであいつは何者だ？苦戦しているようだけど。」

メイド長「この館のメイド長を務めております。」

私、十六夜咲夜と申します。以後、お見知り置きを。」

完全に瀟洒な従者 十六夜咲夜 「時間をあやつる程度の能力」

魔理沙「何か、私達と同じ漢字の名前なんだな。」

咲夜「ですが私は貴女方とは決定的な違いがあります。」

私が誰よりも強い人間であるということを。」

それを聞いて、魔理沙がムツとした顔をする。

魔理沙「そんなわけないぜ！たとえお前が強くてもあいつには、

夢解には絶対に勝てないぜ！」

対して咲夜は視線を逸らして呆れるように言う。

咲夜「その人がどれだけ強くても私の前では土台無理な話でしょうに。」

魔理沙「霊夢。こいつやたら自信があるけど、

そんなに強力な能力を持つてるのか？」

霊夢「どんな能力か分からないけど厄介なものであることは間違いないね。」

魔理沙「そうか。おい咲夜とかいうやつ！お前の能力はいったい何だ!？」

咲夜「そんなこと敵に安々と教えるわけじゃないでしょうに。」

魔理沙「ほお？つまりお前はタネさえ分かれば負けてしまうほど弱いのか。

なんだ、ただの腰抜けじゃないか。」

咲夜（腰抜け：？この私が：？）

「そこまで言うなら冥途の土産も兼ねて特別にお教えしてあげましょう。

そもそも、教えたところでお掃除すればすむ話ですし。」

何かこいつのいう「お掃除」が私が知ってるのと違う気がするのだけれど。

咲夜「私の能力は 封太「おーい！二人ともー!」っ。」

魔理沙「あ、夢解だ！夢解が来たぜ霊夢!」

霊夢「あーうん、そうね。」

それより咲夜の能力が：。

咲夜 side

せつかく私の能力を教えようと思ったら遮られてまた誰か来た。

やってきたのは黒髪で先の2人とはまったく違う服装の男だった。

恐らくこいつも人間、しかも2人と比べてとても強そうには思えない。

ふと、お嬢様のあの発言が頭をよぎる。

「その中に変わり種が1つ」

「私の悩みとこの異変、両方を解決するみたいよ。」

変わり種の見たとかは聞かなかったがもしかしてあの男こそ変わり種?

封太「ていうか博麗お前こんなところにいたんだな。」

しかし、見た目からしてそのようには思えない。

博麗「本当、あんたつて人は……。魔理沙と別れようとしてあんたはどっちにするつて

聞こうとしたらどこにもいなくて焦ったわよ。」

だが、お嬢様の言うことは絶対。

魔理沙「確かになあ。てつきりついて来てるものかと思つて後ろみたら影も形もな

かったし。」

ということはいつは見た目に反して実はとてつもない能力の持ち主であるということ?

封太「いやホントスマン。それよか見た感じ、今はあの人と戦っている最中か?」

霊夢「そうなんだけどアイツの能力が分からなくてどうしようもないのよ。」

魔理沙「どんな能力かさえ分かれば弱点が分かるはずなんだけどなあ。」

そうだった。あの白黒が私が能力を教えないことから腰抜け呼ばわりしてて、

そう言われるのが嫌だから言おうとしていたところに男が来たんだった。

というか弱点つてなによ。私の能力にそんなものがあるわけないでしょ。

封太「……あのさあ。俺がこの幻想郷の色んなことに詳しい人物つつーかそこんところ、

お忘れではありませんかね？恐らくだけどあの人は十六夜咲夜っていうひとでしよ？」

!?まだ何も言っていないのに何故私の名前を!?

霊夢「あ、そういえばそうだったわね。あと正解。」

魔理沙「すっかり忘れてたぜ……」

封太「お前らなあ……。はあ……。いいか？十六夜さんの能力は「時間をあやつる程度の能力」だ。

これは主な使用方法として単純に時間を止めたり、逆に時間を進めることができるんだ。

ただし、時間を戻すことはできない。また、この能力を応用して空間を操ることもできて、

この館が外側と比べてやたら広いのも、あの人の能力によるものだ。」

……言われた。(。D。)

咲夜「よくも……」

咲夜「くっ、外したか。でも次で確実に仕留める。」

魔理沙「おおい。なんか咲夜から殺気を感じるぜ…。」

霊夢「あいつ本気で来るわよ。夢解、早く準備しなさい！」

封太「ハイハイ。まったく人使いの荒い巫女さんだこと。」

霊夢「なんですって!？」

オーテンからイクサベルトを取り出しベルトに巻きつける。

封太「断言する。魑魅魍魎跋扈するこの館、夢解封太はここにいる。」

そういつて外したイクサナツクルを手のひらに押し当てる。

『R・E・A・D・Y』

霊夢（何言ってるのこイツ。）

魔理沙（急にどうした？）

咲夜（そんな魑魅魍魎とかしてない…はず。）

封太「爆現」「仮面ライダーイクサ」

『フイ・ス・ト・オ・ン』

全身がアーマーに装着され「仮面ライダーイクサ」に変身する。

咲夜「なに、あれ…?」

魔理沙「よっしゃ！夢解が変身さえすればあとはこっちのモンだ！」

イクサ「断言する。その命、神に返しなさい……!」

咲夜「誰が神に返すものですか。私の命はお嬢様に捧げるものなのですから。」

イクサ「あ、でも自分のものとは言わないのね……。」

咲夜「お黙り! 幻象 「ルナクロック」

またしても大量のナイフ。

イクサ「装備 「イクサカリバー」

カリバーモードで全て弾く! カンキンカンコンキンカンキンキンキンキンキン

キン!

咲夜「!」

魔理沙「おおくやっぱり夢解はすげえぜ! よつと。」(※ナイフが来てるためよけてます。)

霊夢「…魔理沙あんた買いかぶりすぎよ。よく見なさい。ふつ、ほつ。」(※上に同じ)

魔理沙「え?」

イクサ「ハア、ハア、どんなもんじやい!」グサグサグサグサグサグサグサグサア!

レイマリ咲「……。」

イクサ「と思ったけど結構刺さってた。思ったより弾いたの少なかつたわ。」

魔理沙「全然だめじゃん!」

まっ、この程度では死なないんですけどね。

咲夜「私から言わせれば何でそんなに刺さってるのに死なないのよ！」

ぶっちゃけたただのナイフではライダーの9割は倒せないと思います。

イクサ「断言する。侮ることなかれ仮面ライダーの力を。」

そう言いながらカリバーフェッスルを入れて必殺技を発動する。

『イク・ク・サ・カ・リ・バ・ア・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

イクサ「必殺「イクサ・ジャッジメント」」

斬撃型の弾幕を放つ。

咲夜「…ふん。」

咲夜さんは時間停止して回避するだろう。だがそんなこたあ予測済みだ！

『イク・ク・サ・ナ・ツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

必殺技を放ち終わった瞬間、俺はすぐにナツクルフェッスルを入れた。

一度時間停止をした後ほんの一瞬スキがあるはずだ。だからそこを狙う。

※状況説明

ナツクルフェッスル装填↓必殺技発動待ち↓咲夜さん時間停止で攻撃を回避

↓時間停止解除↓速攻で見つけて本命の技をぶつける。

※説明終了

気がつくくと正面には咲夜さんがいなかったたので、辺りを見回す。

……いた、そこだっ!

咲夜「大したこと イクサ「必殺」『ブロウクンファンク』!」!?

咲夜さんの辺り一面が爆発により煙に包まれる。

……だがダメだ。これも回避された。

咲夜「はあ…今のは危なかったわね。」

くそお、これならと思つたが無理か。

こんななんどうすりやええねん。

続く……?

お嬢様「う、うーん。あいつら遅いわよ。いつになったら来るのよ。」

ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ。

ア、分カツタア。

ワ・タ・シ・ガ・チ・ヨ・ク・セ・ツ・イ・ケ・バ・イ・イ・ン・ダ。

ナアンデソオンナカンタンナコトニキツカナインダロウナア。

マツテテエ。ワタシノアタラシイ オモチヤ。

続く

第14話 交響・ライジングになります。

霊夢 side

魔理沙「夢解の弾幕が…よけられた？」

霊夢「そうみたいね。今まで夢解が変身したら圧勝してばっかりだったけど、

今回はそうもいかないようね。」

魔理沙「夢解のやつ大丈夫かなあ。」

霊夢「魔理沙、悪いけど今回はアイツも負けるかもしれないわ。」

魔理沙「まだ決まったわけじゃないのに何でそんな簡単に言えるんだよ？」

霊夢「だってよく見たら変身しても時間停止の影響を受けたままよ？」

根本的な問題を解決してないのにそれで本当に勝てるんですか？」

魔理沙「で、でも夢解のことだ。絶対に勝つ。私はそう信じてるぜ。」

まったく、あの男に何されたのか知らないけど魔理沙はやたら夢解の肩を持つわね。

霊夢「そこまで言うならちよっと賭け事しましょうよ。私は夢解が負けるに賭ける

わ。」

魔理沙「乗った！私は夢解が勝つに賭けるぜ！」

咲夜さんの周囲に乱射して煙を発生させる。

イクサ「よし今のうちだ。博麗に霧雨、こっち来て。」

霊夢「何ですよ？」

イクサ「いいから早く、話がある。」

魔理沙「分かったのぜ。」

ここにはインテリアのつもりなのか大量の柱が設置されているためそこに身を隠す。

霊夢「私たちを連れて来るってことは、何か考えがあるってことよね？」

イクサ「Exactly. そのとおりでございます。」

魔理沙「マジか！それでどうやってアイツを倒すんだ？」

イクサ「霧雨、倒すのは二の次だ。先に十六夜さんの能力を無効化する必要がある。」

魔理沙「あ、そうか…。でもどうやって？」

霊夢「というかアンタ自身、そういうの出来ないんじゃないかしら？」

この短時間で気づくとは鋭いな。やれやれだぜ。

イクサ「確かに今の俺は時間停止に何の対策もない。だから無暗に突っ込もうものな

ら

ナイフの串刺しでお陀仏なのがオチだ。」

魔理沙「そんな……！」

イクサ「だがしかし突破口はある。それに勘違いしているようだが。無効化といつても

今回ののは少々意味合いが異なる無効化だ。」

霊夢「あん？　どういうことよ？」

イクサ「これは完全な持論なんだけど。無効化には2種類のパターンがあると思っ
ている。

1つ目が「他人の仕業や今いる場所の影響で使いたくても使えない」パターン
2つ目が「使用自体は可能だけど何らかの原因で使っても変わらない」パター

ン

そして今回は後者寄りの作戦で行く。」

霊夢「で？　具体的にどうするの？」

イクサ「簡潔に言うのだな……」

咲夜「あの3人。滅茶苦茶にするだけしてどこ行っちゃたのよ……？」

今までの戦闘の余波でボドボドになった床や壁をなんとか修復しようとしてる咲夜
さん。

魔理沙「咲夜！　こっちを見ろ！」

そこに魔理沙の声が響く。

咲夜が振り返るとそこには…

魔理沙「これが私の全力！恋符 「マスタースパーク」

キターーーーーー！魔理沙の十八番、マスタースパーク！

だが咲夜さんは難なくこれを時間停止で回避する。

咲夜「あーもう！またこんなに汚して！あなた達がいるとお掃除が進まなくて

お嬢様に怒られるじゃない！」

それどころか怒らせちゃったつぽい…。でも今のうちに結構近づけた。あともう
ちよい…。

霊夢「今度はこつちよ。夢符 「封魔陣」

咲夜「またっ！」

またしても回避して場所を変える咲夜さん。ヨシ！ここまでできたらもう充分だ！

咲夜「(あの変わり種がないのが少々気がかりだけど…)纏めて懲らしめてあげる

！

幻世「ザ・ワールド！」

ところで今これを読んでいる皆々様。

あなたはこの武器、覚えてるof知っていますか？

咲夜 side

上からありつたけのナイフを投げてあげるわ！
そのためにも時間停止して飛び上が

…れない!?

咲夜「!？」

途中で重力が掛かったかのように重くなる。

どういうこと!?!私の能力に干渉できるやつなんてこの場にはいないはず…。ふと、腕に違和感を感じ見てみると…

何やら鎖のようなものが巻き付かれてあった。

そして、その出どころを見てみると…。

イクサ「よっしゃ!引つかかったりー!」

あの変わり種が、時間停止しているにもかかわらずに動いていた”。

イクサ「あらヨットー!」

咲夜「!?!」

勢い良く引きずり降ろされて、その衝撃で時間停止が強制解除される。

魔理沙「…あれ?何で咲夜が倒れてんだ?」

霊夢「魔理沙、あれを見て!夢解が捕まえてる!」

魔理沙「ということは…作戦成功ってことか!?!」

イクサ「断言する。敢えてもう一度言おう。E x a c t l y ! そのとおりでございま

す!」

魔理沙「やったー!やったぞ霊夢ー!」

霊夢「ま、まあそうなんだけどまだ終わったわけじゃないから落ち着いて。」

も、もうなにがなんだか…。

咲夜「どうして私の能力が効いてなかったのよ……？」

イクサ「フツフツ。お教えしましょう、メイド長さん。冥途の土産にね。

なんちやってる！♪」

レイマリ咲「……」。チーン

イクサ「……今時間停止しましたか？」

咲夜「いやまったく。」

霊夢「あんたのそのしようもない駄洒落で一瞬時が止まったかのようになったのよ……」

イクサ「そんなあ……（・ω・）」

……とりま、気をとりなして説明しますね。」

回想シーン

イクサ「それはだな、十六夜さんの能力。というか時間を操る系統の能力にはある落とし穴があるんだ。」

魔理沙「落とし穴？」

イクサ「時間を止めた場合、止まった時の中は十六夜しか動けない。

一見そう見えるが厳密には十六夜さんと一緒に動いているのもある。

例えば服とか手に持つてるナイフとか。」

霊夢「つまりそれが無効化に何の関係があるっていうのよ？」

イクサ「まったく…もつと分かりやすく言うと時間停止する際に十六夜さんの体に触れているものは時間停止の影響を受けないってことだ。」

魔理沙「つまり咲夜に触れていれば咲夜が時間停止を使っても動けるってことか。

……いや無理じゃね？」

霊夢「そうよ。近づく前に時間停止で距離を離されるだけよ。」

イクサ「まあまあ、最後まで人の話を聞いとけ。確かに1対1では不可能に等しいだろう。」

でもこっちは3人いる。人数の差を生かせばうまく行ける。」

霊夢「そう簡単にうまくいくものなのかしら。」

イクサ「こっからが本題であり作戦内容だ。まず博麗と霧雨の2人が十六夜さんの注意を引く。」

その間俺が近づいて、これでつかまえる。」

そう言つてオーテンからあるものを取りだす。

魔理沙「なんだそりゃ？」

イクサ「こいつがあれば十六夜さんの能力を無効化できる。」

魔理沙「マジか。なら早速…。」

霊夢「ちよつと待ちなさい。何で私たちが囲みたいなことしなくちやならないのよ？

そもそもあんたに指図されるのが何か嫌なのよね。」

魔理沙「霊夢お前ここに来てそれはないだろう…！」

まったくもつてその通りだ。今は協力して咲夜さんを倒すのが最優先事項なのに。

だが裏を返せば俺一人では無理ゲーなほど追い詰められているという事実。

イクサ「博麗。あなたの力が必要です。どうか自分の作戦に協力してください。」

背に腹は代えられん。少しでも誠意を見せて協力してもらわねば。

霊夢「ふん。いいわよ。その代わり今度神社に来たとき、賽銭にかなりふっかけてあげるから。」

(ヤバい。これ本当に私が宴会の準備しなきゃいけないんじゃないじゃ…)」

口ではこう言っているが内心焦りまくりな博麗霊夢である。

回想シーン終了

イクサ side

そうして俺は剣にもムチにもなる「ファンガイアスレイヤー」をこれ見よがしに見せる。

ファンガイアスレイヤー。過去編で使われていた対ファンガイア用の携行暗器。

散々「この武器」とか「鎖のようなもの」と言っていたのはまさにこれだ。

それはそうと今までのことを簡潔にまとめるところだ。

← 霊夢と魔理沙が囿となっている間、咲夜さんに気づかれなないように近づく。

←

咲夜さんが時間停止を発動する際、ムチモードのファンガイアスレイヤーで

← 咲夜さんの体に巻き付けさせる。

←

俺はファンガイアスレイヤー越しに間接的に咲夜さんに触れているため

← 咲夜さんの一部として扱われる。

←

故に時間停止の影響を受けない。

イクサ「とまあこんなわけですよ。」

咲夜「ま、まさかそんなことが…。私の能力に弱点だなんて。」

イクサ「弱点じゃなくてそういう応用の仕方もあるってことですよ。」

今回はそれを逆手にこっちが利用しただけです。

(はあああああ！それにしてもうまくいってよかったー！)

ぶつちやけイチかバチかの作戦だったからホントによかったー！)

魔理沙「咲夜、これでもうお前の時間停止も怖くないぜ！」

咲夜「確かにこれでは無効化されたようなものね…。

でも勘違いしないでちょうだい。」

※時間停止発動

咲夜「私はまだ諦めたつもりはないと！」

巻き付いてないもう片方の腕にナイフを持ち、ファンガイアスレイヤーの鎖を切り裂こうとする。

イクサ「おっと、そうは問屋が卸しませんよ。」

予めオーテンからとりだしておいたもう一個の武器「ファンガイアバスター」のフッキンググウィップスタイルでナイフごと腕を絡める。

いやー良かった良かった。こんなこともあるうかと先に用意しておいた

甲斐があつたつてもんだよく。

咲夜「なっ!？」

※時間停止解除

魔理沙「ん？何か増えてね？」

こまけえこたあいいんだよ。

イクサ「二人ともちよつとこれを持ってて左右に広がってくんない？トドメを刺すから。」

魔理沙「おう！任せろ！」

魔理沙にバスターのほうを渡す。あとは霊夢がスレイヤーのほうを持つてくれると助かるんだけど…。

何やら霊夢はオロオロしていた。

霊夢「あ、あーそのー夢解？ちよつといいかしら？」

イクサ「どしたん？」

霊夢「いやまあその何というか、うん。もうその辺でやめて引き分けにしない？」

イクサ「・・・はい？」

は？何言っちゃってんの？今日ーわけわかめなんですけど？

イクサ「いやいやいや、何言ってるんのお前？このタイミングで引き分け？」

霊夢「いやだつてさ、もうソイツの能力は封じたも同然なわけでしょ？」

その上トドメを刺すとか可哀想じゃない？だからここはお互い何もしないという約束で

引き分けにしようかなくなんて。」

・・・言ってることは親切だけど、なーんか歯切れが悪いなあこいつ。

異変の時だと誰彼構わず問答無用に叩きのめすあの霊夢がこんなこと言うなんてどうにも何か裏があるようにしか思えん。

イクサ「お前、何か俺に隠してるんじゃないのか？」

霊夢「いやいやそんなわけないでしょ！ただ、これ以上はあんまりだと思ったから
。。。」

魔理沙「あれ？そういうえば引き分けになったら私達の賭けはどうなるんだぜ？」

霊夢「ー！ー！！」

ハ・・・？カケ・・・？賭けってあの賭け？

イクサ「霧雨、詳しく教えてくれ。」

魔理沙「ん？ああ、実はこの戦いで夢解が勝つか負けるかの賭けをしていたんだぜ。

私は勝つ方で霊夢が負ける方に賭けてたな。」

イクサ「ほう。それで続きは？」

魔理沙「んで、賭けに負けた方が宴会の準備をするっていう話だったんだぜ。」

はーなるへそね。」

魔理沙「つて霊夢お前！まさか自分が賭けに負けるからって引き分けとか言い出した
のか!？」

まあつまりはそーゆーことになるわな。

魔理沙「卑怯だぞ霊夢！自分が負けるからってそんなことしやがって!!」

確かにこれは少々いただけませんねえ。」

霊夢「くっ！だつて宴会の準備するの面倒だもん！ほんとはやりたくないのに

コイツが勝ちそうだから引き分けで有耶無耶にするしか方法がなかったもん!!」
咲夜「私のことなんてどうでもよかったのね…。」

あ、自分のことを心配されてなかったシヨックに咲夜さんの目が死んどール。

おい霊夢どうしてくれんじやい。もうトドメを刺されちまったじゃねーか。

イクサ「なあ博麗。ここは1つ、取引しないか？」

霊夢「取引？なにそれ？」

イクサ「ええと、なんていうのかなあ。等価交換？みたいなものか？」

とにかく、お前がここで俺に協力すればその宴会の準備を俺が手伝うっていう

ものだ。

言つとくけど俺は50人にも増えることができるし材料とかもすぐ用意でき

る。

いいか？ここで大人しく負けを認めてちよーつとの間だけこの剣を持ってい

れば

お前は俺に指示するだけで宴会の準備ができるんだぞ？

あとはどう行動すべきかその頭でも理解できるよな？」

霊夢「はい喜んで夢解さんに協力します☆」

うつわ清々しいほどの笑顔と手のひら返し。しかも敬語&さん付けしてるし。

こうして咲夜さんは2人に別々の方向から引つ張られどうしようもない状況になりましたとき。

……うん。こないだのパチュリーさんといい、何で傍からみると処刑を連想しちゃうんやろ。

魔理沙「なあ夢解く。霊夢は負けるのに宴会の準備をしないことに私は不満なんだけど。」

イクサ「まあそういうな。お前は俺を信じたから勝つたんだし。仮にお前が賭けに負けても

俺は自主的に手伝うつもりだったからこれ以上は気にすんな。」

魔理沙「そうか…ならいいか。」

さて、これで役者は揃った。ようやくみんなが楽しみにしてたメインディッシュの時間だ。

イクサ「断言する。今こそライジングになるとき…！」

口にマウントされている「イクサライザー」を取り外して開く。

魔理沙「今度は何だ？何が来るんだ？」

イクサ「1！9！3！」

1 ↓ 9 ↓ 3 の順番にボタンを押す。

『ラ・イ・ジ・ン・グ』

イクサ「スペルカード発動。強化 「ライジングイクサ」

最後に通話(☎) ボタン押す。

体の装甲が変化し、強化形態のライジングイクサに変わる。

魔理沙「おおお？ 今までとは何か違うぜ？」

霊夢「変身したまま姿が変わった…？ 何か前に似たようなのがあったわね…。」

→

(※クウガのやつです。詳しくは「第7話 融合」で)

ライザーフエツスルをイクサベルトに入れて必殺技を発動する。

イクサ「ラストスペル発動。必殺 「ファイナルライジングラスト」

銃口から弾幕が放たれる。

イクサ「2人とも！弾幕があたる直前にそいつら手放せよ。巻き込まれても知らんぞ

！

霊夢／魔理沙「は!?急に何言ってるのよ!?／え!?ちよつ、ちよつと待てくれよ!!」

いきなりの警告に焦る2人。

イクサ「最後に断言する！やっぱり名護さんは最高です!!!」

咲夜（なごさんってだれー!?）

防御せずにモロに弾幕を受けたせいで咲夜さんは気絶していた。

変身解除↓封太「ふいー。倒せたっぼいな。」

霊夢「倒せたっぼいな。じゃないわよ！危なすぎるでしょ!?!」

魔理沙「あやうく私たちが巻き込まれそうになっただじゃないか!!」

命中する直前、手放して2人とも回避したみたいだ。

封太「まあ良かったじゃないですか。俺が一応教えたから怪我せずになりましたし。」

魔理沙「…正直、あのままで掴んだまま巻き込まれるところだったぜ。」

霊夢「…私もそこは考えていなかったのは事実よ。」

でもこういうことはもっと早く言いなさいよね。あと宴会の準備は絶対だから

ね。」

封太「分かりましたよ。ちゃんと俺がやりますから…。」

霊夢「なら許す。」

ホントこの人は…。

魔理沙「そういえばさ、これまで色んなやつと戦ってきたけど黒幕にはいつ会えるん

だ?」

封太「案ずるな。次戦うのはその黒幕だ。」

魔理沙 「おおっ！ようやくか！」

霊夢 「はあようやく終わりが見えてきた…。」

封太 「ほんじやま、先に進みマッスルかッ!？」

魔理沙 「?どうした？」

封太 「い、いやなんでもねえ早く行こうぜ。(何だ今の、気のせいかな…?)」
続く

第15話 組曲・スカーレットヴァンパイア

その後、俺たちはなーんか他のとは違う豪華な扉の前にいた。

霊夢「異変の黒幕はここであつてなの？」

封太「断言はできないが他の扉とは違うから多分ここであつてると思う。」

魔理沙「夢解が断言しないなんて珍しいこともあるんだな。」

なんだその、俺がしょっちゅう断言したがるような性格だつていう発言は。

とにもかくにも入つてみないことには何も始まらない。てことでいってみよー！

ギイ

封太「失礼しまー お嬢様「おつそ——い!!!!!!」 くッ！」

邂逅一番に怒声を浴びせられました。

お嬢様「あんたたちいくら何でも遅すぎでしょ!!

一体何してんのか気になつて見に行こうとも考えたけど

もし私がいけないときに誰かが入ってきたり、途中で鉢合わせしちゃったりした

ら

気まずくなるから仕方なく来るまで待つていたのに時間かかりすぎでしょう

!?

おかげで私3回、3回も寝てしまったのよ！起きるたびに「大丈夫よね!？」

「まだ誰も来ていないよね!？」って焦っていたのよ！

だというのに第一声が「失礼します」？ふざけるな！

待たされた私の身にもなってみる！とにかく全員私に謝れ!!」

ワーオ、マシガンンの如くお説教してきやガール。ここは大人しく謝つとくか。

封太「すみません。遅くなつてしまつて 霊夢「夢解やめて。」え。」

なんか霊夢に止められちつた。

霊夢「「なんで謝らなくていいの?」って顔してるけど考えてみなさい。あいつは敵

よ。

しかも異変の黒幕なんでしょ?そんなやつに頭下げる必要なんかあるわけない

じゃない。」

? (ハ、ハ、ハ) ハツ!!確かに!あまりの剣幕に流されるところだったわ。

封太「ごめんなさい博麗。ついうっかり。」

博麗「わかればよろしい。それで、あんたが空を紅い霧で覆わせた異変の黒幕かしら

?」

お嬢様「いかにもその通りだ。」

少しだけ機嫌を良くしたのか胸に手を当てて例の謎ポーズをする黒幕。

お嬢様「この私、レミリア・スカーレットが幻想郷の空を霧で覆ったのさ。」

永遠に紅い幼き月　レミリア・スカーレット「運命をあやつる程度の能力」
 やつとお嬢様つて変換しなくてよくなつた。おつと失礼、今のは幻覚だ。

「永遠に幼き紅い月」と間違われがちだが「永遠に紅い幼き月」だ。

いいか？「永遠に紅い幼き月」だ。「^{紅い}あい・^{幼き}おき」で覚えろ。

大事なことだから3回言つたぜ。

レミリア「それにしても、ふむ……。」

何やら俺をじつと見るレミリア。何？歯に青のりでも付いちやつてましたか？

レミリア「恐らくだが貴様だな。変わり種は。」

変わり種？何ソレ？

封太「えつと、どういう意味スか？」

レミリア「何だ、咲夜から聞いてないのか？なら仕方ない。この私直々に教えてやろう。

まず、私には運命を見る力がある。それで紅魔館に招かれざる客、

つまり貴様ら3人のことだな。

そこから美鈴やパチエ、咲夜を退けて私の所まで来るといふ運命まで見え

た。

だが問題はここからだ。どうやったか知らんが変わり種の間人が

異変の解決と私の目的の両方を成功させるといふ有り得ない運命を見たの

だ。」

そこまで聞いて2人は俺を一瞥する。

レミリア「一瞬見間違いかと思つたが何度見ても同じだった。

だからこそ信じられなかった。それで面白そうだから変わり種と呼んでい

るのさ。」

はあ、とりあえず今の感想としては俺のすることをネタバレされて

こつちとしては少々気分が悪いです。

霊夢「夢解、あんた今度は何する気…？ことと次第によつては…。」

ゲツ、まーた警戒態勢入っちゃてるよこの巫女は。

封太「それで？仮に俺がそれを実行に移すとしたらあなたはどうするんですか？」

レミリア「しれたこと。貴様ら全員の墓場をここにしてやるだけさ。

どこの馬の骨とも知らないやつが私の計画を達成させるといふ形で邪魔さ

れるなど

癪に障ることこの上ない屈辱だからな…！」

要するに戦わなければ生き残れない！ってことですね分かりましたよ。

レミリア「フンツ。」

刹那。

封太「ごがつ!？」

霊夢「…は？」

魔理沙「夢解…?」

封太はレミリアの弾幕を喰らい、一撃で壁まで吹っ飛ばされた。

封太「あ…が。」

レミリア「何をしている。既にもう始まっているぞ?」

霊夢「相当やる気みたいね。いいわ、相手してあげる!」

レミリア「こんなにも月が紅いから本気で殺すわよ。」

霊夢「こんなに月も紅いの…」

楽しい夜になりそうね。

長い夜になりそうね。

霊夢がレミリアの相手をしている間、魔理沙は封太の所まで来て、回復魔法で治癒していた。

魔理沙「夢解、大丈夫か?」

封太「あ、りがと。ていうかお前、回復、使えるんか…。」

魔理沙「まあな。といつても最低限のやつだから気休め程度にしかないけど。」
確かにいうほど楽になった気はしねえ。でも0よりかはずっとマシだ。

封太「ハア、ハアツ…。」

うぐつ、立つだけでやつとつて感じか。

魔理沙「お、おい夢解まさかとは思うけど戦うつもりなのか？」

封太「そのまさかですけど？」

魔理沙「やめろつて！さっきのもう一回当たたら今度は私でも無理かもしれない
だぜ！

ここは私達に任せて夢解はゆっくり休んでくれ！」

しやーねえ、ここは大人しく休むか。

霊夢「魔理沙、夢解は？」

魔理沙「アイツには休んでもらうぜ。思ったより傷が深いし、何より…

たまには私達もカツコイイところ見せてやらないとな！」

霊夢「それもそうね。アイツにいいところばっかり取られていたし。

「ここで私だつて強いってことを証明してやりましょう。」

魔理沙「ちよつとちよつと、『私達』だろ？」

レミリア side

吸血鬼であるこの私の目の前でよくもまあ、たかが人間の分際で？ 気に会話していられるな。

まだ自分達が勝てると思っっているのか？ 愚かな…そして随分と舐められたようで非常に腹立たしい。

っ。また何か運命が見える。

……………。

ほう、これは面白そうだな。

レミリア「くたばれ。天罰 「スターオブダビデ」

ビュビュビュビュビュビュ!

私のスペルカードを発動させ、弾幕を飛ばす。

霊夢「ふん、これくらい。」

魔理沙「楽勝だぜ！」

避けているな。今のところは。

レミリア「次だ。神罰 「幼きデーモンロード」

霊夢「ッ！くっ！」

魔理沙「うわっ、あぶねっ。」

やはり追い詰められたな。そして……

レミリア「チエックメイトだ。冥符「紅色の冥界」

魔理沙「ッ！魔符「スターダストレウ、アリエ」！」

たまらずスペルカードを使ったか。

魔理沙「霊夢、今だ！」

霊夢「夢符「封魔陣」

この隙に紅いのが近づいてくる、が。

レミリア「そんなこと分かりきってる！」

瞬時に動いてよける。

霊夢「読まれていたッ!？」

普通の弾幕を僅かにだけ放つ。

霊夢「？」スッ

今、避けたな。

レミリア「かかったなアホが！後ろを見てみる！」

霊夢「え？」

紅白が振り向くとそこには無防備な下等種族^{変わり種}がいた。

私には見えていたのだよ。貴様が避けたが最後、その先に変わり種がいるという運命

をな!

あいつが倒れたところまでは見えなかったがあいつはこれで2回目だからもう倒れたも同然だろう。

ガキーン!

瞬間、謎の物体が弾幕を弾いた。

何…?!

封太 side

俺の傍にいる黒いコウモリが弾幕を弾いてくれた。

封太「あつぶねー、あつぶねー。念のため呼び出しといて正解やったわ。」

黒いコウモリ「我を弾除けに使うなど貴様、いい度胸しているな。」

封太「変身してねーんだからしやーないやろ。」

黒いコウモリのこいつは「キバットバット2世」。

キバットバット3世の父親で、だーいぶ高圧的なやーつだ。

封太「それより、あんたのことはキバット2世って呼べばいいのか?」

2世「2世でいい。」

封太「アツ、ハイ。じゃあ2世さん。力を貸してください。」

2世「フン。本当ならば拒否したいところだが、我もあの吸血鬼の力がどれほどか興

味がある。

ここは利害の一致でありがたく思え！絶滅タイムだ！」

ツンデレですか？↑多分違う。

そうして俺の腕に2世が噛みつく。

2世「ガブッ。」

待機音が鳴り、ベルトが形成される。

封太「変身 「仮面ライダーダークキバ」

2世をベルトに装着して仮面ライダーダークキバに変身する。

ダークキバ↓（略して）ダキバ「さて、これといった決めゼリフがないけど取り敢え

ず言うか。」

そしていつも通り親指^ツは上^レに人差^シ指^サは^ミ左^ノ手^ノの中^ノ指^サは^ミ右^ノ側^ノという変わった構え

をして言う。

ダキバ「レミリア・スカーレットよ、断言する！王の力を思い知るがいい!!」

アハハ……。チカイチカイ。ニオウヨ、キコエルヨ、カンジルヨオ……。アナタガイル
ソコマデ、モウスグダヨ……。ヤット…ヤット…アナタトアエルネエ……。ソレジャア

ワタシトタアツプリア・ソ・ビ・マ・シヨ。
続く

第16話 旋律・ダークデーモン

……！……っ！

(な……なに……う……う……なにかきこえる。)

……さん……しつか……さい……！

(この声は……小悪魔……?)

こあ「……やさん！しっかりしてください咲夜さん！」

目を覚ますと小悪魔が必死に呼びかけていた。

こあ「あ！大丈夫ですか、咲夜さん？」

咲夜「さつきから五月蠅いわよ、小悪魔……。」

こあ「あつすみません！でも、咲夜さんが気を失って何事かと思ひまして。」

咲夜「というか何で貴女がこんな所に？」

こあ「ああそれはですね、侵入者がパチュリー様と戦闘していたのでそれに巻き込まれたらなくて

聞かれて 逃げていたんですけど途中で失礼極まりない不屈き者にパチュリー様の場所を

案内するために往復してその後隠れていたんですけど、デカイ爆発音が何回も鳴って

ちよつと気になって探してみたら咲夜さんが気絶してるじゃないですかー。

それでいざという時に身代わりになって、あ……。」

そこまで暴露して我に返るこあ。

ていうかなんてこと考えていたのよ。まさに小悪魔どころか悪魔のような考え方ね。

こあ「あ、あの！咲夜さん！勘違いしないでください！ただ、私が介抱したのでその恩返しに

何かあった時守ってほしいと思っただけでありましてね！」

咲夜「言い方変えたけどもう手遅れよ。」

こあ「ううう……。あの……私が大図書館から勝手に逃げ出したことは秘密にしてくれませんか？」

咲夜「……言つとくけど私は貴女なんかには構っている暇はないの。貴女が逃げたことなんか

覚える気にもならないわ。」

こあ「(。・▽・) ホッ——3

あ、そういえばここに来るまで壁や床が破壊されていたんですけどあれは何です

か?」

咲夜「!?」

それを言われて血相を変える。

咲夜「それ本当!?」ガシツ!

こあ「えつ、ええそうですよ。現にほらそこにも。」

横を見ると確かに壁に穴が出来ている。お嬢様ぐらいの身長なら通れるくらいの大
きさが。

そして、これはあの3人の仕業ではない。

咲夜「まずいわ。このままだと……いや、もう既にお嬢様と……。」

こあ「あ、あの咲夜さん?」

咲夜「とにかく人手が足りない……小悪魔!今すぐパチュリー様を呼んできなさい
!」

こあ「ひやつひやい!でもどうしてですか?」

咲夜「……妹様がお嬢様の下に向かってるのよ。」

こあ「妹様が!」

咲夜「私は美鈴を呼んでくるから!急いで!」

こあ「りよ、了解しましたー!」

封太 side

魔理沙「お、おい夢解。お前身体が…。」

ダキバ「断言する。気にするな！」

霊夢「…そう。自分の身は守りなさいよ。」

レミリア「ど、どうなっている!? 私が見た運命で、紅白が避けた後ろにはお前がいた

!

あとは貴様が当たって当然のはずだろ！何故だ!?!」

ダキバ「…それさあ、俺が後ろにいたつてだけで倒される運命じゃなかったんじゃね

?」

レミリア「何…?」

魔理沙「なあ、さつきから運命とか言ってるけど、レミリアの能力つて運命に関係するものか？」

ダキバ「「運命をあやつる程度の能力」つて言ってな。

あいつには未来という名の運命が見えて、そこから最善の行動をとるといふこととで

結果的には運命を変えるつていう能力なんだよ。」

魔理沙「未来予知みたいなもんか？それ強すぎじゃないか？」

ダキバ「つつても本人はこの能力を自由に扱えないんだけどな。

「始まりから終わりまで全部見えるとは限らないし。」

レミリア「そうか…そういうことか…！」

つまり私が見たのは過程に過ぎなかったということか…。」

霊夢「謎も解けたし、さっさとアンタを倒して終わらせるわよ。」

ダキバ／魔理沙「はい！」／「ああ！」

レミリア「私を…？倒す…？人間如きがふざけるなああああ!!!

冥符「紅色の冥界」！

ダキバ「おつとあぶい。召喚「ブロン」」

ダキバにブロンブースターフエッスルを吹かせる。

2世「ブロンブースター」♪

ブロンを召喚し、そこから無数のブロンミサイルで相殺する。

その内にウエイクアツプフエッスルを装填して吹かせる。

2世「ウエイクアツプ・1！」

ダキバ「2人とも一斉にいくぞ！必殺「ダークネスヘルクラッシュ」！」

霊夢「言われなくても！ 霊符「夢想封印」！」

魔理沙「恋符「マスタースパーク」！」

霊夢は追尾型、魔理沙は極太レーザー型、俺は1発しかないがデカめの蝙蝠の形を模した弾幕を、

それぞれ放つ。

レミリア（！…見える、見えるぞ！）

しかし、レミリアは霊夢の追尾弾がありながら魔理沙と俺の弾幕をよけて…!?

霊夢「嘘!? こっちに来た!？」

霊夢の追尾弾を誘導して返してきやガール！

ダキバ「異能「結界」！」

キバの紋章（別名「ライダーズクレスト」）を模した結界をバリアー代わりにして防ぐ。

魔理沙「あつぶなかつたー！サンキューだぜ夢解！」

レミリア「フ、フフフ。やはり運命は私に味方しているようだ！

貴様らの弾幕が手に取るように分かったからな！」

ダキバ「まあ俺に防がれて無傷なんですけどね。」

レミリア「う、うるさい！そこまで見えたわけじゃないし！」

霊夢「もうくめんどくさいわねーその運命を操るつての。何とかしなさいよ説明係。」

ダキバ「誰が説明係だ！今の俺は仮面ライダーダークキバ略してダキバだ！」

魔理沙「じゃあ仮面ライダーダキバ、何かいい方法はないか？」

ダキバ「あ、うん。省略のときはダキバだけでいいよ。

なんか仮面ライダーダキバだとダサク聞こえるから。」

魔理沙「分かった！ダキバ、何かいい方法はないか!？」

ダキバ「そういうわれてもな…。未来予知みたいな能力つてそれ自体には戦闘力がないから

それを使う能力者も基本的に戦うといつても心理戦といったものであつて
 …。」

レミリア「敵が目の前にいながらのんびりとお喋りとは随分舐められているようだ
 なあ！

獄符 「千本の針の山」！

ゲー!?考える時間もくれねえのかよ!?!?!あつ冷静に考えれば普通はそうだわ。

ダキバ 「装備 「ザンバットソード」

セイセイセイセイ!」（キンキンキンキン!）

捌きながら必死に頭の中で思考を巡らせる。

ぶつちやけレミリアみたいな予知能力がありながら物理的な戦闘もできるやつつて
 少ねえから情報が…。あつでも似たようなだとジオウIIがいるな。

ダキバ 「ん?」

待てよ？確かあん時、突破するために…。

一方で霊夢と魔理沙の2人も弾幕を捌いていたが…。

魔理沙「はあ、はあ…。」

霊夢「どうしたの魔理沙？もう限界じゃないの？」

魔理沙「ま、まだ行けるぜ…！むしろ霊夢こそ無理してるんじゃないか？」

互いに疲弊しきっていた。

レミリア「（あいつら分かりやすく疲れてるな。変わり種より先にやつらを片づけるか。）

紅符「スカーレットシュート」

ツ！やべえ！

ウエイクアップフェツスルを再び吹かせる。

2世「ウエイクアップ・2！」

ダキバ「必殺「キングスバーストエンド」

キバの紋章を模した弾幕を蹴り飛ばして相殺する。

レミリア「くっつ！また貴様かあ…！」

魔理沙「ダキバ、こいつの倒し方が分かったか!？」

ダキバ「断言する。対策なんかいらねえ。」

魔理沙「へっ？」

ダキバ「未来だろーが運命だろーが、それを捻じ曲げるほどの力でブチ破りやあいんだよ。」

霊夢「要するに無理矢理に力任せで押し切って勝つてことでしょ？」

ダキバ「珍しいな。お前が俺の言ってることを理解するって。」

霊夢「勘でね。なんとなく分かるのよ。」

アーハイハイ。いつも通りの持ち前の勘ですか。

ダキバ「まずはこれだ。必殺「全滅・ザンバット斬」」

持っていたザンバットソードをレミリアに向かつて投げる。

レミリア「そんな剣一本でどうする気だ？」

あーあ、今のうち動いときや良かったものを。

ザンバットソードが一旦空中で停止したのち、同じものが無数に増えレミリアを取り囲んでいく。

レミリア「!?」

ダキバ「やれ。」

全方位からザンバットソードの雨が降りそそぐ。

レミリア「うぐっ、ガッ、ぐはっ。」

逃げようにも身動きが出来ないレベルの物量でモロにダメージを受けてしまう。ボロボロになってレミリアを地面に着かせる。

ダキバ「まだまだいくぞ。必殺「インペリアルデストラクション」」

紋章を二つ出してレミリアの真上下にまで動かすが…

レミリア「そんな何回も！」

おや、寸でのところで横に飛んだか。

ダキバ「じゃあこれだ。必殺「ロイヤルパニッシュメント」」

ゴルフボールサイズの弾幕を放ち、レミリアに命中させる。

レミリア「ぐ、当たってしまったか…。」

霊夢「……何も起こらないけど？」

レミリア「？」

ダキバ（ニヤリ）「断言する！かかったなアホが！」

瞬間！困惑しているレミリアの背後にキバの紋章が現れ、拘束するかの如く張り付く。

レミリア「うっあゝ!?体が言うことを…！」

次に紋章から飛ばし、足から放つ弾幕を当てることで紋章のところにまで戻すのを2回繰り返す。

最後は直接触らずに首を掴む…はすだけどレミリアが無理矢理脱出しやガール。ダキバ「まだ回避するほどの余裕はあるんですね。」

思ったよりあなたの、というより吸血鬼の体力を侮ってみたいです。」レミリア（私、吸血鬼と名乗ったか？…いやそんなことは今どうでもいい。）

「はあ、はあ。き、貴様、下等種族のくせに私を本気にさせるとは…。」

「どうやら私の最強の技を見せる必要があるようだな…！」

「どうやらここが正念場のようだな。」

ダキバ「取り敢えず2人ともどっかに隠れといて。今からスゲー技使うから。」

※今更ながら封太達が戦っている部屋は大広間みたいな場所で広く、色々な物があります。

本日3度目のウェイクアップフェッスルを吹かせる。

2世「ウェイクアップ・3！」

ダキバ「これで終わりだ！レミリア・スカーレット！」

レミリア「終わるのは貴様だけだ！「スカーレットディスプレイー！」」

ダキバ「ラスペ発動！必殺「キングスワールドエンド！」」

片や全方位攻撃。片や自爆攻撃を改竄し、同じような技をもつ攻撃。

2人の弾幕は部屋を崩壊するには充分過ぎた。

互いの大量の弾幕が拮抗する。

そんな中、レミリアは自分が勝つという運命が見えないことに焦っていた。

レミリア（運命は…何か運命は見えないか…!?)

そしてようやくレミリアに見えた運命は―。

レミリア（あ………まただ。またあの運命が…。）

封太「あゝ、もうゝむりゝ。」

結果は夢解の辛勝であつた。

魔理沙「むっ、夢解！大丈夫か!？」

封太「はい、何とか、辛うじて、ギリギリ、生きてます。」

霊夢「その割には今にも死にそうな顔してるけど？」

封太「あれ?…何か死んだおじいちゃんが見えるけど…?」

魔理沙「それ思いつきり三途の川が見えてるぜ!?!おい夢解、帰ってこーい!!」

霊夢「そうよ!アンタが死んでもらっちゃ困るのよ…!」

れ、霊夢お前つてやつは…!ずっと人の心が無いような冷えてえやつだと思つてたけどそんなk

霊夢「アンタが死んだら誰が宴会の準備を手伝つてくれるのよ…!」

封太「あゴメンやっぱ死にそう」(首カクンツ)

魔理沙「あああああああ！死ぬなあー！夢解ー！」

???「あの…。」

霊夢「！」

魔理沙「だっ誰だ!?!」

封太（この流れはもしかして、もしかしたら、もしかすると…。）

2人は声のした方へ視線を向ける。

そこにいたのは…。

???「貴方達は、誰なの？」

続く

第17話 狂気・デストロイヴァンパイア

??? 「貴方達は、誰なの？」

その人物はレミリアに似ていて、俗に言う幼女だった。

血のような紅を中心とした服装。

これまた血のように紅い目とサイドテールに纏められた金髪でレミリアにも言えるのだがナイトキヤツプ（帽）を被っているのが特徴。

何より目を引かれるのが七色に分けられた八つの宝石が付いている翼。

翼というよりは、「8個の宝石が付いた一对の枝」という表現もできなくはない。

また、手にはグネグネとして、先端にスピードを模した杖のようなものも持っている。

霊夢 「私は博麗の巫女、博麗霊夢よ。」

魔理沙 「私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙様だぜ？」

そしてこいつは夢解：夢解：なあ霊夢、夢解の名前って何だっけ？」

霊夢 「いや、覚えてない。こいつ、名字で呼ぶことを命令してたから忘れたわ。」

※前回の終わりから封太は目を瞑って気絶しているフリをしています。

ってか俺が名字呼びにしてくれて言っただけとはいえ忘れるなんて酷くないですか？

O r z

まだご対面してから1日も経ってませんよ？

霊夢「で、アンタは誰よ。ま、これから退治する妖怪の名前なんか知る必要もないけど。」

オイコラ霊夢、一言余計だ。

??? 「フランドール・スカーレット。それが私の名前。」

悪魔の妹・フランドール・スカーレット 能力 「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」

フラン「ねえ、私と遊んでくれない？」

霊夢「ああ？遊ぶ？」

魔理沙「うへえ。私らもうクタクタなんだわ。他をあたってくれないか？」

俺も流石にちと休みてえ。

フラン「違う。遊ぶのは貴女2人じゃないから。」

ギクッ

魔理沙「え、じゃあ誰だ？」

フランは指を指して指名する。

フラン「その横になっている人間。夢解つていうのと遊びたい。」

ヤツパリネー。そんなことになるんじゃないかと思つたよ。

でも封太さんは起きて遊び相手になる気は1ピコメートルもありませんよーだ。

それにこいつらも気絶（のフリを）している本人の意思をガン無視して話を進めるわ

け・・・

霊夢「あ、どうぞどうぞ。後で返してくれたらいいから。」

ブツン

封太「オイゴルア霊夢貴様あ!! 楽しみたいからつてあつさり売るなあ!!

しかも後で返してくれたらつてわしや物か!? 物扱いか!?

それに戻つて来たら来たらで宴会の準備をさせやガールに決まつてんだろ!?

霊夢「あ、起きた。」

封太「・・・あ。」

：やつちやつたZ E ☆。いややつちやつたぜじゃねーよ! ↑セルフツツコミ

チクシヨーメエエエエエ!

フラン「ねえ、私と遊んでよ。」

封太「はあ：分かつたよ。でもちよつとだけ待つてくれ。遊ぶために準備が必要だか

ら。」

フラン「分かつた。」

確かにおもちゃとして日本列島のみならず世界にも販売されていますよ！
でも俺は違う！決まった音声以外にも日常会話からアドリブまでお手のもの。

この世でたった1人の真正銘のキバットバット3世だ！」

この金色のコウモリみたいなのは「キバットバット3世」。

通称として本編で「キバット」と呼ばれているためここでも基本的にそう呼ぶ。

今からの変身やスペルカード発動など、とにかくなくてはならない存在だ。

と、いつものように簡素すぎる解説をしてつと…。

封太「お前さつきからメタインじゃー！！販売とか音声とか現実の話を混濁すな！

見ろ！3人ともなんのこっちゃか分かんねえ顔をしていやガール！」

キバット「封太！そんなことより死んだ魚のような目をしたあのガキんちよに

俺が本物のキバットだってことを証明するために早く変身しなよぜ！」

封太「聞いてねーし目的が変わつとるやんけ！つかお前キバットじゃなくてももうアレ

だろ!?

完つ全に中の人ネタを利用しているぎん キバット「はいガブリンチョ！」

ガン無視かーい！しかもそれスーパージョウのやーつー！

腕に噛みつきベルトが形成される。ええいもうこうなりや半ばヤケだ!!

封太「スペルカード発動！変身「心の音楽を聞き取るハーフ！」」
ベルトにキバットを付け、平成仮面ライダー9作品目であり、石ノ森章太郎生誕70周年記念作品

の「仮面ライダーキバ」に変身する。

フラン「じゃあ遊ぼうか。」

キバ「おう、遊ぼうぜ。」

殺し合弾幕こっこいをなあ！

フラン「行くよ。」

まずは小手調べのつもりか普通の弾幕を放ってくる。

その弾幕をよけては、時々紅いエネルギー状の鎖を使って打ち消したりしている。

フラン「ふーん、中々やるじゃん。」

キバ「そりやどうも、誉め言葉として受け止めておきますよ。」

フラン「これはどうかな？禁忌「クランベリートラップ」」

むっ、これは初見且つ自力での突破はムリポだな。

キバ「行くぜキバット。必殺「ダークネスムーンブレイク」」

キバット「ウエイクアップ！」（♪〜）

周囲は月夜に変わり、キバの周りには紅い霧が立ちこむ。

霊夢「え？なんか暗くなっているけど？アイツの能力？」

魔理沙「見ろよ霊夢！部屋の中なのに満月があるぜ！紅い霧もだ！」

キバ「ハアー…はあ！」

右脚を高く振り上げ、キバットが右脚の鎖カテナを断ち切ることでそこに封じている赤い翼ヘと緑の魔皇石ズゲイを開放する。

そのまま高く上昇したのち、月を背にとんぼ返りで体制を整え、弾幕を放ち相殺する。

フラン「へえ、じゃあ次ー。禁忌 「レーウ、アテイン」」

フランの持つてる杖のようなモノにエネルギーが宿り、そこから弾幕が放たれる。

キバ「派生 「ガルルフォーム」」

キバット「ガルルセイバー！」（♪〜）

青いフェッスルを吹かせるとオーテンから「魔獣剣ガルルセイバー」を取り出す。

それを手に取り、機動力が高い青い姿のキバ「ガルルフォーム」に変わる。

ガルルフォームの持ち前の素早さで掻い潜って、斬り合いをする。

（ガキツ、キイン、カン！カン！ガキインツ！）

だがこれでは勝負がつかなさそうなので一旦距離をとる。

ガルルセイバーの刃部分をキバットに噛ませて魔皇力を注入する。

キバット「ガルルバイトー！」

キバ「必殺」「ガルル・ハウリングスラッシュ」

ガルルセイバーを啜えて薙ぎ払う。

フラン「まだまだいくよー。禁忌」「カゴメカゴメ」

緑のフェッスルを使用する。

キバ「派生」「バッシュャーフォーム」

キバット「バッシュャーマグナム」♪

「魔海銃バッシュャーマグナム」を出現させて手に取る。

今度は遠距離攻撃と水中の戦闘が得意な緑色の姿をした「バッシュャーフォーム」に変わる。

キバ「異能」「アクアフィールド」

一時的に周辺を水上のようにする。

フラン「私達吸血鬼は水流を渡れない。考えたね。でも空を飛べるから意味ないんじゃないの？」

キバ「問題ない。これは俺が動くためにだ。」

俺はスケートの如く優雅に滑りながら弾幕を発射する。(ババババン！)

霊夢「冷たっ!?!ちよっと靴が濡れたじゃないの！」

魔理沙「んっ!?何で部屋が水浸しになってんだ!？」

あ、スマン。何も言ってなかったばっかりに…。

バツシャーマグナムを嘯みつかせて必殺技を発動する。

キバット「バツシャーバイト!」♪

キバ「必殺」「バツシャー・アクアトルネード」

銃に水の力を込めてフランに放つ。

フランが逃げようするがああ、の弾幕は当たるまでしつこく追いかける。

あたかもどつかの巫女さんのスペカのように。

フラン「しつこいなー。キュツとしてドツカーン。」

ありや、無理矢理破壊されちった。

フラン「じゃあこれ。禁忌「恋の迷路」」

キバ「派生「ドツガフォーム」」

キバット「ドツガハンマー」(♪)

今度は紫のフェッスルを鳴らして拳と合体したような「魔鉄鎚ドツガハンマー」を召喚する。

そしてパワーと防御に秀でた紫色の「ドツガフォーム」になる。

キバ「おりやあ!どりやあ!」(ドン!ガン!)

近づいてくる弾幕をハンマーで弾き飛ばす。

フラン「ひゃー危ない。」

あらかた片づけるとドツガハンマーの持ち手の部分を噛ませて必殺技を発動する。

キバット「ドツガバイター！」

ハンマーを縦に持って、後ろにあるスイッチを引く。

それにより、拳に隠された「トウルーアイ」が解放されそれを見たフランの動きを止めめる。

フラン「え、動けない。」

キバ「必殺「ドツガー・ハンマストラップ」」

トウルーアイを閉じて、拳状の弾幕を形成する。

ブンブン振り回し勢いのつけた弾幕は指一本も動かさない吸血鬼に命中する。

魔理沙「おっ、ようやく当たったぜ。」

しかし、煙が晴れたそこにはピンピンしているフランがいた。

霊夢「吸血鬼というだけあってそう簡単にはいかないわね。」

フラン「すごいすごい夢解って強いねー。」

キバ「……。」

何だろうか。なーんか変なんだよなあ。

フランってこんなんだっけ？

少なくとも俺のイメージではフランはここまで静かなやつじゃなかったんだけどなあ。

まあ、原作と二次創作で性格が別人レベルで違うのは、もはや東方では当たり前か。フランも400%くらいはその影響をくらってるし。

んーでもなあ…。ちよつとカマッぽいことでもかかけてみつか？

キバ「フランドール・スカーレット。質問する。お前、何か隠してないか？」

フラン「どういうこと？」

キバ「だつてよ、いま俺たちって殺し合あそんでいるつてんだろ？」

遊ぶつてことは楽しいこと。なのにお前ぜんぜん笑つてねえじゃん。」

フラン「フランはさつきから笑っているよ？」

キバ「顔だけならな。心から笑ってるわけじゃねえだろ？。本当は楽しくないんだろ？」

本性さらけ出せよ。」

フラン「……………ハハハ。」

今何か言ったか？小さすぎて聞こえなかったんだが。

フラン「はあ…もういい、遊びはおしまい。」

キバ（雰囲気が変わった？）

そう言い終えると一瞬で距離を詰めて、激しく攻撃してくる。

フラン「ほら、ほら、どうしたのよ。」

キバ「ちよつ、おい、ぐつ、ううつ……！」

その圧倒的すぎるパワーのゴリ押しに耐え切れずハンマーを手放してしまう。

それと同時に基本フォームの「キバフォーム」に戻ってしまう。

キバ「やべつ……！」

フラン「あーあ、でも終わらないよ？」

キバ「……ひっ。」

この時、封太は本能的に感じ取った。対等だった立場が崩れたということ。

余裕を完全に失った彼には勝利という2文字が消えてしまった。

魔理沙「大丈夫かな夢解……。さつきから押されてるみたいだぜ。」

キバ「はっ博麗さんに霧雨さん、助けてください！自分1人じゃ無理っす！」

霊夢「お金くれるなら手伝ってあげないこともないけど、いくら払うつもり？」

封太「いくらって……いや俺一文無しなんですけど!?!てかアンタ分かって言ったでしょ

ソレ!?!」

霊夢「じゃあ無理ね。アンター人で頑張りなさい。」（ニヤニヤ）

こ、こんニヤロ〜!

フラン「お金があれば遊んでくれるの?私が出そうか?」

霊夢「えっ」

魔理沙「ほう、いくら出すんだ?」

フラン「コインいっこ。」

霊夢「少なっ!いくらなんでも足りなさすぎるよ!!」

うん…そこは概ね同感だ。

魔理沙「一個じゃ、人命も買えないぜ。」

おっ来るぞ。あのセリフが。

フラン「貴方達が、コンティニューできないのさー」 禁忌 「フォーオブアカインド」

次の瞬間、フランが4人に分身する、ってえ!名言とついでに分身すんのかーい!!

霊夢「ええ!」

魔理沙「ふ、フランが増えたあ!?!おおい霊夢!お前と一緒に戦うとか言うからー!」

霊夢「はあ!?!私が原因!?!アンタがいくらかあいつの話に乗らなければ良かったのよ

!!

おーおー、責任の押し付け合いはなんとも醜いものですなあ。

フラン ABCD 「サア、私と遊ぼうよ…!」

マジイ：ツ！フラン4人分は流石の俺でも無理ゲー、否、詰みゲーだ。
と、ちようどそこへ。

咲夜「お嬢様ご無事で…っこれは!?!」

こあ「はわわわわ！妹様が1匹、妹様が2匹…。」

魔理沙「お前たち…!」

美鈴「あ、皆さんいらしたんですね。」

咲夜さん、こあさん、美鈴さんの3人がやってきた。

でも何で？フラン絡みか？…ええい！この際どうでもいい！

キバ「十六夜さん達！一時休戦です！今は協力して妹さんを止めましょう!!」

咲夜「私達で？」

美鈴「妹様を！」

こあ「止めるく!?!」

レイマリ「いや無理だつてー!!」

キバ「無理じゃないはずです！妹さん1人に2人がかりでやれば何とかかなると思います

す！多分！」

咲夜「いや、そうはいうけどここには6にしかいないし、仮に2対1でも勝てるわけ
ないじゃない。」

美鈴「咲夜さんの言う通りです。妹様相手に私達ではとても…。」

こあ「殺される…みんな殺される…！」

全員が戦意喪失に陥っているなか、封太以外でまだ諦めていない者がいた。

?????

「私も戦うわ。」

声のした方を見るとまだ傷の癒えておらずも立ち上がっているレミリアがいた。

咲夜「お嬢様?! 危険です! その状態では…！」

レミリア「フランに関しては我々側の問題でもある。」

咲夜「で、ですがこんな訳の分からない連中と…。」

レミリア「咲夜。これは命令だ。今から我々は紅白と白黒と変わり種と協力してフラ

ンを止める。」

キバ「スカレットさん、ありがとうございます！」

レミリア「勘違いするな。いずれは貴様らも潰すからな。」

(変わり種。私は認めないからな。あんな運命、訪れるわけがないんだから

フランを止めるついでに同士討ちにでもなつてもらおうからな。)

魔理沙「ん? でも7人で結局1人はフランと1人だけ戦わなくちゃならないぜ?」

キバ「それは俺がやりますよ。」

霊夢「さつきまで負けてたくせに。」

キバ 「もう大丈夫。本気出すから。」

フランB 「終わった？」（クスクス）

フランC 「それじゃあ…」（ケラケラ）

フランD 「今度はみんなで」（ヘラヘラ）

フランA 「殺し合^遊いましょう？」（ニタア）

続く

フランケン族の最後の生き残り「ドツガ」だった。

フランB「何コイツ。固すぎるでしょ…。」

いくら当ててもあまり効果がなく、フランBは打ちやめる。

ドツガ「(グツ)」

ドツガは振り返って2人にサムズアップをする。

美鈴「あ、はい。ありがとうございます。」

思わずサムズアップをお返しする美鈴。

フランC「貧弱貧弱ウ！」

レミリア「やめなさいフラン…いい子なんだから部屋に戻って頂戴…！」

フランC「やーだ。お姉様の言うことなんか聞かないもーん。」

咲夜「妹様…。」

2人とも手負い状態な上、相手が身内なため本気を出せず、苦戦を強いられていた。

フランC「消えちやえ。禁断「カタディオプロティック」

咲夜「危ないですお嬢様！奇術「エターナルミーク」！」

対抗して弾幕を放つ咲夜だが、被弾してしまう。

咲夜「きゃあああ！」

レミリア「咲夜…。」

「それー！」

弾幕が命中する前に目の前の弾幕が一掃される。

レミリア「な、何だ。何が起こった？」

2人の前に現れたのは緑色でヒレがついている怪人。

バツシャーマグナムそのものであり、マーマン族の最後の生き残り「バツシャー」。

バツシャー「はじめまして。僕の名前はバツシャーって言うんだよ。よろしくね！」

レミリア（馴れ馴れしいなこいつ。）

フランD「お前は今まで食ったパンの枚数をおぼえているのか？」

霊夢「え？この状況で何言ってるの？」

魔理沙「私は13枚食ったぜ。」

霊夢「いや正直に答えなくていいでしょ!?!しかも何か不吉な数！」

フランD「スキあり。禁断「過去を刻む時計」」

霊夢「あ、まづい。」

???「フン！」

青い狼のような怪人が蹴とばすなり、引つ掻くなりで近くの弾幕を打ち消した。

魔理沙「だ、誰だか知らないけど助かったのぜ。」

霊夢「てかアンタ誰？新手的妖怪？」

フランA「何で？」

キバ「彼らに頼んでうまく誘導したんですよ。ありがとうございます。」

ガルル「仕方なくだ。」

バツシャー「えへへー。」

ドツガ「(コクリ)」

キバ「では皆さんお願いします!!」

レキバ「よし来た！」アクバ「はあやれやれ〜。蝙蝠使いが荒いこと〜。」

サガつち「リョウカイ。」2世「承知した。」

今までご登場してもらった変身アイテム兼使役モンスターの皆さんに時間稼ぎしてもらおう。

フランA「うわっ、なにこれうっとおしい。」

キバット「そいつらは本物だけとおもちやにもなってるぜ。」

キバ「何でお前はそんなメタ発言ばっかしなんじゃい！」

キバット「おいそんなカツカすんなって。今のうちにあくしろよ。」

キバ「もう本来のキバットのキャラからドンドン離れてるってー!!」

そう言いながらも取り敢えず3つのフェッスルを取り出す。

キバット「ガルルセイバー! (♪〜) バツシャーマグナム! (♪〜) ドツガハンマー

！(♪〜)

キバ「強化「ドガバキフォーム」

ガルル、バツシャー、ドツガの3人の体型が変化し、彫像体になる。

霊夢「あれ、これさっきのじゃ…？」

魔理沙「え じゃあこいつら武器にもなるのか!？」

3人がキバの周囲を回り、融合する。

左腕は青く、右腕は緑に、胸は紫色の鎧に変わり4つのフォームが混ざった

「ドガバキフォーム」に変わる。

そしてウエイクアップフェツスルを差し込み必殺技を発動する。

キバット「ウエイクアップ！」(♪〜)

キバ「必殺「ドガバキムーンブレイク」

キバ+アームズモンスター3人分の威力の弾幕を受けて、4人のフランが1人に戻る。

フランABCD「うわあああああ!!」

元の1人に戻って座り込んでいるフランにレミリアが話しかける

レミリア「フラン。どうして勝手に部屋から出たのよ。いつもはずっと自分の部屋に

いて

大人しくしているじゃない。何で今日に限ってこんなことに……。」

フラン「……だって寂しかったもん。」

レミリア「……!」

フラン「私が能力を、ありとあらゆるものを破壊する程度の能力を完全に制御しきつてない

から、何でもすぐに壊しちゃうからお姉様は私を閉じ込めた……。」

誰もフランに近づくことも、話すことも、遊ぶこともしてくれない。

お姉様達はいつもできることが出来ない。

お姉様も咲夜もパチュリーも美鈴もこあもみんな計画を進めてるのに

そこにフランはいない……。」

今回だけじゃない、フランはいつつもいつつも仲間はずれ。

……私はいつも一人ぼっち……寂しかった。」

咲夜「妹様……。」

キバ「……でもさあ、それ自業自得じゃね?」

一同「え?」

キバ「だってよお、それって要するに自身の能力をコントロールできないし、

それを何とかしようにも誰かに助けを求めることはなかった。」

周りは手伝おうとしたかもしれねえのにな。

その結果がこれなんじゃねーのか？

今まで何も言わなかったくせに今頃虫の良すぎる話だぜ。

断言する。お前は能力抜きで自分の意思で周りとの関係を破壊したんだよ。」

咲夜「貴様……ッ！黙っていれば好き勝手に……！」

フラン「……アアア……」

レミリア「フラン……？」

かしら?)」

みんながいなくなつてこの部屋だった場所には俺とフランしかいなかった。

キバ「来い！召喚「タツロット」！」

オーテンから「魔皇竜・タツロット」を召喚する。

タツロット「みつなさくん！お待たせいたしました〜！ずっとスタンバつてました

よー！」

・・・何かこの作品「ぎ」から始まる漫画に乗っ取りかけられとるわ。

でも今はそれどころじゃねえ、気を取り直して…。

キバ「最強「エンペラーフォーム」」

タツロットが左腕に装着する。

タツロット「へんっしん！」

全身を黄金の鎧が包み、胸には紅い装甲が纏われる。

マントが出現し、顔も金と紅を中心としたものに変わることでキバの最強フォーム

「エンペラーフォーム」に変わる。

キバ「ではフランドール・スカーレットよ。サシでの勝負といこうじゃねーか。」

続く

第19話 フィナーレ!異変解決

紅魔館：中庭

魔理沙「ぜえ、ぜえ…こ、ここならもう大丈夫なんじゃないか？」

バツシャー「多分大丈夫。」

レミリア「おいて、そういうえばパチュリーはどうしたんだ？」

咲夜「確か小悪魔曰く、いくら呼んでもついてこないためおいてきたと仰っておりますが…」

「ということはまさか…？」

こあ「あああ…！そうでしたー！パチュリー様のことすっかり忘れてましたー！

まずいです！今すぐ戻って助けにいかなくては！」

咲夜「あなた正気!?ここに来るまで館のあちこちが壊れていつ崩壊してもおかしくない状況

だったのよ!そんな中に戻るといふのよ!」

こあ「確かに!ということは諦めるしかないということなんでしょうか？」

まあ一応主人である引きこもりなんかより私は自分の命が大事なのでいいです

けど。

「いや、誠に残念ですg」

パチュリー「主人を差し置いて使い魔である自分はさっさと逃げる。

まさに悪魔らしくいい度胸してるわね」

こあ「ヒツ!? パパッパツ、パパ、パチュパチュパチュ、リリリリリリいゝゝ様?」

そこにはパチュリーが：正確にはドツガにおんぶされたパチュリーがいた。

パチュリー「私はここよ。」(ヒョッコリはん)

こあ「ああ! そこにいらしたのですね! でも何で紫の人がおんぶしているんですか

?」

パチュリー「後ろから積み上げた本に押しつぶされて、退かそうにも魔力切れで動か

せず

途方に暮れていたところをこのデカブツが助けてくれたのよ。」

こあ「成程! ありがとうございます! 紫のデカブツさん!」

ドツガは返事のもりなのかサムズアップした。

バツシャー「その子の名前、ドツガね。」

咲夜「名前、あつたんだ。」

ガルル「それはそうと吸血鬼。お前、何でこんなことをしたんだ。」

霊夢「そうね、あの妹の事もあるし説明してもらおうわよ。」

レミリア「それは……フランのためよ。」

霊夢「フランの？」

レミリア「あの子は能力を制御しきれなかった。壊したくないのに何でもかんでも破壊して

うにもした。フランも苦悩していた。だから閉じ込めたのよ。極力誰にも関わらないよ

生まれた。あの子がこれ以上苦しむ姿を見たくなかった。でもそうすると別の問題が

パチエが言うにはこのまま1人の状態が続くとフランが暴走する。フランの心の中には何かを壊したい欲望があつて頭がそれに支配されてい

る。そして壊すだけのことしか考えられず時間や場所も気にせず動いたら最後、太陽の光に当たり灰となって死んでしまう。

そんな最後私は嫌だ…ッ!

だからそれを塞ぐための方法としてはフランをこの世から消すか、フランが思うままに破壊できるように自由にさせることの2つぐらいしか

なかった。

私としては後者にしたかったけど紅魔館^{ウマ}だけでは限界があった。

フランの欲望は私達の想像以上に高まっていた。もはや選択の余地はなかった。

だからあの子がいつ外に出ても大丈夫なようにするために太陽を隠した。

これが私が異変を起こした理由よ。」

魔理沙 「つまり妹が死なない為に異変を起こしたっていうのか？

でもそれだとアイツがとんでもない数を破壊してかなりの被害になるぜ？

そうなるくらいならいっそのことあいつを死なせた方が手っ取り早いんじゃない？」

…。

レミリア 「何と言われようが私は意思を曲げるつもりはない!!

フランと私は血の繋がった唯一の家族なんだ!!

フランの為ならたとえ幻想郷中を敵に回す覚悟もあるぞ!!

私にとってフランはそれだけ大事な存在なんだ!!」

霊夢 「でもねえ、人間に害があるし迷惑だし異変を解決するのが私の役目だし。」

レミリア 「知るか！お前に役目があるように私にだってあるんだ！

フランからは姉や家族として見られてなくても今まで何もしてやれなかつ

た分

自由にさせる権利がある!!姉としての役目を全うしなくてはならないんだ!!

だからっ…頼むッ…!フランを…あの子にだけは手を出さないでくれ…ッ!

かの吸血鬼は自分より下等種族だと蔑んでいた人間相手に頭を垂れてでも懇願していた。

咲夜「お嬢様…。」

フラン「お姉様…?」

レミリア「…ッ!フラン…!?!」

レミリアが振り返るとそこにはフランが呆然として立っていた。

レミリア「な、何故ここに…?確か館の中にいたはずじゃ…。」

フラン「それは…」

封太「それに関しては俺から説明しよう!」

ふう た が あ ら わ れ た !

封太「え?何で俺とスカレットの妹がここにいるんだって?

それじゃ、みなさんにも分かるようにシークバーを巻き戻して確認しよう♪」

キバット&タツロット「これ小説なんだ（です）けど…。」

回想・紅魔館

キバ「やつと2人つきりで話せるなスカーレットの妹。」

フラン「コワス、コワス、コオワアスウウウウウウウー！」

もはや会話は成り立ちそうにない。

キバ「うーんちよつち煽りすぎたか。まあいいや、ならば下げればいいだけ。ハッ！」
近づいて肉弾戦を繰り広げる。

ドガツ、バキツ、ビュン、ボコツ、ガンツ！

キバ「う、中々やるな。」

向こうはダメージなんぞ知ったこっちゃあないと言わんばかりに攻撃してきやがる。

フラン「アアア：ナンデコワレナインダアアアアアア!!」

キバ「そりゃこんなところで壊れるわけにはいかないからな。」

そう簡単に終わってたまるかっつんだ。」

フラン「サツサトコワレオオオオオオオ!!」

コイツツ！

キバ「やつぱりそれがお前の本性じゃねーか！お前の心は狂気に支配されてるんだよ

フラン「ナンデ…？ソレハ私ガナンデモ壊スカライツハ私ガ怖クテ無理矢理閉ジ込メタ。

私ヲアンナ所ニ閉ジ込メテ、アイツハ私ノ事ヲ忘レテノウノウトシテ…」

封太「はいそこおかしい。明らかに矛盾してます。君は何でも壊せるはずなんだよね？」

じゃあその閉じ込められた部屋も壊して自由になれたはず。

なのに何故今までそれをしなかったのでしょうか？」

フラン「エ？ソレハ…ワ、私ガ迷惑ヲ掛ケタクなかつたから…アレ？」

いいぞ…！

封太「495年も閉じ込められたから記憶が改竄されてるっぽいね。

ちよつともう一回思い出してみてよ。」

フラン「私は何でもコワシテ…お姉様が閉ジ込メテ…

デモそれは私ガこれ以上コワサナイ為に…。

私もソレヲ分かつて壊サナイヨウニ…。なのに壊したくて壊したくてオサエキレナクテ。

それでこんなことになったのはすべてお姉様のせいだって…。」

封太「そこから勝手に思い込んだ。だけどね君は本当のところは姉を恨んでいない。

姉も従者も全てをその手一つで壊せる君がどうして壊さなかったのか…。

それはね君自身が紅魔館のみんなが大好きだからだよ。」

フラン「私がみんなを…大好き…?」

封太「うん。今から言うことは全てただの俺の推測だから実際は分かんないけど

もしスカレットの姉貴や紅魔館のみんなが君のことを嫌いだったら

嫌いな人にむけて何かしら嫌なことをしたはずでしょ?

例えば吸血鬼にとって嫌な事、太陽に当てるとか?

でも今までの君の過去を聞く限り、部屋から出ないようにしただけで

君の暮らし自体は便利なものだった。これは嫌いな人にやることではないね。

となると考えられる可能性としてみんながフランの事が好きなんだよ。

今回の異変も空を紅い霧で覆わせて太陽が見えないようにしたせいだ。

あたかも吸血鬼にとって活動しやすい状況にしたようなもんだよ。

ガちな話、こんな大掛かりなこと自分意外だと家族、大好きな妹の為でもないし

しないよ。

この異変を起こしたのも君の為なんじゃないかな?」

フラン「私の…。」

封太「あくまでこれは俺の予想だから実際には違うかもしれない。

レミリアの気持ちを知るには本人に聞くのが一番だけど…

フラン、君はその真実を知る覚悟はあるか？」

そこまで言うとしばらく考えたフランは小さく返事する。

フラン「……うん。」封太「今うんって言ったよね!? その気はあるってことだよね!？」

フラン「えっ…ええと…」

封太「おーし! それなら善は急げだ!

その先はお姉ちゃんがいるから彼女の本音を聞いてあげてね!!」

フラン「ちよつ、ちよつと待つて」

オーテンを出してフランをその中に入れ込む。

封太「さて、俺も外に行くか。え? どうやって? そりや歩きで。」

封太「とまあそんなわけでございますよ。」

霊夢「何か最後、強引に話進めたわね。」

説得の素人は黙つとれ。人生たまには強引に行くことも大事なんじゃない。

オーテンを抜けた先で聞いた姉の本音、それを聞いてあいつは今どんな心境なのや

ら。

フラン「お姉様…フランのこと嫌いじゃなかったの…?」

レミリア「ツ、当たり前だろ…! この世界で血の繋がった唯一の家族なんだぞ…!」

嫌いなわけ…ないじゃ…ないか…! ヒック」

フラン「お、お、ねえさま…ッ!」

レミリアの涙につられて同様に泣くフラン。

一歩ずつ歩き、次第に2人の距離が縮まってくる。

そして2人は抱擁を交わした。

フラン「お姉様っ、ごめんなさい。フラン、勝手にお姉様や咲夜のせいにしてた。

私、勝手に恨んでいた。フラン悪い子だった。」

レミリア「いいや悪いのは私の方だ。それほど追い詰められていたのに

姉である私は何もしなかった。私はお姉ちゃん失格だ…。」

フラン「そんなことないよフランが…っ!」

ひとしきり泣いて落ち着いたスカーレット姉妹に話しかける。

霊夢「それで、いい加減にこの霧を消してもらいたいだけど?」

魔理沙「そうだぜ! 私達が勝ったんだから勝者の言うことは聞いてもらおうぜ!」

あれくたしか勝ったのはほぼ9割方俺のおかげなのでは?

まあどのみち異変は終わらしてもらいますけどね。

レミリア「ああ、そのことだが…気が変わった。」

霊夢「は?」 魔理沙「へ?」 封太「ほ?」

レミリア「断言する！フランと仲直りした以上、目的は変更だ！私が幻想郷を支配する！」

大々的にそう宣言…否、断言したレミリア。

封太「おい!!勝手に俺の名言使うなよ!使うなら本人に許可をとれ!許可を!」

・・・そんな中、的はずれもいところな事をいう男がここに1人。

美鈴(え、怒るところですか?)

咲夜(迷言の間違いじゃないかしら?)

こあ(てか許可とれば使ってもいいんですね…。安いですねあなたの名言の価値。)

魔理沙「おいおい、そんなこと聞いてないぜ……！」

レミリア「今思いついたからな！」

霊夢「ともかくアンタたちを退治することは変わりないわね。」

レミリア「クツクツクツ、力を合わせた私達2人に勝てると思っっているのか？」

フラン「断言しちゃうよー！お前たちをぶつ壊してやるー！」

封太「だあーから人の名言を勝手にD o o r !？」

フランが放った弾幕に当たって紅魔館の玄関ごとぶつ飛ばされる封太。

(ドンガラガツシャーン！)

こあ「ああー！玄関がー！」

霊夢「魔理沙、私達でもアイツらを止めるわよ！」

魔理沙「ああ！私のミニ八卦炉が火を噴くぜ！」

キバツト「おーい大丈夫かー？」

封太「この状況で大丈夫なわけねえやろがい……。」

取り敢えず瓦礫から出て立ち上がるうとするが……ダメージが大きく膝をついてしま

う。

バツシャーン「あつ封太君しつかりして！」

バツシャーンに抱えられないといけないレベルにまでになっている。

マジイ、これではとても…。

封太「クソ…これじゃあ無理矢理変身しても足手纏いになるだけだな。

まつ、最後までいいはあいつらに譲るべきか？」

ガルル「じゃあ迷言のことは見逃すのか？」

夢解「…：それきいたら引くわけにはいかんくなった。でもよお飛翔体でフラン1人

抑え込むのがやつとなんだぜ？レミフラは無理あるって。あと名言な。」

タツロット「封太さん！僕たちにはまだあれがあるじゃないですか！究極フォームが
！」

夢解「確かにそれなら勝ち目はあるかも…！いやでも強すぎると可哀想だな…。」

バツシャー「え…：今そんなこと気にしてる場合じゃないと思うけど？」

ドツガ「戦闘パートで必要以上に長くするとつまなくなるからここでさっさと決め
ロヨ。」

今回は紅魔郷編の後処理の一部も含んでいるシナリオだから

そつちをメインにしねえといけねえんだヨ。」

封太「やつと喋ったと思ったら第一声がメタ発言!?しかも口わるっ!!」

キバツト「あく…：まあ取り敢えずなるうぜ？究極フォームに。」

封太「…分かったよ。それとリミッター解除をする。」

レミリア「望むところだ、くらえ!呪詛「ブラド・ツエペシユの呪い」

タツロットの頭部のホーントリガーを引き、背中の回転盤インペリアルスロットを回転させることで、「モンスターフィーバー」を発動させる。今回は青の絵柄を出す。

キバ「必殺「エンペラーハウリングスラッシュ」!」

合体してタツロットの口から炎が放出したことにより薙刀のようになったガルルセイバー。

キバ「うおりゃあ!!」

それをたつた一振りですべての弾幕を一層する。

魔理沙「す、すげえ…!」

レミリア「えっあの、何か今までと規模が違うのだが…。」

フラン「お姉様下がって!今度はフランが行くよ!秘弾「そして誰もいなくなるか?」

間髪入れずスロットを回転させ、緑の絵柄にする。

バツシャーマグナムの銃口にタツロットを合体させる。

キバ「お次はこれだあ!必殺「エンペラーアクアトルネード」

バツシャーマグナムから放たれる超広範囲の弾幕は逃げ場を用意させない…!

フラン「わわわ!こっちきた!」

モロに必殺技を喰らったフラン。

フラン「やだあ、びしょ濡れになっちゃった。」

レミリア「やつぱり今までと違いすぎる！何でこんなに強くなっているんだ!!」

今度はスロットを紫の色にしてドツガハンマーの柄尻とドツキーングさせる。

キバ「まだまだあ！必殺「エンペラーサンダースラップ」!!」

レミリア「マズイッ！」

タツロットの口から放出されるエネルギー型の弾幕を野球の如く飛ばし、電撃で麻痺させる。

レミリア「アババババババババ！」

そこからはドツガフォームと同じようにしてレミリアに大ダメージを与える。

レミリア「グハア!!」

フラン「夢解どうしたの？さっきまでこんなんじゃないやなかったはずだったよね？」

キバ「俺が本気だせばこんくらい力があるんだよ！思い知ったか!!」

それと装備「ザンバットソード」!!」

オーテンから飛来したザンバットソードを手に持ち、

ザンバットのウエイクアップフェッスルを吹かせる。

キバ「もう一丁！必殺「ファイナルザンバット・斬」!!」

レミリア「はい、仰せのままに。」

そういつてレミリアが手を空に向けて動かすと、霧が晴れて青い空に戻った。因みに姉妹はちゃんと影のあるところにいますから心配はないです。

霊夢「はあ、やっと終わった…。」

魔理沙「初めてだったけど異変解決ってこんなにも大変なのか。

ん〜あぁーっ！疲れたなー！」

美鈴「あの、夢解さん何をなさっているのですか？」

みんなが封太の方を見ると何やらピンクと黄緑を基調としたベルトを巻いていた。

霊夢「あなた、また何か変身？っていうやつをするの？」

魔理沙「そうだけ。もう誰も敵はいないのに。」

封太「まあ、あともう一仕事あるんですよ。」

そしておもむろに白いカセットを模した物を取り出す。

パチュリー「あ、あれは…。」

(起動音)『マイティノベルX!』

封太「特殊「ノベルゲーマー」変身」

2本のスロットのうち、右側にさして、中央のレバーを開く。

『ガシャット!』『ガツチャーン!』『レベルアップ!』

『マイティノベル 俺の言う通り マイティノベル 俺のストーリー X!』

今までのライダーとは大幅にかけ離れた見た目をしている白いライダーに変わった。

封太? 「では……スカーレット姉妹は太陽からの光に苦しむことはなく完全に無効化する!

流水も渡れることが可能で、にんにく、鰯の頭、折った柀の枝、炒り豆も無効化する!

そしてフランドール・スカーレットは能力を完全にコントロールできるようになる!

あと紅魔館は門含めて元通りになる!」

そういつて素早く変身解除する封太。

封太「まあ、大体こんなところかな。」

咲夜「今、何かしたの?」

封太「すぐに分かりますよ。それでは皆さん前後左右ご覧ください。」

なんということでしょう。壊れていた紅魔館が直っていくではありませんか。」

封太の言う通り、瓦礫が消える代わりに全て元に戻っていく。

咲夜「は!?!ちよつ、これは一体……!?!」

レミリア「おそらくさっきの白い姿が原因だろうが……説明しろ。」

封太「いいでしょう。あの白い姿にはある特殊能力がありましたね。

ズバリ、自分の言ったことが現実になる能力があるんですよ。

例えば「その病気治れ。」って言えば本当に治るんですよ。」

レミリア「何だその反則すぎる能力は!？」

封太「いやあなたも大概ですよ。」

こつちが完全上位互換なのは認めるけどね。

パチュリー「私は少し前にもその姿を見たわ。

あらゆる手を尽くしても治せなかった私の喘息を言霊一つで治したから

ね。」

こあ「え、パチュリー様の喘息をですか!？」

魔理沙「あれ、ちよつと待てよ…? 面白いえばレミリア達がどうこう言っていたよな

?

さっきの説明を考えると…。」

封太「論より証拠。さっき玄関に戻ったばかりですが外に出ましよう。」

またまた紅魔館・中庭

封太「ほらー大丈夫ですからー。何も心配することはないですからー。」

レミリア「きゅ、急に外に出れるようになったって言われても

はい、そうですか。と言えるかあ……うー☆」

封太「俺を信じてください！俺が大丈夫っていったら大丈夫なんです！」

フラン「じゃあ私、信じるよ……！」

そう言つて勇気を出して日の出る方へ歩みを進めたフラン。

その体は……燃え尽きることもなければ苦しむ様子もなかった。

フラン「あ……何ともない……。見て見てみてお姉様！フラン大丈夫だよ！」

レミリア「……。」

おそるおそる片足、片腕と少しずつ出して、体全体が日の元にさらされたレミリア。しかし、なにもおこらなかつた！

レミリア「本当だ。本当に私達は太陽を克服したというのか……!?!」

封太「言つときますけど自分のおかげなんですからね。」

レミリア「そ、それくらい百も承知だ！まあ礼は言つてやらんこともないが……。」

フラン「ありがとう！むかつ……え、えーとそういうえば夢解の下の名前つてなんていうの……？」

レミリア「む、そういうえば私も聞いてなかつたな変わり種、いや夢解とやら。」

魔理沙「私らも忘れちゃったからさ、改めて教えてくれねえか？」

封太「分かつたよ。じゃあ改めて自己紹介します。」

断言する。俺は問答無用の反則ヤロー。名前は、夢解封太です。」

フラン「分かった!じゃあこれからは封兄様って呼ぶね!」

ふっ、封兄……!

霊夢「…名字呼びに拘るアンタ的にこれはどうなのよ?」

封太「…その呼び方は気に入ったから許す!」

霊夢「許すんかい!」フラン「やったー!封兄様ー!ありがとうー!!」

そう言いながらハグしてくるフラン。

封太「おうわっ!」

ちよっ…全体重が俺に掛かって…!

ていうか俺、変身してないとただの一般人だし、もう疲れ切ってるから…

封太「だっ誰か…!ヤバイ…!」フラン「うわわっ」

尻餅をついてしまう。

咲夜&美鈴「妹様!」

フラン「ご、ごめんねー、封兄様。アハハ。」

封太「おいお前何笑って、フフツ。」

フランにつられて俺も笑ってまう。すると他のみんなまで笑う。

レミリア(ああ…これか。私が見ていた運命は…)

レミリアの目に映った風景。それはフランが周りに囲まれて幸せそうな顔をしている様子。

今まで見れるはずがないと思いつながら密かに願っていた運命。

それをあの男のおかげで現実のものになったことにレミリアは感謝しかなかった。

レミリア「因みに私は…。」

封太「あつ普通に夢解呼びで大丈夫です。」

レミリア「…。」

少なくとも感謝を口に出すことはもう少し先だと思つたレミリアであつた。

魔理沙「さてと、異変も解決したことだしもう帰るか。」

封太「ですねー。」

フラン「封兄様帰つちやうの…?」

上目遣いでコツチヲ見ヤガールフラン。

封太「そうだよ。でも大丈夫、また今度遊びに来るから。約束だからさ。」

フラン「ほんとに?絶対に、絶対だよ!約束だからね!」

封太「断言する。俺は絶対に守る。」

その証に俺はサムズアップ：ではなくピースするとフランもピースを返す。

ほんじゃま、もう帰つてベットにボタンキューしますか。

霊夢「そういえばアンタ、帰る家はどうするのよ？」

封太「・・・あ。」

わすれてた。

完つ全に頭からスツポリ抜けてたわそこんどこ。

霊夢「今日一日だけならうちで泊めてあげようか？宴会の準備もあるから好都合だし。」

えーと霊夢さん。そのお気持ちは嬉しいのですが…。

魔理沙「そんなこと言つて霊夢、お前夢解を利用して金儲けでも企んでるだろ？」

その点、私はそんなことしないし。私ん家にこいよ夢解。

上手いキノコ料理も食わしてやる。」

ごめん魔理沙…。キノコ料理はまた今度食べるから…。

フラン「ねえ封兄様、帰るところがないならフランの所に来る？」

フランちゃん、その言い方は色々と…マズイですよ。

持論だけど第5話でも言った通り一度泊まれば高確率でそこが自分の住処になってしまう。

だから俺としては泊まりたくない。

かといって断るものならじゃあどこで寝るの? って聞かれるだろう。

この時間帯で人里はムリポだし、残された選択は…野宿ぐらい?

封太「え、えーと申し訳ないんだけど誰かのところに泊まるのはちよつと…」

レミリア「じゃあどこで夜を明かす気だ?」

封太「そ、それは…。」

あ、アカン。何か上手く逃れる理由を…!

そう思つて焦っているとキバットが俺にコソコソ話しかけてくる。

キバット「封太!アレあるだろ、アレ!」

アレ?アレってどれ?

キバット「ほらあるだろ!キバットベルトの右腰の真ん中にあるアレ!」

!そうか、それがあつたわ!

封太「そ、そうそう!あるんですよ俺!帰るところが!」

霊夢「はあ?いやいやいや、どういう意味よ?幻想郷こに来てまだ半日も経つてないの

に

帰るところなんて用意できるわけないじゃない！」

封太「急ですがここで一句。

ないのなら

出してやるだけ

マイホーム

封太 断言の俳句

魔理沙「急に俳句なんか作ってどうした!？」

オーテンから茶色のフエッスルを取り出し、キバットに吹かせる。

封太「召喚 「キヤツスルドラン」

キバット「キヤツスルドラン！」

空中に展開したドチャクソデカイオーテンから出てくる。

それは竜と館が一体化したようなものだった。

こあ「デカア!!何ですかコレエ!？」

キバット「コイツはキヤツスルドラン。使い魔みたいなもんさ。

そして移動要塞としての役割もあるんだ。」

レミリア「ほ、ほう私の紅魔館といい勝負してるな。」

パチュリー「レミィ、建物の大きさを競ってるの?」

レミリア「う、うるさい!……うちの方が大きいはず……。」

ドランは紅魔館の外側に着陸する…あの感じじゃ跡がくつきり残るだろうけどそこ
んところは

見逃してクレメンス。

封太「じやつ、自分はこん中で寝ますんで。失礼します。」
オーテンを通過してドランの中に入る。

ドラン「(咆哮)」

雄たけびを上げドランは大空へと羽ばたく。

霊夢「明日に宴会開くから準備の約束忘れないでね！」

魔理沙「またなー夢解！」

フラン「封兄様ー！バイバーイ!!」

続く

休息の章

第20話 宴会と推しキャラとウオズ

霊夢 side

翌日・博麗神社

昨日の異変から一夜が明け、私は目を覚ます。

霊夢「うーん！よく寝たー。」

朝の支度を済ませ、神社の掃除をする。

霊夢「それにしても、昨日は色々ありすぎたわね。

まず夢解が幻想入りしたでしょ。

それから異変が発生して夢解が何か封印解いちゃって

夢解が余計なこととしたせいでフランドールが暴走してそれを止めて

異変を解決したと思ったら夢解がとんでもない能力を使って

…なんか殆ど夢解が何かしら関わってるわね。」

昨日のことを思い出すと何か夢解のやらかしらばかり出てきて気分が悪くなる。

もういいわ。昨日のことは一旦忘れませう。封太「おーい！はくれーい！」

…忘れるには時間がかかりそうだわ。

声のした方を見ると封太がやってきた。

…昨日の最後で出てきたどデカイ竜から降りてきてね。

封太「博麗おはよー。お前朝早いな。」

霊夢「おはよう。早いのはお互いにね。」

封太「たし蟹。それはそうと約束通り宴会の準備に来ましたんですけど

具体的に何をすればいいんですか？」

霊夢「ていうか思ってたんだけどホントにあんた1人でできるの？」

封太「そこはご心配なく。自分、50人にまで増えるので。」

霊夢「…もう驚かないわよ。昨日4人に増えたヤツとかいたし。

それじゃあ早速だけど…」

とまあそんなこんなで始めたけど…いざ見ると50人と4人じゃ違いすぎて内心驚いていたわ。

しかもコイツ料理までできるから私がやるのが指示だけでホントに楽だったわ。そして時は流れ宴会が始まった。

封太 side

夜・博麗神社

宴会が始まる少し前から魔理沙やレミリアさん達（なお、美鈴さん含む全員来てます）がやってきて、自分と初めてあう人も集まってくる。始まる前に霊夢から自己紹介してくれと言われたので前が出る。せつかくだが今回はふざけずに普通にやる。

封太「えー、昨日この幻想郷に来たばっかりの夢解封太といひます。

外の世界に戻らずこっちでいるつもりなので皆さん

新参者ですがよろしくお願ひいたします。」

パチパチと拍手が起こりいよいよ宴会のスタートだ。

始まってからというものの色々な人に絡まれた。

例えばマスゴミが今回の異変に関係している俺に質問してきやガール。

俺的にはそんなことより食事に集中したいし、何よりそんなのに興味がないね。

だから後日改めてでお願いしますっていつたら「今すぐ取材したいんです！」

ってしつこくてさあ。

近くにいた鬼さんに「この人があなたと酒の飲み比べをしたいようです」

って押しつけてヤツタゼ。

次にフランがやってきた。何でも俺の近くにいたいらしい。

断ろうものならスカーレットの姉貴に何されつか分かんねえから

困ったけど、丁度チルノと大ちゃんのコンビがやってきて

「せっかくだしあの子達と仲良くなつて友達を作つてきな」ってうまいこと誘導できた。他にも酔っぱらつた霊夢や魔理沙が来たが……まあこいつらはガン無視した。

そんなことよりあの人だよ。

果たして今回の宴会に来てるか微妙ではあるが……。

……いた、ちゃんと来ていた。

封太「すみません。隣、いいですか？」

???「貴方は……さつき自己紹介してた外来人？」

封太「そうです。夢解封太と言います。夢に解放の解。封印の封に太郎の太です。

それで隣に座つてお話してもよろしいでしょうか？」

???「ええ、別にいいわよ。」

封太「分かりました。では失礼します。」

俺はその人の隣に座る。

もう既に知っているとはいえ質問する。

封太「それで貴方の名前は何と言いますか？」

???「私はアリス。アリス・マーガトロイドよ。」

七色の人形遣い アリス・マーガトロイド 「魔法を扱う程度の能力／人形を扱う程

度の能力」

ウエーブのかかったショートの金髪に青い瞳。

ピンク色のカチューシャ、青を基調としたノースリーブワンピースに

肩には白いケープのような物を羽織っている。

人形よりも人形らしい見た目と美しさを兼ね備えた大人の女性、それがアリスさんだ。

そして俺の推しの人No.1である。

え？No.1ってことは他にもいるのか？それが何か？

断言する。推しが複数人いて何が悪い!!

アリス「それで、話って何？」

封太「まあその前に一杯どうぞ。注ぎますよ。」

アリス「あら、気が利くのね。有難う。」

一回飲ませて話を始める。

封太「アリスさんは普段何をして過ごしているんですか？」

アリス「私は人形や魔法の研究をしているわ。」

時々人里に行って人形劇をすることがあるわ。」

封太「人形ですか。奇遇ですね、形は違えど人の手で作られた物は僕も好きです。」

アリス「へえ、貴方も人形に興味があるのね。」

封太「はい。それにアリスさんが目指している自立した人形。

それっぽいのが外の世界で作られていて自立してるんですよ。」

アリス「私、そんなこと言ってるじゃないけど…何で私の目標を貴方が知ってるの…？」
ヤベツ、ボロが出ちった。

流石はアリスさん。そこに目ざとく気づくとは、この封太、その鋭さに惚れます。

封太「正直なところすぐに信じてもらえるか微妙なんですけど…」

そこから自分が東方のことやら本当はみんなのことは知っていたと説明する。

その間にも、定期的に酒を欠かさず注ぐ。

このやり取りの目的、それ即ちアリスさんの家に転がり込むことだ。

その為にも、酒で酔わせてガードを少しでも緩くする必要がある。

セコい方法ではあるがアリスさんの様な人にはこうするか思いつかん！

とにかく、素面が抜けて頼みやすくするには話を続けなくては…！

数十分後…

アリス「一からかかぬくわらひはらんらんってるんらける、ろくひてもるらくいはない
ろよ《だからね私は頑張ってるんだけどどうしても上手くないかないのよ》。」

封太「ハイ…ソーデスネ…。」

やりすぎた…。

呂律が回らないレベルにまで酔わせちゃまった…。

かれこれこの下りを聞くのも7回目だ。

だつてよお、俺酒とか飲んだことねえし、どこまでが酔つてるとか知らねえもん！

封太「あのアリスさん、そのことなんですけどちよつといいですか？」

アリス「んええ？あんだつて〜？／／」

ダメだ。その前に水を飲ませて、少しでも正気に戻さないと。

封太「アリスさん、これお水です。これを飲んで落ち着いてください。」

アリス「みるへらつたのおく？らあおろひろそうだからいいけど。／／」

何でもいいから早く飲んで思考を整えてください。

アリス「ぶはあ…えーと、で？どこまで話していたかしら…？ヒック！」

封太「ええとですから、アリスさんの目標である「完全な自立した人形作ること」。

これを目指すために外の世界の知識を持つて僕が協力すれば完成かもしれないので、

いつでも研究できるように僕がアリスさんの家にご厄介になつてもいいですか

？

つて話ですよ。」

アリス「あくそんな話だったような……」

よし！ホントはアリスさんの目標にたどり着けないことへの愚痴が9割を占めていたけど

酔いのおかげで上手くいつてる！

酒なんかこの世から無くなればいいと思つてたけど今日からは認識変えるぜ！

有難う酒！酒最高！ビバ酒！

封太「はい。僕もちゃんとした住まいが必要ですし、アリスさんさえ良ければ助手としてお世話になるというのはどうでしょうか？」

アリス「そうね……貴方のその外の世界の知識が気になるけど私の助手になるからにはそれ相応の実力がないと困るわね。」

封太「じゃあどうすればいいんですか？」

アリス「当然……貴方の弾幕で見極めることにするわ！」

……とどのつまりアリスさんと弾幕勝負しろってことオ！?

魔理沙「お？何だ何だ弾幕勝負かあ？おーいみんな！こっちこいよ！」

バツカ魔理沙お前ツ……！

魔理沙の声掛けに周囲の人（人間じゃないけど）が集まってきやガール。

「余興か？」「面白そうだな！」「喧嘩だ喧嘩だー！」

「ネ、ネタが…「なんだよまだいけんじゃねーか！ほら飲め飲め！」イヤアアアアアア
!!!」

…最後の人、今更ながら本当にごめんなさい。一回ぐらいなら取材許可OKするんで。

アリス「あら、人や妖怪が集まってきたわね…。さて、どうするのかしら？

まさかここまで来てナシなんてことはないよね？」

封太「…：分かりました。ただ、自分が勝ったら約束ですからね…！」

……あ、それと周りに迷惑がかからないよう広いところに行きましょう。」

一同（ガクツ）

広いところに移動し、オーテンから「ビヨンドライバー」を取り出して巻きつける。

そして、「ウオズミライドウオッチ」を起動させる。

『ウオズ！』

ベルトにセットしてウオッチのボタンを押し、パネルを展開させる。

『アクシオン！』

封太「変身「仮面ライダーウオズ」」

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

俺は祝福のライダー「仮面ライダーウオズ」に変身する。

ウオズ「装備「ジカンデスピア」」

ついでに専用武器「ジカンデスピア」を持っておく。

ウオズ「では、対戦よろしくお願いいたします。」（ペコリ）
アリス「ん、こちらこそ。」

そうしてアリスさんとの弾幕勝負が始まる。

基本的に弾幕を回避するか武器で打ち消すだけだ。

アリス「ほんの少しだけ本気で行くわ。操符「マリオネットパラル」

流れを変えたのかアリスさんがスペルカードを発動する。

俺も紫色を基調としたウオツチを取り出す。

『シノビー！』ガチャン！『アクション！』

ウオズ「派生「フューチャーリングシノビ」

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シ

ノビー！』

珍妙な技を使うフューチャーリングシノビに変わる。

ウオズ「からの必殺「忍法 時間縛りの術」

無数のウオズに分身して各自で弾幕を一掃する。

アリス「あれだけの弾幕を…中々の実力ね。」

ウオズ「まだまだ行きます！」

今度はオレンジ色を中心としたウオツチを起動させる。

『クイズ！』ガチャン！『アクション！』

ウオズ「派生「フューチャーリングクイズ」」

『投影！フューチャータイム！パッション！ファッション！クエスチョン！』

フューチャーリングクイズ！クイズ！』

仮面ライダークイズの力を扱うフューチャーリングクイズに変わる。

ウオズ「必殺「クイズショックブレーク」」

そして、間髪入れず必殺技を発動する。

ウオズ「さて急ですが問題です。

2020年は平成32年である。○か×か？」

アリス「元号の問題？でもここにはそういうのなし・・・当てずっぽうだけど×かしら？」

ピンポンピンポンピンポン！

アリスさんの頭上で赤く大きな○がファンファーレと共に現れる。

アリス「これは、正解ってことでいいよね…？」

ウオズ「ということは…？」

(ボガーン！)

ウオズ「ギヤアアアアアアアア!!」

こつちが爆発しちつた。

霊夢「へ？らに？らにわおほつたの…？」

ウオズ「ま、まさか回答者が正解すると出題者側が爆発するなんて…予想外でつせ…」

アリス「あの大丈夫？」

ウオズ「こんな時に心配するなんてアリスさんは優しいですね。」

そんなところに惚れてしまう封太です。

アリス「急に爆発なんかしたら心配するわよ…。」

ウオズ「ですが問題ありません！いつでも戦闘続行可能です！」（ガバア！）

即座に起き上がる。

アリス「そ、そうなのね。じゃあ次いくわよ。操符「マニピュレイトパペット」

お次は金色のライダーが描かれたウオツチを起動する。

『キカイ！』ガチャン！『アクション！』

ウオズ「派生「フューチャーリングキカイ」

『投影！フューチャータイム！デカイ！ハカイ！ゴーカイ！

フューチャーリングキカイ！キカイ！』

仮面ライダーキカイを模した姿、フューチャーリングキカイに変わる。

ウォズ「必殺「フルメタルブレイク」」

空中に仮面ライダーキカイの腕を発生させ、俺の動きに合わせて動き弾幕を薙ぎ払う。

あと偶然の産物だけど勢いが強くて砂誇りが舞う。

アリス「くっ、前が見えない。」

この隙に基本フォームのノーマルウォズに戻る↑ノーマルウォズってなんじやそりゃ

ビヨンドドライバーのレバーを操作し、必殺技を発動する。

『ビヨンドザタイム!』

ウォズ「これで決めます。必殺「タイムエクスプロージョン」

『タイムエクスプロージョン!』

キューブ状の時計型弾幕を形成し、それを蹴り飛ばす

・・・しかし、それはアリスの髪を数本散らせただけで外したも同然だった。

魔理沙「ありゃ?」

アリス「……。」

俺は変身解除してアリスさんの近づいて謝罪する。

封太「アリスさん、すみません!」

アリス「どういふこと？」

封太「自分、戦つてる途中で思つたんです。アリスさんを怪我させるなんて無理だつて。」

そんなことしてまで泊まるくらいならいつそのことやめたほうがいいと。

ですからこの勝負は僕の不戦敗！よつてアリスさんの勝利です！」

一同「はあ？」

一瞬の沈黙が辺りを包み込む。

一同「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
!?!」

「おいなんだよそれ！」「最後までやれよ！」「時間を返せー！」「酒も返せー！」

やはりどうか案の定大ブーイングがきやガール。そちらにも頭を下げる。

封太「皆さんにとって納得のいかない幕切れであるのは重々承知しています。

そこで自分から提案があります。

今後、如何なる理由でもここに居る皆さんの弾幕勝負を一度だけ引き受けます！

それで今日のことを埋め合わせにしてください！」

それから懸命に説得して何とか場の騒ぎを治めた。各々元の場所に戻つて酒を飲みなおす。

俺も席に戻ろうとしたが…

アリス「ちよつと待って。」

アリスさんに呼び止められる。

封太「どうしたんですか？」

アリス「もし私が勝った時にどうするか何も話していなかったと思つてね。」

封太「あ！そういうば！」

アリス「だから今決めてもいいかしら。私が勝者だから拒否権はないわ。」

封太「はっはい。アリスさんの仰せのままに。」

アリス「では…あなたはこれから私の家で私と同居すること。」

封太「…え？」

一瞬頭が真っ白になった。

封太「え、いや、でも負けたし、え？ホントに何ですか？」

アリス「理由なんている？まあ強いて言うなら…貴方はとても強いし、

とても役立ちそうな助手だから手放すのは惜しいからかしら。

とにかくこれはもう決定事項だから。」

封太「…はい分かりました。これからよろしくお願いいたします。」

アリス「ええこちらこそよろしく。」

靈夢「お〜い！さつようははりくはへこつへひらは〜い！」

封太「あ、ああ分かったすぐ行く〜！あ、では失礼します。対戦ありがとうございました！」

アリス「あ、うん有難う〜。」

封太「ほら持つてきたぞ〜：うつわ酒臭つき。お前飲みすぎだろ。」

靈夢「〜うるはいらね〜さつようははりははらつてはけをいれらいろいろよ《うるさいわね雑用係は黙つて酒入れればいいのよ》。」

封太「〜か俺は雑用係じゃねえちゅ〜うの。」

アリス「……。（本当はあんな余興のような勝負ですら相手を傷つけないあなたが

幻想郷で生きていけるか心配だったのよ。）」

宴会が終わつてみんなが帰つた後に、片付けを終えてドランに乗つて博麗神社をあとにした。

ドラン「2日続けてわしを飛び立たせるとはお主は本当に使い魔使いが荒いのう。」

ドランさんつて爺口調なんだと知りながら深い眠りについた封太であった。

→そりや劇中で喋らなかつたし。

続く

第21話 ルーミアの食料問題

魔法の森

さて、あれから朝になり俺はアリスさんの家に向かう…その前にある人に会おうとしていた。

封太「はてさてここにいるのかいないのか…。」

その人とはルーミアである。

ルーミアとは「本人が人間を食べなくてもいいようにする為の方法を考えておく。」

といった話を約束していたのだ。(詳しくは「第7話 融合」を参照)

それで肝心の人を食べなくても済む方法なんだけど…色々考えた結果

「戦国ドライバーとヒマワリロックシードをあげて、それで腹を満たしてもらおう。」

という結論に至った。

もう2日も経ってるし、それ以前から何も食べてないことを考慮するといつ人を食べ

ちやつても

おかしくない。だから一刻も早く見つける必要がある。

封太「あの人は明るい所が苦手なはずだから昼間は日の当たりにくい場所にいると

思つてここに來たけど……。見当たらんなあ。」

因みにドラン爺さんは魔法の森に來たときにオーテン戻つてもらつた。

ドラン「はあようやく休めるわい。もう当分は呼び出さんでくれんかのう。」（戻す時のセリフ）

封太「ルーミアさん！ いますかー？ 俺です、夢解封太でーす！

貴方との約束を果たしに來ましたー！」

ル「呼んだ？」

：何か呼んだら即落ち2コマみたくすぐ見つかつたんですけど……。

ま、まあいいや。これで本題に進める。

封太「お久しぶりですルーミアさん。先日、ルーミアさんの食糧事情を解決すると
という約束をしていたので、今日はそれを果たしにきたんです。

2日も掛かつたことはすみませんでした。」

ル「あーそんなこと言つてたわね。でもそれ、もういいから。」

封太「はい？ もういい？ どういうことですか？」

ル「だから、もう私の方で解決したから。」

封太「え？ でもどうやって？ 人里にいる人は食べてはいけなはずだし、普通の食べ物だつて

そんな簡単に手に入るわけないですし…。」

ル「簡単なことよ。」

そう言つてルーミアは近くにあつたキノコを手に取り食べる。

ル「人間が食べられないならキノコを食べればいいじゃない」

封太「ズコーツ！」（ズコーツ！）

ルーミアのその発言に俺は昭和のようななひつくり返つたりアクションをした。

封太「な、何スかそのマリーアントワネット理論は…。」

ル「マリーなんたらが知らないけどとにかくこれで食料に悩む必要はなくなつたわ。

だからあなたはもういいわよ。」

封太「じゃ、じゃあこれは結局必要ないってことなんですわ…。」

トホホく別に苦労したわけじゃねえけど骨折り損のくたびれ儲け感が否めねえぜ。

ル「なにそれ？」

とりま、戦国ドライバーとヒマワリロックシードの仕様を説明する。

ル「へえー、本当にそんなものでお腹が満たせるんだ。

ちよつと面白そうだし、私に頂戴よ。」

封太「え、持っていくんですか？」

ル「まあね。冬とか外に出れないときとか使いどころはいくらでもありそうだし。」

封太「言われてみたら確かに……！でしたら是非！バリバリ使ってください！」
ル「ハハ、まあそんなに使うことないと思うけど……。」

封太「ではルーミアさん。自分はこれから行かなきゃ行けない所があるので

この辺で失礼します。また、いつかどこかで会いましょう。」

ル「ええ、またね。」

そしてルーミアは一式を持って森の奥へと行った。

さて、ルーミアの方はもう終わったし、今度はアリスさんの家に……つて……

封太「……ア……ー……ー……！」

重大なことに今更気づいた俺は思わず頭を抱え込む。

封太「しまった……アリスさんの家がどこか全ツ然聞いてなかった……！」

霊夢あの酔っ払いに呼びされたせいで肝心なそこんとこ聞いとらんかったわ。

封太「くそお……一体どうすりやええねん……。」

え？お前のことだからオーテン使えば一発だろつて？

バツキヤローが……。いくら封太さんとして場所も分からんのにオーテンは出せねーよ。

何かいい方法はないか頭を張り巡らせるが……。

封太「……う……んダメだ！どくしても思いつかん！」

キバツト「お前なあ、そういうのは主人公特権で歩いているうちになんやかんやで

辿り着けるんはずなんだからそこまで深刻に考えなくてもいいだろ。

恋愛ものでも住所が分からなくて近くの家に聞こうとしたらその家こそが

目的地だったなんてことあるんだからここは迷わず先に進むべきだ。」

封太「迷わずとか言ってるけどここ森だから近くに家なんてねーし！」

主人公特権は毎回都合よく発動するわけじゃねーし！

そもそもテメエいつからいやがった!？」

キバツト「え? だってドラン爺さんは俺たちキバフアミリーの家みたいなものだから

19話の終わりからずーっと自分の部屋にいたけど?」

お前がドラン爺さんを戻そうとしたから

その時に外に出て少し離れたところにいたけど?」

封太「初耳だけどその設定!?!あとキバフアミリーとか新しいの作んないでくれる!?!」

キバツト「そういうお前だつてさつきマリーアントワネット理論とか作つてたくせによ。」

じゃあキバ系ライダーっての方が良かったか?」

封太「そういう問題じゃねえから!」

ああもういい…。こんなやつと話してたらこっちの頭がおかしくなつてまう。

しかし、周りをちよこまかと動くキバツトを見て封太は思いつく。

封太「そうだ！いくこつとおも〜いつ〜いたあくあつ♪」

キバツト「うわ気持ちわる。」

封太「うつせえ。とにかく早速実行に移すぞ。召喚「ゴウラム」」

オーテンからゴウラムを呼び出す。

ゴ「やったー！久々の出番だー！」

封太「そして他のやつらは、ちゃんと召喚呼び出すするけど字面上では以下省略！」

ゴ「以下省略!?一応今回が初登場なのにそんな扱いで大丈夫なんですか!？」

キバツト「全部律儀に書いてたら字数がえげつないことになるんだよ！」

箸休めなんだから不必要に文字が多いと読み疲れるだろーが！

ちよつとは読者の事も考えろよこの出番欲しがり金属クワガタ！」

ゴ「理由がメメタア！しかも何ですか金属クワガタって、失礼すぎませんかこのコウ

モリ!？」

キバツト「ハン！お前はここでオリジナルフォームの役割を担ったけどそれが限界だ。

所詮は二次創作でしか過ぎないし、それに引き換え俺は公式の時点で
実質変身ベルトという超がつくほどの重要な役割があるんだよ！

つまり俺の方が立場が上なんだよ！」

ゴ「うわ何かマウントとってきた！で、でもワタクシとワタクシの中の人の方が先輩ですよ！」

キバツト「ええ、知らないのおく？こっちが先に声優として芸能界入りしたし

そっちは翌年に俳優デビューなんだから

芸能人としてはこっちの方が先輩なんですけどおく？」

ゴ「いや面倒くさいこと言いますねこのコウモリく！？」

封太「ちよつと2人ともうるさいんですけど？」

片や出番禁止と書いて出禁。片やスペランカー先生にでもしましょうか？」（二

コニコ）

笑顔だけど笑ってない封太が脅す。

ゴ「ヒツ!?そつそれだけはやめてください！」

キバツト「オイ！お前そいつの存在どっから持ってきたんだよ!!？」

某ピクで探したら何か弱そうなのありました☆by作者

封太「とにかく俺の気分を害するなよ。」

ゴ「はっはい！これから以後気を付けます！」

キバツト（なんだよコイツ…まるで魔王じゃねえか…。）

封太「じゃあみんな、アリスさんの家を探してくれ。頼んだよ。」

召喚した大量のサポートメカやサポートキャラにアリスさんの家を探してもらおう。俺一人ではアリスさんの家を見つけないのはほぼ不可能。

なら頭数を増やしてみんなで探すだけ。こんだけ大量にいれば見つかるだろう。

封太「ほらお前も行つた行つた。」

ゴ「はいー！了解しましたー！」

ゴウ君は素直に飛んでいったがキバットだけはいやがつていた。

キバット「何で俺まで彼女になるわけでもない女の家を探さなきゃいけないんだよ。

めんどくせえし自分の力で探せよ。」

封太「お前も協力しろ。これは命令だ。」

キバット「……。」

途端にキバットは無言になり、探しに飛んでいった。

アリス邸 玄関前

あれからみんなの尽力もあって何とか見つかってアリスさんの家の前まで来た。

封太「みんな本当にありがとね。今日はもう休んでいいよ。」

「はあくようやく休めるぜ。」「疲れた〜。」「昼寝しよう。」

キバット「ハッ！俺は今まだ（オーテンに入り込んだことで聞こえなくなりました。）

全員戻したところで玄関をノックする。

封太「アリスさーん！ごめんくださいーい、夢解ですー。」（ドンドンドンドン！）
少しするとドアが開かれる。

アリス「ちよつと誰なのよ…そんなに叩かなくてももつてあれ？」

封太「どうも！改めまして今日からお世話になります！夢解封太です！

よろしくお願いします！」

アリス「あら、よく来たわね。いらつしやい。さあ中に入って。」

封太「はい！お邪魔します！」

アリス「しかし、家がどこにあるのか教えなかつたのによくここに來れたわね。」

封太「まあそうですねですけど。自分の使い魔というか仲間が協力してくれて。」

アリス「へえ、まあ丁度良かったわ。探しに行こうと考えていたし手間が省けたわ。」

封太「ところで自分の部屋はどこですか？あとこの家の間取りを一通り知りたいので

案内してくださいませんか？

アリス「いいわよ。」

アリス「ここがあなたの部屋ね。」

封太「分かりました！」

アリス「ここがキッチン。火は大体魔法だけど偶には本物の火で起こすこともある

わ。」

封太「成程。」

アリス「で、こっちは浴槽よ。」

封太「はあ。あの、お湯はどうやって用意してるんですか？」

アリス「ああ、それは魔法で水を出して後は火で温めてるだけよ。」

封太「へえ、そういう風にしてるんですね。」

アリス「トイレはここよ。」

封太「これは一体どうやって流してるんですか？」

アリス「レバーレバを引けば……こうやって開いて下に落ちるわ。」

封太「あくそんなんですね……ハハ、流星は幻想郷。」

外の常識をそのままにしてたらダメですね……。」

アリス「どうしたの？」

封太「何と言いますか……カルチャーシ文ョ化ツのク進を実感させられたなあと思ひまして。」

正直に言うとは、文明に関しては外の方がずっといい。

水洗トイレは当たり前、風呂は給湯機を利用したバスタブ。

キッチンがガスコンロかIHコンロ。

あと電力に関してはここにはない。故に電気で動くものはない。

現代っ子の俺にはこの生活水準の低さは堪える。

封太「アリスさん、許可を頂きたいのですが。」

アリス「何の？」

封太「家のリフォーム改築の許可をください！」

結論から言うとおっさりと承諾された。

「今よりもずっと便利な暮らしになります」と説得したらOKを出してくれた。

と、いうわけなんです・・・

「オーズドライブ」を巻き付けて「クワガタメダル」「カマキリメダル」「バッタメダル」を装填し、「オーズスキャナー」で変身する。

封太「スペルカード発動 派生「ガタキリバコンボ」変身！」（キン！キン！キン！）

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガクガタガタ・キリツバ・ガタキリバッ！』♪

ゼンカイの序盤でも使ってた「仮面ライダーオーズ ガタキリバコンボ」に変身する。早速このフォームの特殊能力の分身で「ブレンチシエイド」を生み出す。

改築の為の素材は既にノベルゲーマーで用意しており、あとは天才物理学者の頭脳で現実的な設計図を書き、家具の運び出し↓リフォームする箇所で不要なのを壊す

↓片付け↓新しい土台や設置する物を作る↓仕上げっていった感じだ。

因みにアリスさんはこの間、ずっと外にいさせるわけにもいかないのでドラン爺さん
：はここではデカくて地上に足をつけるのは無理だしそもそもお疲れなので
代わりに「シユードラン」の中で待つてもらおう。

説明しよう！シユードランとは？

愛称・シユーちゃん。キャツスルドランの真の力を解放させるのと

緊急時用のドラン爺さんの代わりの役割を兼ねている。

故にシユーちゃんの中はドラン爺さんと変わらない広さをもっている。

時々外に出てアリスさんに見てもらい、細かな修正を入れる。

そして、2人の意見を取り入れた理想の家が完成した。

間取りというか変更点を挙げると、床はフローリング

キッチンにはIHコンロになり、風呂（シャワー付き）は一般的なやつで、

トイレは水洗式（なおジャグジーはない）、照明は全室LED。

この工程、全て今日中に終わらせました。

ん？50人でも半日ぐらいは無理なんじゃないかって？

はは、人間必死になれば何とでもなりますよ。それに別に全部が全部リフォームする

わけじゃ

ないからそこまで時間掛からなかったし。

寧ろ、電気・水道・ガスの供給する機械の設計・製造がしんどかった。

電気は仮面ライダー・ストロングのバイク「カブトロウ」にある

「空気中の静電気を吸収する」を利用してその機能をもった特殊なアンテナで集めて変換した電力をメインにして仮面ライダーフォーゼの「エレキスイッチ」の力をサブとして

足りない時はそつちで補う。

あと、第3の供給源としてソーラーパネルも使っている。

水も同様に空気中の水素を集め、そこから変換して問題のない水として使えるような機械と貯蔵タンクを創った。それ以外にも屋根に落ちた雨水も同様に水として再利用できる。

因みに最大貯蔵量は100000ℓです。

そして一番手間取ったのはガスだ。

これに関してはどうしたかというバイオガスで補う。

また説明しよう！バイオガスとは？

超分かりやすくドチャクソ砕けた言い方になるとゴミを中心に捨てるはずの物を微生物の力や発酵することで何か電気とかガスにするのだ！

バイオガスを生成する機械は他人に弄られたりしたらマズイから
床下に新しく造った地下階段でその中に置いている。

別々の部屋で区切って電気や水も同様にここにある。

廃棄物等はすべてこの機械に入り、そしてガスとして使う。

さて、リフォームした結果はざっとこんなもんな。

封太「ではアリスさん。改めまして今日からよろしくお願いします！」

アリス「ええよろしくね。疲れたでしょうし、お茶でも飲む？」

封太「はい是非！頂きます！」

続く

ご協力頂いたサポートキャラやサポートメカの皆様

仮面ライダークウガから「ゴウラム」

仮面ライダー龍騎から「ドラグレッダー」「ナイトウイング」「ボルキャンサー」

「マグナギガ」「エビルダイバー」「メタルゲラス」「ベノスネーカー」「デストワイルダー」

「ギガゼール」「バイオグリーザ」「プランウイング」「ドラグブラッカー」

「ゴルドフェニックス」「アビスハンマー」「アビスラッシュャー」

仮面ライダーファイズから「オートバジン」

仮面ライダー響鬼から「アカネタカ」「ルリオオカミ」「リョクオオザル」「キハダガ

二

「ニビイロヘビ」「アサギワシ」「キアカシシ」「セイジガエル」「コガネオオカミ」

仮面ライダーカブトから 変身用の全てのゼクター&強化用のゼクター

仮面ライダーキバから キバットとゆかいな変身アイテムたち

タツロット「いやカブトはまだ分かりませんが僕たちは別に省略しなくてもいいでしょうが！」

仮面ライダーWから 「スタッグフォン」「バットショット」「スパイダーショット」

「フロッグポッド」「デンデンセンサー」「ビートルフォン」「ファングメモリ」

「エクストリームメモリ」

仮面ライダーオーズから 「タカカンドロイド」「タコカンドロイド」「バツタカンドロイド」

「トラカンドロイド」「電気ウナギカンドロイド」「ゴリラカンドロイド」

「クジャクカンドロイド」「プテラカンドロイド」「トリケラカンドロイド」

仮面ライダーフォーゼから 「バガミール」「ポテチョキン」「フラシエキー」「ホルワソコフ」

「ソフトーニャ」「ナゲジャロイカ」

仮面ライダーウィザードから 「レッドガルーダ」「ブルーユニコーン」「イエローク

ラーケン」

「バイオレットゴーレム」「グリーングリフォン」「ホワイトガルーダ」「ブラックケルベロス」

仮面ライダードライブから 全てのシフトカー、シグナルバイク、バイラルコア

仮面ライダーゴーストから 「コンドルデンワ」「バットクロック」「クモランタン」

「コブラケータイ」

仮面ライダーエグゼイドから 「ロボットゲーマー」「ビートゲーマー」「コンバットゲーマー」

「チャンバラゲーマー」「スポーツゲーマー」「ハンターゲーマー」「バーガーゲーマー」

「サファリゲーマー」「タンクゲーマー」「ファンタジーゲーマー」

「シミュレーションゲーマー」「レガシーゲーマー」

仮面ライダービルドから 「クローズドラゴン」

仮面ライダージオウから 「タカウオッチロイド」「コダマスイカアームズ」